

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第12集

つき なわ て 遺 跡
月 縄 手 遺 跡
き せい ちょう
貴 生 町 遺 跡

1990

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

このたび、財団法人愛知県埋蔵文化財センターは、名古屋環状2号線建設工事に伴う事前調査として、月縄手遺跡・貴生町遺跡の発掘調査を愛知県の委託事業として実施しました。この結果、月縄手遺跡においては、当地方では調査例が少ない弥生時代前期の土坑や包含層が検出され、稲作農耕の伝播や開始に関しての非常に貴重な例として注目されました。一方、貴生町遺跡では、当初予想されていなかった古墳時代の井戸や土坑が検出され、廻間遺跡や朝日遺跡との関連で、名古屋市北西部の古墳時代の人々の生活に新たな知見が得られたと考えております。

調査にあたり、愛知県教育委員会の御指導、並びに地元住民の方々及び関係諸機関・関係者の皆様に格別の御協力をいただきましたことに深く感謝申し上げる次第であります。

また、本報告書が地域史研究や埋蔵文化財に対する御理解の一助となれば幸いと存じます。

平成2年3月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

理事長 松川 誠 次

目 次

I . 調査の経過	1
1 . 調査にいたる経過	1
2 . 調査の経過	1
II . 位置と環境	2
III . 月縄手遺跡	3
1 . 概要	5
(1)調査区	5
(2)基本層序	6
2 . 遺構	7
(1)弥生時代の遺構	7
(2)古墳時代の遺構	11
3 . 遺物	13
(1)出土状況	13
(2)弥生時代の遺物	13
(3)古墳時代の遺物	15
4 . 自然科学的分析	27
(1)弥生時代前期土器胎土の重鉍物分析	27
(2)月縄手遺跡包含層の堆積環境について	36
5 . まとめ	41
IV . 貴生町遺跡	51
1 . 概要	53
2 . 遺構	54
3 . 遺物	57
(1)土器	57
(2)石器	61
4 . まとめ	62

表 目 次

第1表 調査日程	1	第6表 甕形土器の文様構成	44
第2表 月縄手遺跡関連胎土分析試料表	30	第7表 月縄手遺跡出土遺物一覧表	48
第3表 月縄手遺跡関連試料 胎土重鉍物組成	31	第8表 月縄手遺跡出土遺物一覧表	49
第4表 月縄手遺跡の珪藻分析結果	39	第9表 貴生町遺跡遺構一覧表	56
第5表 壺形土器の文様構成	43	第10表 貴生町遺跡遺物一覧表	62

図版目次

月縄手遺跡

図版 1	上……A区（西より）
	中……B区調査前（西より）
	下……C区全景（南より）
図版 2	上……B区西側上層検出状況（南より）
	中……B区東側上層検出状況（南より）
	下……B区下層検出状況（南西より）
図版 3	上……B区西側下層検出状況（南より）
	中……B区東側下層検出状況（南より）
	下……B区東側下層遺構（南より）
図版 4	上……B区SK17（南東より）
	中……B区SK18（南より）
	下……B区SK20（南より）
図版 5	上……B区SK22（北より）
	中……B区SK24（南より）
	下……B区東側調査風景（東より）
図版 6	上……B区SX01（南より）
	中……B区SX01遺物出土状況（南東より）
	下……B区SX01（北西より）
図版 7	上……B区東側 南壁（北より）
	中……B区西側 南壁（北より）
	下……B区西側調査風景（西より）
図版 8	月縄手遺跡 遺物写真
図版 9	月縄手遺跡 遺物写真
図版10	月縄手遺跡 遺物写真
図版11	月縄手遺跡 遺物写真
図版12	月縄手遺跡 遺物写真

貴生町遺跡

図版13	上……調査前風景（A区北西より）
	中……A区調査風景（西より）
	下……B区調査風景（南西より）
図版14	上……A区上層検出状況（西より）
	中……A区下層検出状況（西より）
	下……SE01（東より）
図版15	上……SX01（東より）
	中……SK02（東より）
	下……SK01（北より）
図版16	上……B区全景（北より）
	中……B区全景（南西より）
	下……NR01上層土器64出土状態（東より）
図版17	上……C区全景（北より）
	中……D区全景（西より）
	下……E区全景（西より）
図版18	貴生町遺跡 遺物写真
図版19	貴生町遺跡 遺物写真
図版20	貴生町遺跡 遺物写真

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の主要遺跡……………	2
-----	--------------------	---

月縄手遺跡

第2図	調査区位置図……………	5
第3図	調査区基本土層図……………	6
第4図	B区弥生時代遺構配置図……………	8
第5図	C区遺構配置図……………	9
第6図	B区SK17平面図及び断面図……………	10
第7図	B区SK18平面図及び断面図……………	10
第8図	B区古墳時代遺構配置図……………	12
第9図	主要土器分類概念図……………	13
第10図	月縄手遺跡弥生時代土器実測図(1)……………	16
第11図	月縄手遺跡弥生時代土器実測図(2)……………	17
第12図	月縄手遺跡弥生時代土器実測図(3)……………	18
第13図	月縄手遺跡弥生時代土器実測図(4)……………	19
第14図	月縄手遺跡弥生時代土器実測図(5)……………	20
第15図	月縄手遺跡弥生時代土器実測図(6)……………	21
第16図	月縄手遺跡弥生時代土器実測図(7)……………	22
第17図	月縄手遺跡弥生時代土器実測図(8)……………	23
第18図	月縄手遺跡弥生時代土器実測図(9)……………	24
第19図	月縄手遺跡弥生時代土器拓影……………	25
第20図	月縄手遺跡弥生時代土器実測図……………	26
第21図	月縄手遺跡関連資料 胎土重鉾物組成ダイアグラム……………	32
第22図	月縄手遺跡関連資料 胎土重鉾物組成ダイアグラム（グループ別）……………	33
第23図	月縄手遺跡関連資料 偏光顕微鏡写真(1)……………	34
第24図	月縄手遺跡関連資料 偏光顕微鏡写真(2)……………	35
第25図	月縄手遺跡の模式柱状図……………	40
第26図	愛知県遠賀川系土器出土遺跡分布図……………	42
第27図	尾張北西部遺跡分布図……………	43
第28図	尾張地域出土壺形土器による偏年概観……………	45

貴生町遺跡

第29図	調査区位置図……………	53
第30図	各調査区比高図……………	53
第31図	SE01・SK01遺構図……………	54
第32図	A・B区遺構図……………	55
第33図	A区古墳時代遺構図……………	55
第34図	B区東壁土層図……………	56
第35図	貴生町遺跡出土土器(1)……………	58
第36図	貴生町遺跡出土土器(2)……………	59
第37図	貴生町遺跡出土土器(3)……………	60
第38図	貴生町遺跡出土石器……………	61

例 言

1. 本書は愛知県名古屋市西区比良に所在する月縄手遺跡と、同じく西区貴生町に所在する貴生町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は名古屋環状2号線（一般国道302号）建設に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受け、財団法人愛知県埋蔵文化財センターが、昭和62年4～9月にかけて行った。
3. 調査担当者は下記のとおりである
月縄手遺跡 水谷朋和、平田睦美、松田訓
貴生町遺跡 平田睦美、宮腰健司、佐藤公保 飴谷一
4. 調査にあたっては、次の各関係機関の御協力を得た。
愛知県教育委員会文化財課、建設省愛知国道工事事務所、日本道路公団名古屋建設局、名古屋市教育委員会文化課
5. 本書の執筆分担は下記のとおりである。
I・II 宮腰健司
III、月縄手遺跡
1～3・5 松田訓
4-(1) バリノ・サーヴェイ株式会社
4-(2) 森勇一
IV、貴生町遺跡
1～3-(1)・4 宮腰健司
3-(1)～(2) 佐藤公保
6. 調査区の座標は、国土座標Ⅶ座標系に準拠する。
7. 遺構の旧番号と新番号の対照、遺物の登録番号は表として本文中に示した。
8. 本書の執筆にあたり下記の諸機関・諸氏に御指導・御助言をいただいた。
記して感謝したい。(敬称略)
石川日出志、泉拓良、李弘鐘、小郡市教育委員会、貝殻山貝塚資料館、
木村有作、紅村弘、齋藤基生、佐藤由紀男、高橋信明、田崎博之、立松宏、
永井宏幸、名古屋大学考古学研究室、南山大学人類学博物館、野口哲也、
野澤則幸、速水伸也、深澤芳樹、福岡市教育委員会、増田安生、見晴台考古資料館、山崎純男、山下勝年、渡辺誠

I . 調査の経過

1 . 調査にいたる経過

昭和62年4月～9月にかけて、名古屋環状2号線に伴う事前調査として、名古屋市西区内の2遺跡の発掘調査が行なわれた。

月縄手遺跡は名古屋西区比良地内にあり、昭和60年の愛知県埋蔵文化財センターの試掘調査により確認された。試掘時には、比良城跡（中～近世）に近接していることで、「比良遺跡」と呼称していたが、調査の結果比良城と関連のある遺構・遺物が検出されなかったことや、遺跡の広がりが比較的狭いと思われることにより、小字名をとって「月縄手遺跡」と呼ぶこととした。

貴生町遺跡は名古屋市西区貴生町地内にあり、昭和53年10月の環状2号線小田井道路改良工事中に確認された。その後道路（地先道）部分に関しては、同年11月～12月にかけて、愛知県教育委員会によって発掘調査が行なわれた。また、昭和60年には愛知県埋蔵文化財センターによって範囲確認のための試掘調査がなされている。遺跡名に関しては、昭和53年時の調査以来、今回の調査を含めて大字名をとった「小田井遺跡」と呼称されていたが、遺跡の範囲が広くないと思われることや、名古屋市教育委員会によって使われている遺跡名との統一を考え、本書より「貴生町遺跡」と呼ぶことにした。

2 . 調査の経過

発掘調査が名古屋環状2号線の橋脚部分を対象としたため、調査は月縄手遺跡でA～Cの3地区、貴生町遺跡でA～Gの7地区に分けて行なわれた。

月縄手遺跡は、6月下旬より三ヶ所同時に調査を行ったが、当初の予想外の弥生時代面が確認されたことや湧水のため、調査終了は8月中旬となった。

貴生町遺跡の7調査句のうち、F・G区に関しては試掘により遺構が予想されなかったため、立ち合い調査とした。その他A・B・D・E区は4月から5月にかけて、C区は9月に調査を行った。

調査 区 期 間	貴生町遺跡							月縄手遺跡		
	A	B	C	D	E	F	G	A	B	C
4	■			■	■	■	■			
5		■		■		■				
6								■	■	■
7								■	■	■
8								■	■	■
9			■							

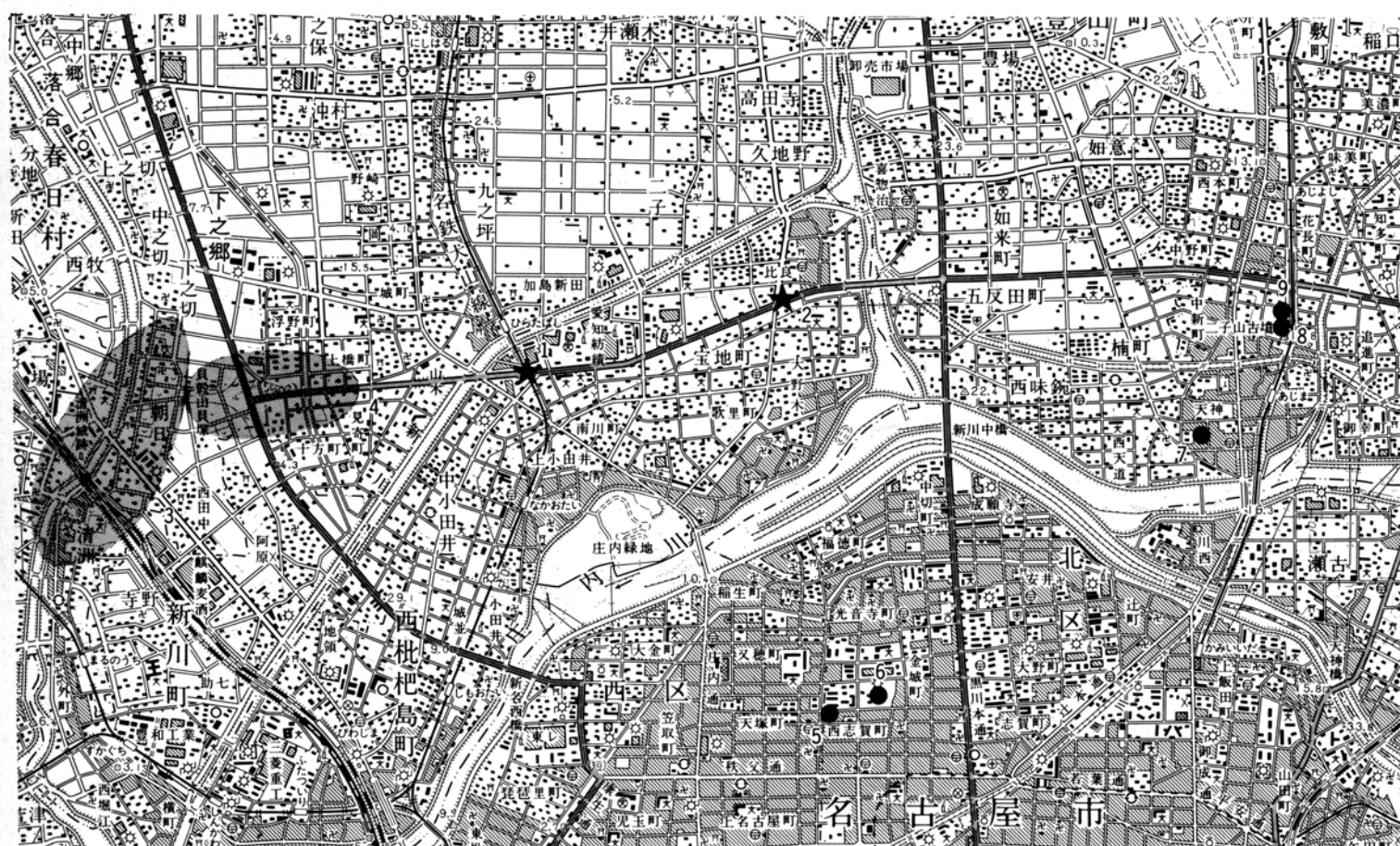
第1表 調査日程

II. 位置と環境

月縄手遺跡・貴生町遺跡は、愛知県の名古屋市北西部にある名古屋市西区に位置する。

両遺跡とも尾張沖積平野の南東端に位置し、五条川・地蔵川・庄内川に挟まれた地帯に幾つも存在する微高地上に立地している。標高は、月縄手遺跡で3～4 m、貴生町遺跡で2～3 mを測る。

周辺の遺跡をみると、貴生町遺跡の西約1 kmに東海屈指の弥生時代の環濠集落である朝日遺跡があり、最近の調査では縄文時代後期や古墳時代前期の生活跡が確認されている。さらに庄内川を挟んで月縄手遺跡の対岸約1.5 km南にある西志賀遺跡は、弥生時代前期の標式遺跡として著名である。古墳時代の集落としては、西志賀遺跡に隣接する志賀公園遺跡や、貴生町遺跡の西約4.5 kmにある廻間遺跡があげられる。また月縄手遺跡の東側台地上には味美二子山古墳や白山藪古墳を含む味美古墳群が展開している。さらに周辺には中世～近世の遺跡が数多くあるが、その中で清洲・平田・小田井・比良などの城郭の存在が注目される。



1. 貴生町遺跡 2. 月縄手遺跡 3. 清洲城下町遺跡 4. 朝日遺跡 5. 西志賀遺跡
6. 志賀公園遺跡 7. 白山藪古墳 8. 味美二子山古墳 9. 白山神社古墳

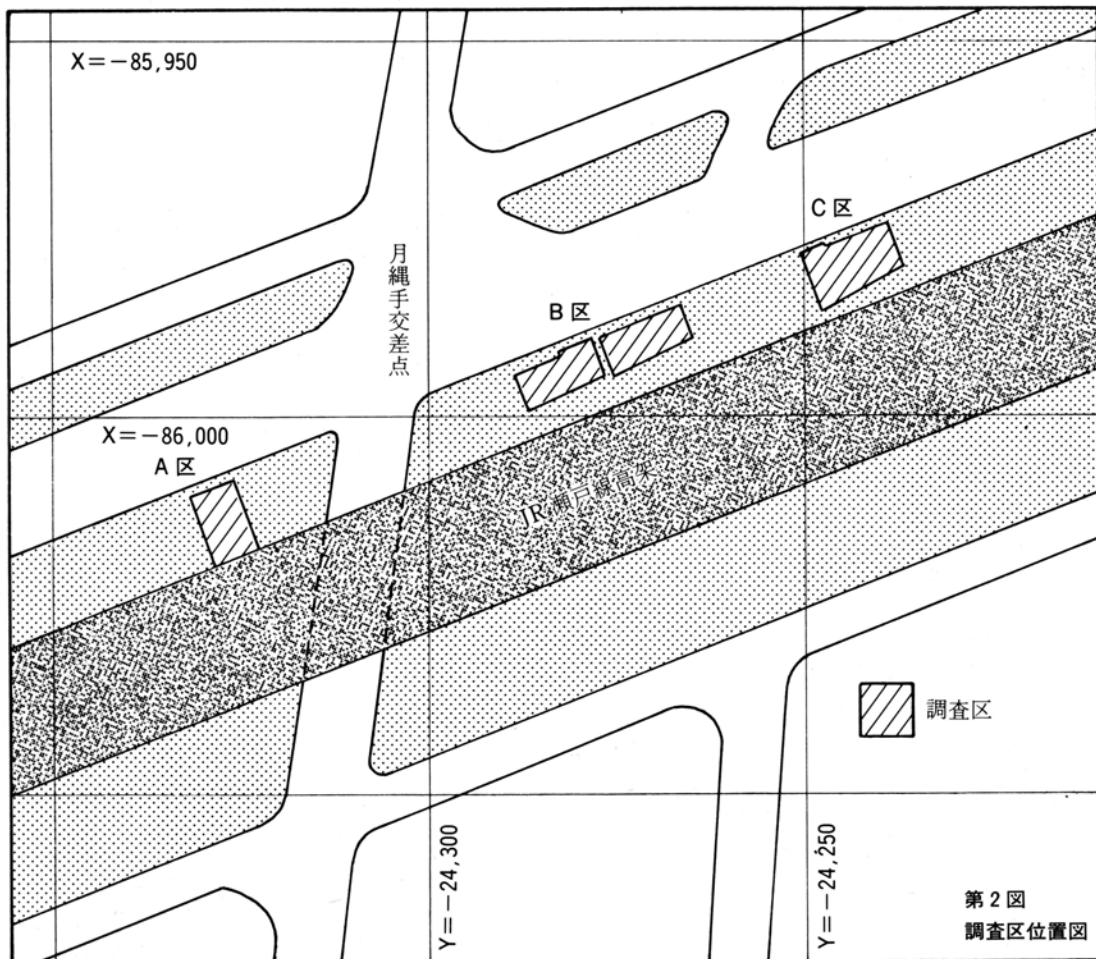
第1図 遺跡の位置と周辺の主要遺跡 (1:25000)

月繩手遺跡

Ⅲ 月 縄 手 遺 跡

1. 概要

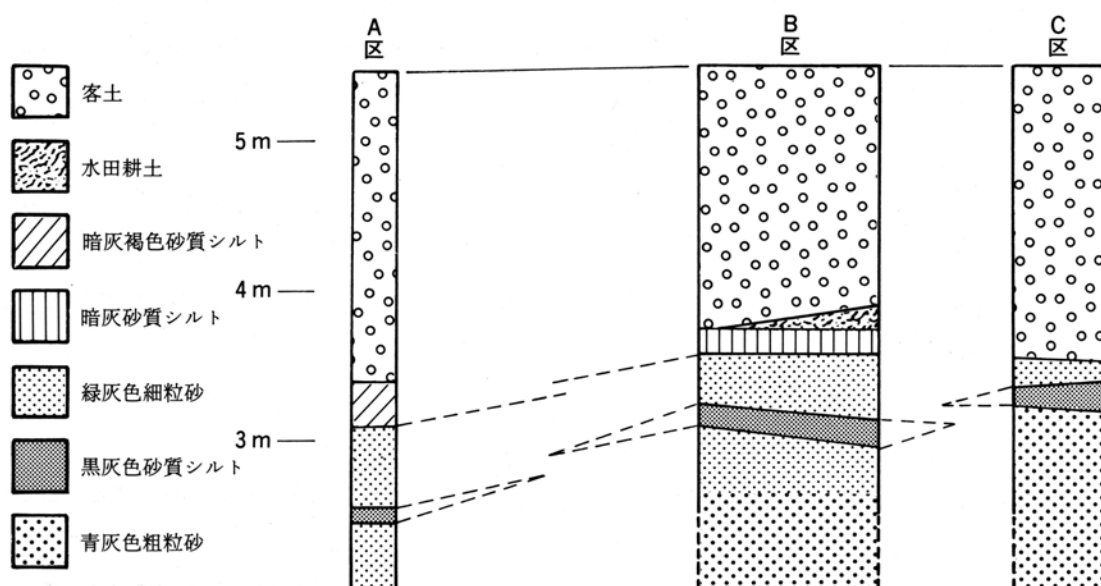
(1)調査区



月縄手遺跡は、名古屋市北部から西部を流れる庄内川右岸の、自然堤防帯における微高地上に立地している。調査区は環状2号線（国道302号線）橋脚建設工事に先立ち、名古屋市西区比良二丁目の月縄手交差点を中心として、橋脚面積に照合し三ヶ所（A・B・C区）設定し、このうち明確に遺構が確認できたのはB区のみである。

調査は昭和62年6月23日から8月14日まで行なったが、当初、調査区より北東500mに位置したと伝えられる比良城の関連遺構に、その主眼を置いたものであった。しかるところ、中、近世の層は後世の削平により消失しており、図らずも弥生時代及び古墳時代がその対象となったのである。遺構検出面は、標高3～4mという低地であり、諸般の事情から十分な湧水対策を施すことができなかったため、調査は困難を極めた。中でも弥生時代の検出高では、湧水が激しく何度となく調査中断を余儀な

くされたが、尾張地方では類例の少ない前期単純層として、良好な資料を得ることができた。その上当遺跡の立地する庄内川北部域において、存在さえ確認されていなかった遺跡が、新たにその存在を分布図に加えることができたことが最大の成果であろう。



第3図 調査区基本土層図

(2)基本層序

調査の段階では、A～C区ともに整地時の削平を受けており、この削平はB区では現代の水田耕土中途までであるが、A区は暗灰褐色砂質シルト層、C区では緑灰色細粒砂層にまで及んでいる。現地表高は標高約5.5mで、この削平された面までは客土で覆われている。

A区は上位より、第Ⅰ層暗灰褐色砂質シルト層、第Ⅱ層緑灰色細粒砂層、第Ⅲ層黒灰色砂質シルト層、再び第Ⅱ層の順で堆積している。無遺物であるため、時期を区分し得ない。

B区は上位より、第Ⅰ層水田耕土層、第Ⅱ層暗灰色砂質シルト層、第Ⅲ層緑灰色細粒砂層、第Ⅳ層黒灰色砂質シルト層、再び第Ⅲ層、第Ⅴ層青灰色粗粒砂層の順で堆積している。第Ⅱ層からは古墳時代前半の遺物が出土し、遺構はこの層内より掘消されている。この第Ⅱ層は、第Ⅰ層の水田耕土によって中途まで削平されている。さらに無遺物の第Ⅲ層をはさんで、第Ⅳ層には弥生時代前期の遺物が包含され、遺構の中には完全に埋設しきらない内に第Ⅲ層によって覆われたものもみられる。

C区は上位より、第Ⅰ層緑灰色細粒砂層、第Ⅱ層黒灰色砂質シルト層、第Ⅲ層青灰色粗粒砂層の順で堆積している。

以上各調査区の層位を概説したが、それぞれの対応関係からみると、弥生時代前期の段階までに微高地上の高まりが東へ向かって形成され、その後何らかの自然的要因によって水の影響を強く受ける環境へと変化し、この時期の堆積によって起伏も弱まり古墳時代に至って再び露呈したことが窮える。

2. 遺構

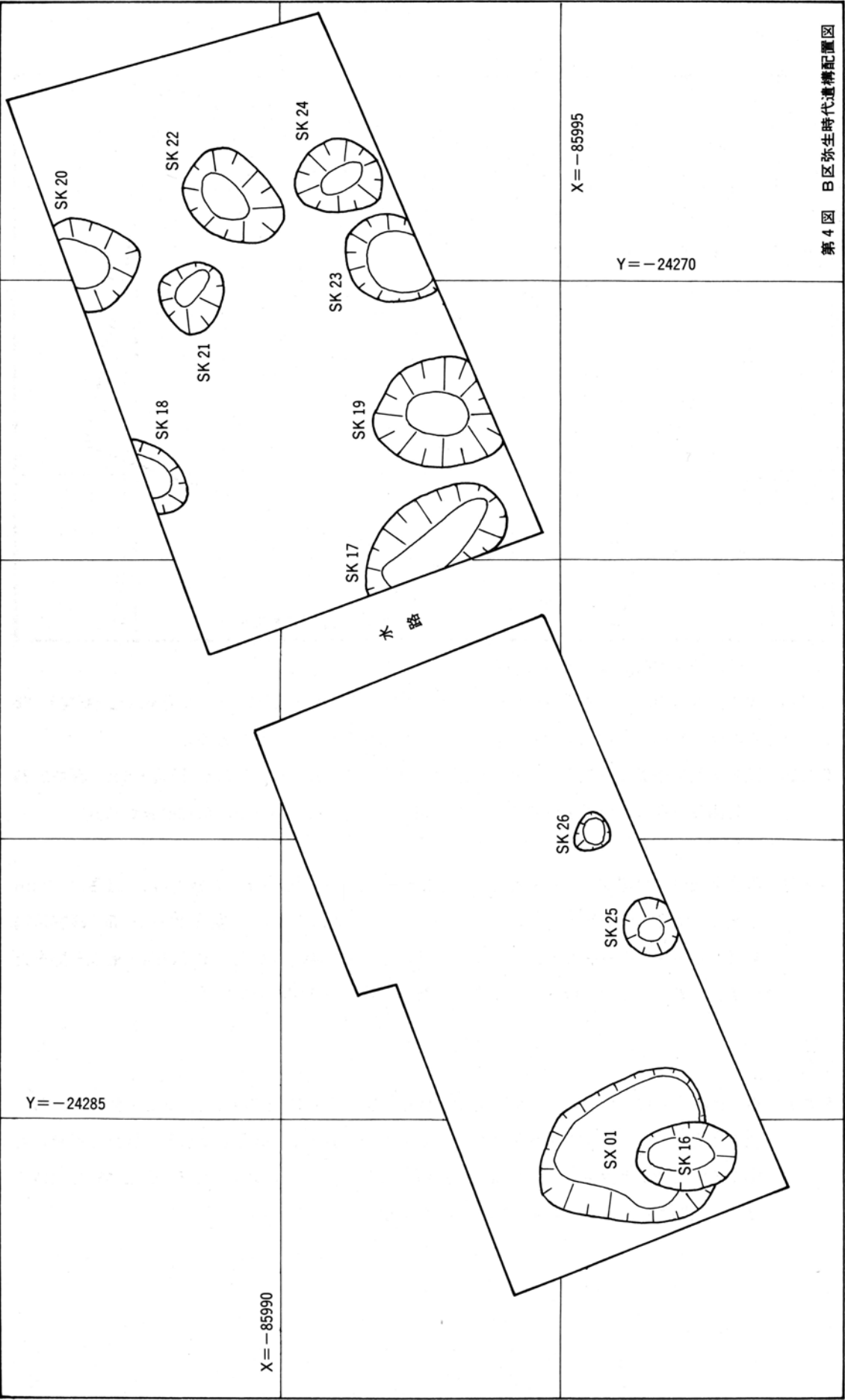
(1) 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は全て土坑状の掘り込みであり、A区では未検出、B区では12基、C区では1基を検出する。遺構検出面は標高約3mで、濃尾平野沖積地帯に同様に位置する貝殻山貝塚よりも約1m高く、西志賀遺跡よりもわずかに高い。この土坑状の掘り込みは、一定の規格性、方向性は持たず、無作為に掘削されたように窮える。しかし隣接調査区では、C区でわずかに1基検出しているだけであるため、空間的には意識されたものかもしれない。検出した遺物は、全て弥生時代前期に属する。

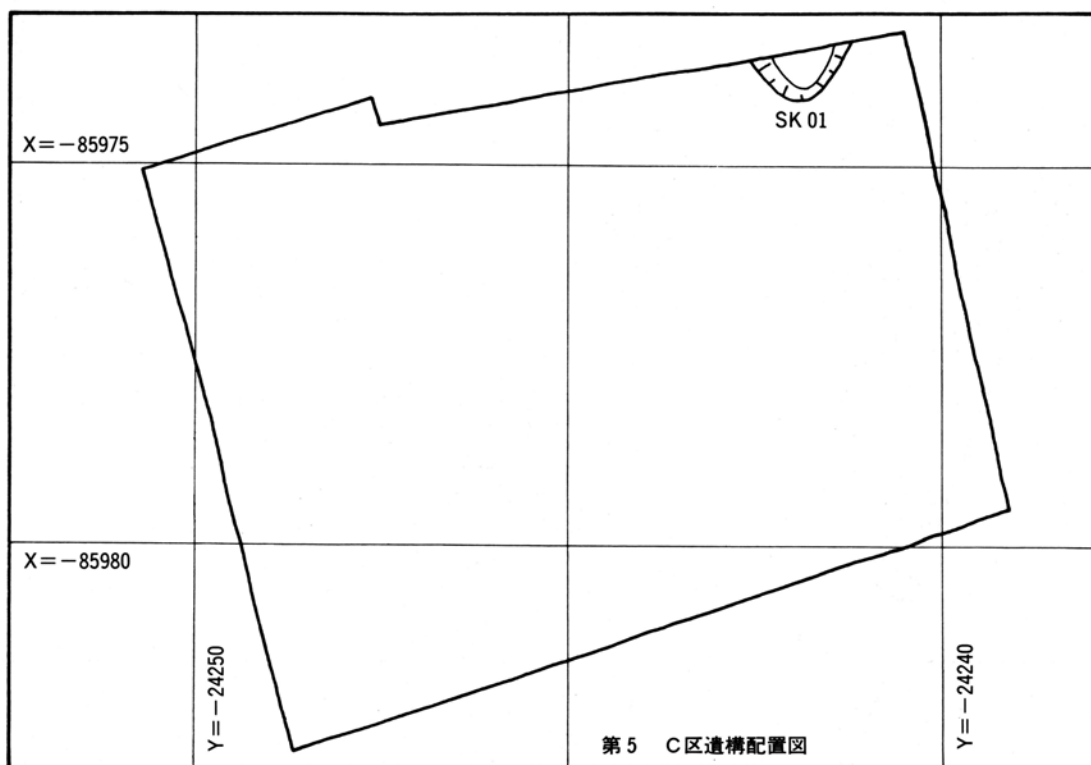
これらの遺構については、遺物の出土状況などから、廃物処理に目的の主眼を置く可能性が強いが、その性格は判じ得ない。以下、各遺構について説明する。

B区

- S K 16** 調査区西側に位置する。平面形態は南北方向に楕円形を呈し、長径1.8m、短径1.2m、深さ0.44mを測る。埋土は灰褐色砂質シルトを基調とし、壺口縁部片（43）が1点出土している。完全に埋設しきらないうちに第Ⅲ層によって覆われたもので、検出時に窪みが確認される。
- S K 17** 調査区中央水路脇に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径3m、短径1.6m、深さ0.44mを測る。埋土は灰褐色砂質シルトを基調とする。S K 16と同様に、検出時に窪みが確認される。
- S K 18** 調査区中央北端に位置する。平面形態は楕円形を呈するものと思われるが、規模は不明で深さ0.3mを測る。埋土は灰色砂質シルトを基調とし、壺（45）、甕（44・46）等が出土している。
- S K 19** 調査区中央南端に位置する。平面形態は不整形を呈し、長径2.5m（推定）、短径2m、深さ0.76mを測る。埋土は暗灰褐色砂質シルトを基調とし、壺（48～53）、甕（54～60）等が出土している。
- S K 20** 調査区東側北端に位置する。平面形態は不整形で、長径2m（推定）、短径1.5m、深さ0.59mを測る。埋土は灰色砂質シルトを基調とし、壺（62～64）、甕（65～70）等が出土している。
- S K 21** 調査区東側北寄りに位置する。平面形態は不整形を呈し、長径1.3m、短径1.1m、深さ0.37mを測る。埋土は灰色砂質シルトを基調とし、壺（71）、甕（72・73）等が出土している。
- S K 22** 調査区東側に位置する。平面形態は楕円形を呈し、長径1.9m、短径1.4m、深さ0.76mを測る。埋土は灰色砂質シルトを基調とし、壺（74）、甕（75）等が出土している。
- S K 23** 調査区東側南端に位置する。平面形態は不整形を呈するものと思われ、長径2m（推定）、短径1.5m、深さ0.44mを測る。埋土は暗灰褐色砂質シルトを基調とし、壺（77～79）、甕（81・82・217）等が出土している。
- S K 24** 調査区東側南端に位置する。平面形態は不整形を呈し、長径1.8m（推定）、短径1.2m、深さ0.48mを測る。埋土は暗灰色砂質シルトを基調とし、壺蓋（83～85）、壺（86～88）、甕（89



第 4 図 B 区弥生時代遺構配置図



・90) 等が比較的まとまって出土している。

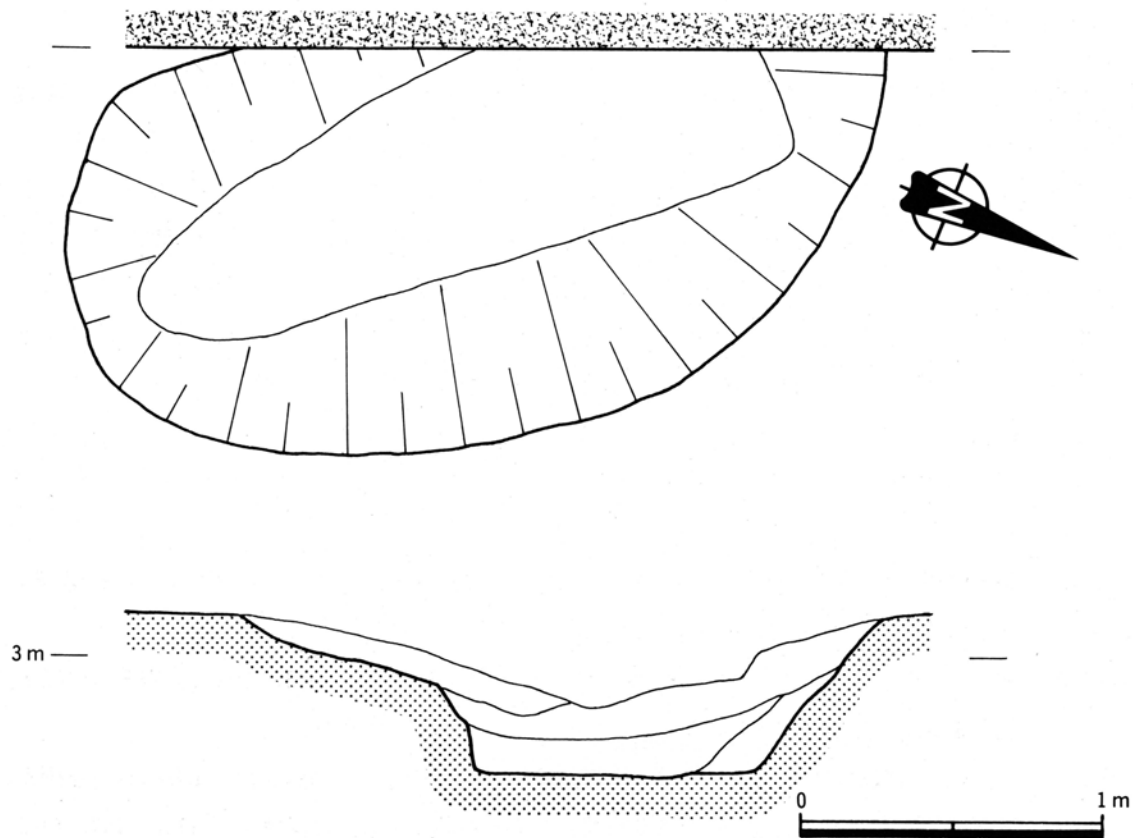
S K 25 調査区西側南端に位置する。平面形態は不整円形を呈し、長径1.1m、短径0.9m（推定）、深さ0.48mを測る。埋土は灰褐色砂質シルトを基調とし、無遺物である。

S K 26 調査区西側南端に位置する。平面形態は不整円形を呈し、長径0.7m、短径0.6m、深さ0.33mを測る。埋土は灰褐色砂質シルトを基調とし、無遺物であるが、炭化物層が残る。

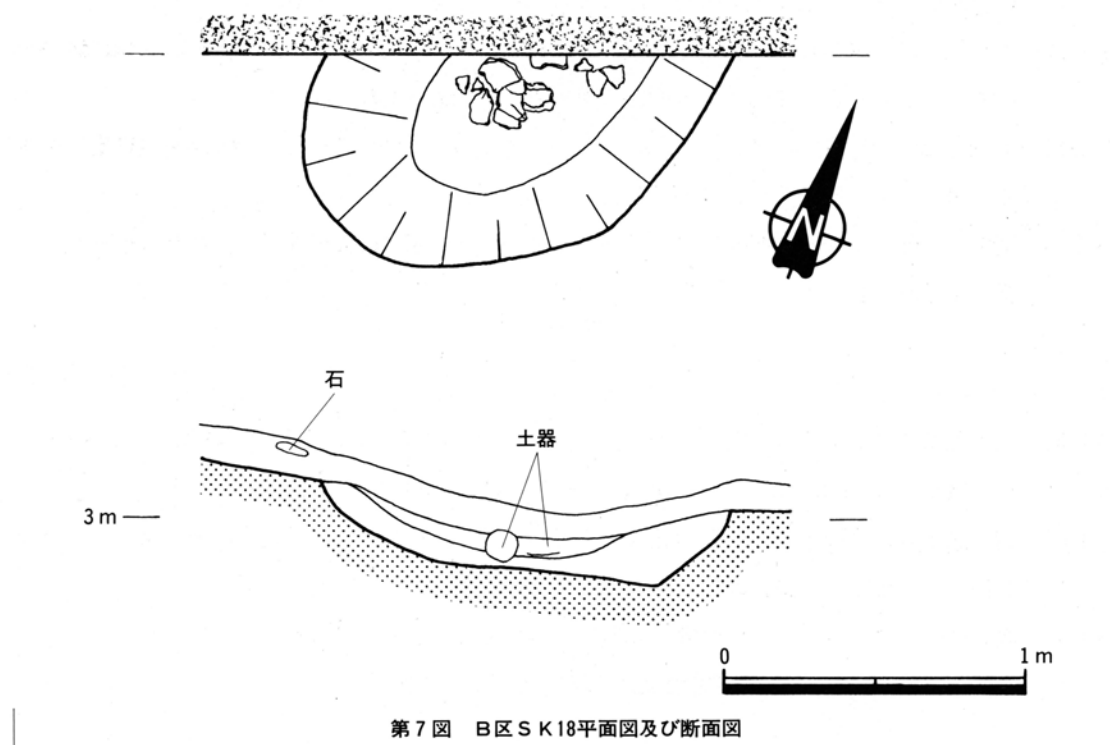
S X 01 調査区西側に位置する。平面形態は不整円形を呈し、長径3.1m、短径2.8m、深さは0.32mを測る。埋土は淡灰褐色砂質シルトを基調とする。壺（2～17）、甕（18～42）等、調査区内では、最も多くの遺物が一括して出土している。弥生時代の遺構の中では唯一重複関係を持つが、S K 16の出土遺物がわずかであるため、時期差を窮い得ない。

C区

S K 01 調査区北東隅に位置する。平面形態は不整形を呈するものと思われる。深さ0.19mを測る。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とする。C区唯一の遺構で、B区第Ⅳ層とC区第Ⅱ層が、対応する同時期層と仮定し、弥生時代の遺構としたが、当遺構の埋土及び、C区第Ⅱ層全体を通じて遺物が出土しておらず、推定の域を出ない。



第6図 B区SK17平面图及び断面図



第7図 B区SK18平面图及び断面図

(2)古墳時代の遺構

古墳時代の遺構は、B区において溝、土坑、小穴を検出するが、A、C区では未検出である。溝は18条を数えるが、調査区内で完結しているものはほとんどみられず、S D03を除いて無遺物であるため、規模、掘削目的、時期等を判じ得ない。尤も、どの溝の埋土からも、流水の影響による砂層の堆積はみられず、土壌分析の上でも陸生珪藻の出現率が高いことから、水路であった可能性はほとんどないものと思われる。土坑は11基を数えるが、全体的に小規模であり、いずれも無遺物で、埋土は単一である。小穴は17箇所を数えるが、間隔は一定でなく、列を成さないため、それぞれの対応関係を考えることは困難であり、上部構造を想定することはできない。

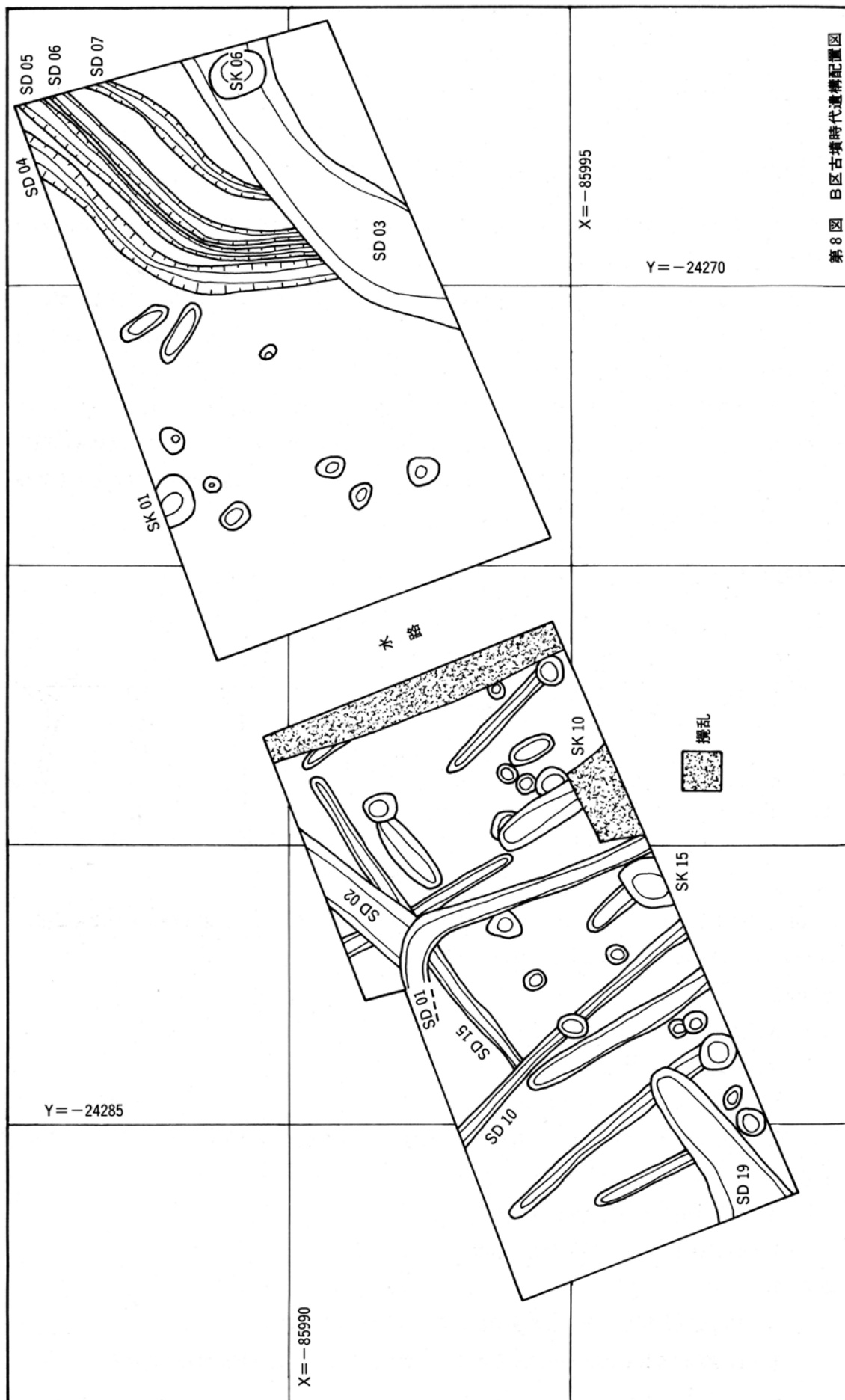
以下、代表的な遺構について説明する。

溝

- S D01 調査区西側に位置し、南北方向から西へL字状に屈曲する。溝幅0.4m、深さ0.14mを測る。埋土は暗灰褐色砂質シルトを基調とする。
- S D02 調査区西側北端に位置し、東西方向に伸びる。溝幅0.8m、深さ0.33mを測る。埋土は暗灰褐色砂質シルトを基調とする。
- S D03 調査区東側南端に位置し、わずかに屈曲しながら東西に向う。溝幅1.4m、深さ0.54mを測る。断面はU字状を呈し、埋土は灰褐色砂質シルトを基調とする。甕口縁部片（182・183）が出土している。
- S D04 調査区東側に位置し、南北方向から東へ屈曲する。溝幅0.5m、深さ0.23mを測る。埋土は灰褐色砂質シルトを基調とする。S D05、06、07が、南側を併走する。
- S D10 調査区西側に位置し、南北方向の溝群の中では、西向きに斜行するものである。溝幅は0.3m、深さ0.12mを測る。埋土は暗灰褐色砂質シルトを基調とする。
- S D15 調査区西側に位置し、東西方向に伸びる。溝幅0.3m、深さ0.15m、東西6.4m（推定）を測る。埋土は暗灰褐色砂質シルトを基調とする。
- S D19 調査区西側に位置し、東西方向に伸びる。溝幅1.2m、深さ0.33mを測る。埋土は暗灰褐色砂質シルトを基調とする。

土坑

- S K01 調査区東側北端に位置する。平面形態は不整円形を呈するものと思われ、長径0.9m、短径0.7m（推定）、深さ0.16mを測る。埋土は灰褐色砂質シルトを基調とする。
- S K06 調査区東側に位置する。平面形態は不整円形を呈し、長径1.0m、短径0.8m、深さは0.56mを測る。埋土は暗灰褐色砂質シルトを基調とする。
- S K15 調査区西側に位置する。平面形態は不整円形を呈するものと思われ、長径1.2m（推定）、短径1.0m、深さ0.25mを測る。埋土は灰褐色砂質シルトを基調とする。



第8图 日区古墳時代遺構配置図

3. 遺物

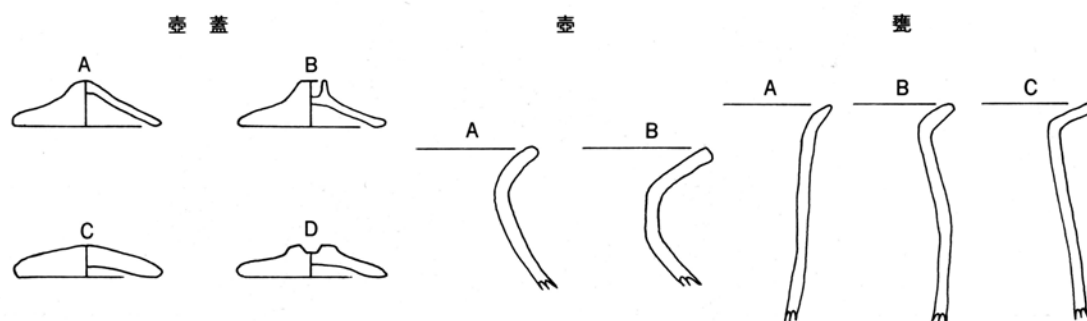
(1)出土状況

月縄手遺跡の出土遺物は、二層の遺物包含層間に無遺物層が存在するため、この堆積時を断絶期間として大きく二時期に分れる。

下層の出土遺物は、遺構、包含層中を問わず弥生時代前期に限られる。これらは壺蓋、壺、甕、鉢、二又注口状土器片、石製品によって構成されており、遺構からの伴出状況も比較的良好である。この出土遺物は、いわゆる遠賀川系土器が主体を成し、少ないながら条痕系土器も含まれている。

上層の出土遺物は古墳時代前半のものであるが、ほとんど遺構に伴うかたちで出土していない。この層からは須恵器は出土せず、古式土師器によって構成されており、壺、甕、台付甕、高杯等の破片が出土している。時期的には、欠山期のものが僅かに含まれるが、大半は元屋敷期以降のものと思われる。以下、遺構伴出品を中心として説明する。

(2)弥生時代の遺物



第9図 主要土器分類概念図

弥生時代の出土遺物については全体の器形を窮い得る資料が少ないため、第8図に掲げた如く壺、甕については口縁部付近の形状での最低限の分類に留める。

蓋形土器

- A. 全体の器形が傘形を呈するもの。
- B. A類に環状のつまみがついたもの。
- C. 低い山形を呈し全体的に厚手のもの。
- D. 二つの独立した瘤状突起が対を成し、つまみ部を形成しているもの。

壺形土器

- A. 頸部が短かく外反が短いもの。
- B. 頸部がほぼ直立し外反が長いもの。

甕形土器

- A. 口縁部が外反し、そのまま底部まで窄まるもの。
- B. 口縁部が外反し頸部を有するもので、ハケ目調整とヘラ削り調整のものがある。

C. 口縁部が強く外反するもの。

以上の概念をもとに、以下では壺蓋A類、壺B類、甕C類というような略式表記を用いて説明する。尚、遺物は全てB区出土である。

1～42はS X 01出土資料である。1は蓋形土器でA類に属する。内、外面ともに丁寧にヘラ磨きが施されている。器頂部は外側から内側に向かって穿孔されている。2～6は壺形土器の口頸部で、4・6は壺A類に、5はB類に属する。何れも丁寧にヘラ磨き調整が施されており、口頸部界に4は削り出し突帯（沈線2条）、5・6にはヘラ描沈線が施されている。7・8・10は壺の胴部で、頸胴部界には2～3条のヘラ描沈線が施されている。9は大型壺の頸部で、指つまみによる貼り付け突帯の下にヘラ描沈線が5条施されている。外側は縦方向、内側は横方向にハケ目調整された後、何れも横方向にヘラ磨きが施されている。11～17は壺の底部で、外側底部脇には13・14のように僅かにヘラ削り整形の痕跡が残るものもみられるが、最終的にはヘラ磨きが施されているものが多く、内側はヘラ削りを行なっている。18～42（29・32・37は除く）は甕形土器で、口縁部の残存状況により分類可能な12点の内分けは、甕A類5点、B類7点である。口縁部には刻目を持つものが多く、器面調整はハケ目とヘラ削りのものがみられ、頸部に沈線が施されているものもある。また底部はそのまま窄まってしまうものと、底部脇で僅かに広がるものとがみられる。40・42の底部は、焼成後に穿孔されている。29・32は条痕系深鉢である。条痕は底部から上に向かって施されており、部分的判断であるが胴部には縦位羽状痕が施されているようである。32は内側に僅かにヘラ磨きの痕跡がみられ、鉢形土器の可能性もあるが、器種は不明である。

43はS K 16出土の壺形土器口縁部である。S X 01を切るかたちで重複関係にあるが、出土遺物は1点のみで、新旧関係の解明資料には至らない。

44～46はS K 18出土資料である。44は甕B類に属し、2条のヘラ描沈線間に刺突が施されている。45は大型壺で、ヘラ磨き調整は内側により顕著である。46は甕A類に属し、3条のヘラ描沈線が施されている。

47～61、219・220はS K 19出土資料である。47は壺蓋C類に属する。端部は指つまみによって波状を呈し、器頂部は外側から穿孔されている。48～53は壺形土器で、51が壺A類、49・50がB類に属する。50・51は口縁部に1ヶ所、焼成前に穿孔されている。51は口頸部界と頸胴部界に、それぞれ3条のヘラ描沈線が施されている。54～60は甕形土器で、55の頸部にはヘラ描沈線が1条施されている。219・220は石製品である。219は石鏃の未製品であるが、形態的には凹基無頸式に属するものと思われる。220はピエス・エスキュー（楔形石器）と思われる。遺構から出土した石製品はこの2点のみであるが、包含層からは、ピエス・エスキューの可能性が考えられるものが14点出土している。これらの材質は全て、ガラス質石英安山岩である。

62～70はS K 20出土資料である。62～64は壺、65～67甕の底部である。67には僅かに穿孔された痕跡がみられる。

71～73はS K 21出土資料である。72の甕底部は焼成後に穿孔されている。73は甕B類に属する。

74・75はS K 22出土資料で、壺、甕それぞれ1点ずつ出土している。

76～82・216・217はS K 23出土資料である。76は壺蓋A類に属するものと思われる。77～80は壺形

土器で、77には双対渦文が残存部内に2ヶ所認められる。78には口頸、頸胴部界にそれぞれ4条のへら描沈線が施されているものと思われる。80は無頸壺と思われ、口縁端部はわずかに折り返されているようである。81・82・217は甕形土器で、82は甕A類に、217はB類に属する。217はハケ目調整が縦方向に施された後、頸部下の部分に横方向に残され、へら描沈線が2条描かれている。

83～90はS K 24出土資料である。83～85は壺蓋A類に属する。86～88は壺形土器で、86は壺A類で口頸部界に削り出し突帯が施され、87はB類でへら描沈線が4条施されている。89・90は甕形土器で、89は頸部に1条のへら描沈線、それより上部は横方向にへら磨きが施されている。

91～159、218は包含層出土遺物である。

91～101は蓋形土器で、器頂部の残存する96・98・100・101は全て穿孔されている。96・100は壺蓋A類、98はB類、101はD類に属し、何れもへら磨き調整が顕著である。93は外側に、陰刻の斜軸木葉文が描かれている。これらの蓋形土器は、全て壺に伴うものと思われる。

102～128は壺形土器である。103・104・106は壺A類、102・105・110・111・113はB類に属する。104・105・108・110には、口縁部に紐孔が穿たれている。口頸部界の装飾は、削り出し突帯（104）、へら描沈線1～4条がみられる。102は形態的に胴が強く張るもので、口頸部界に4条のへら描沈線に対して、頸胴部界6条の組合せである。117は頸胴部界に、118は口頸部界に貼り付け突帯が施されている。

129～133は鉢形土器と思われるが、遺存度が少ないため識別し得ない。130は台付鉢ではないかと思われる。

134～158は甕形土器である。134は、底部が穿孔されている。形態的には135・138・141が甕A類に、134・137がB類に、140・142がC類に属する。

159は二又注口状土器片である。二又状の管の合流点が注口状を呈し、底部は平滑で、何らかの器種に付設されていたものと思われる。

218は石鏃で、形態的には凹基無頸式に属する。月縄手遺跡の石鏃は、S K 19の未製品と合せて2点のみである。材質はガラス質石英安山岩である。

(3)古墳時代の遺物

182～187はS D 03出土資料である。古墳時代の遺構からの出土遺物はこのS D 03資料のみで、何れも小片である。

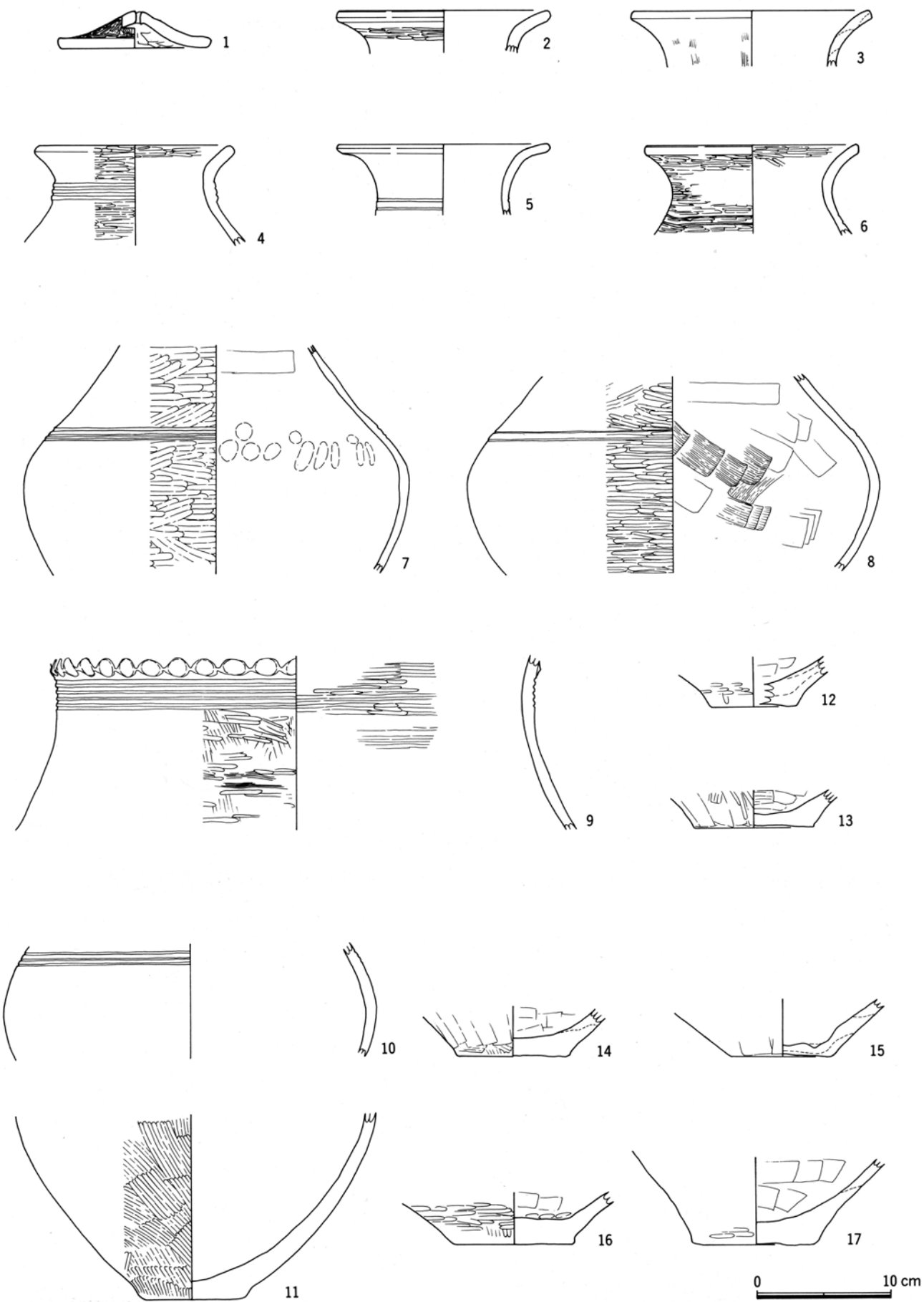
182・183、188～192、202～204はS字状口縁部台付甕の口縁部である。口縁部の屈曲がきつくなり、S字状の各段が発達しているものが多くみられ、元屋敷期後半以降のものと思われる。

194は小型壺の胴部と思われ、櫛描直線文による横帯構成の間に刺突、へら磨きなどが施される。

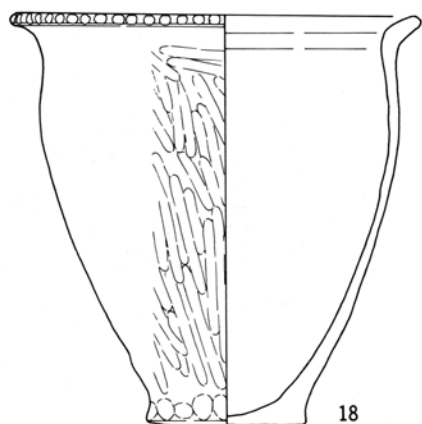
196は器台、197・198は高杯の脚部である。何れも丁寧なへら磨き調整が行なわれている。

207は北陸地方の影響を受けたと思われる有段口縁の甕である。

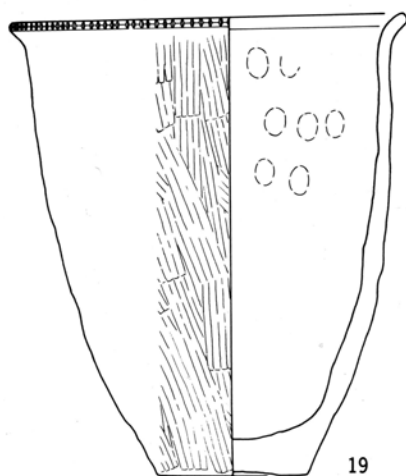
209はパレススタイルの壺口縁部で、内面に羽状文が施されている。口縁端部の折り返した部分が垂下に近い形状であり、折り返し点も未発達であることから、欠山期後半のものではないかと思われる。



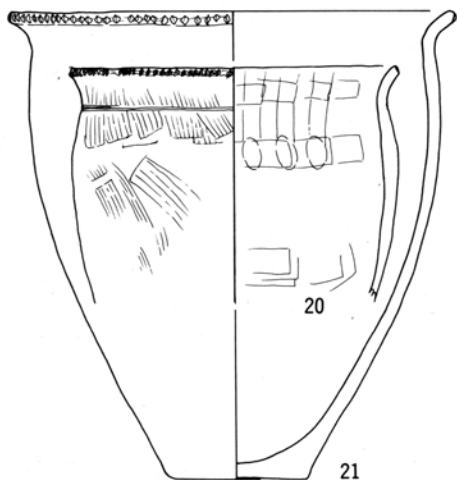
第10図 月繩手遺跡弥生時代土器実測図(1)



18

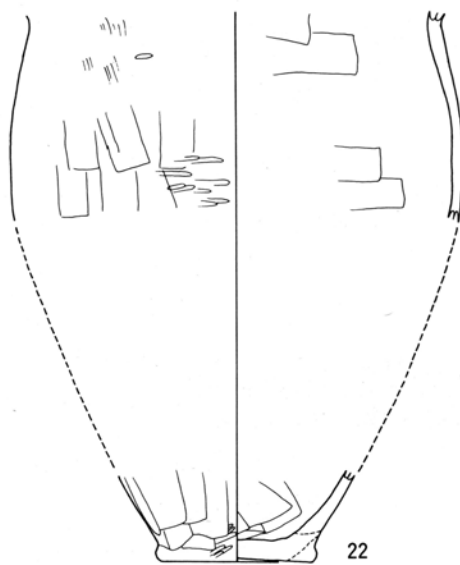


19

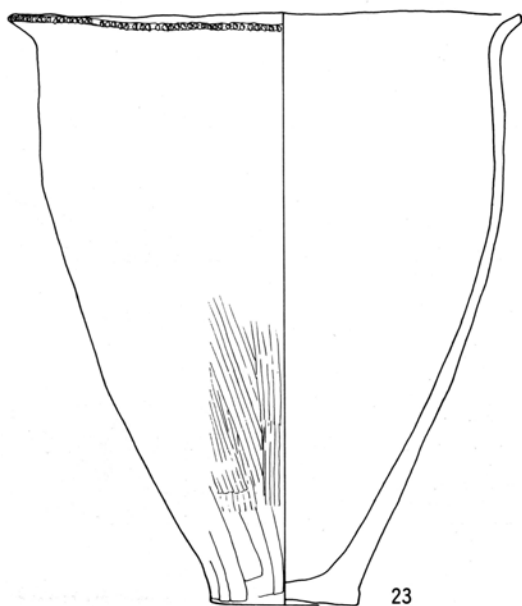


20

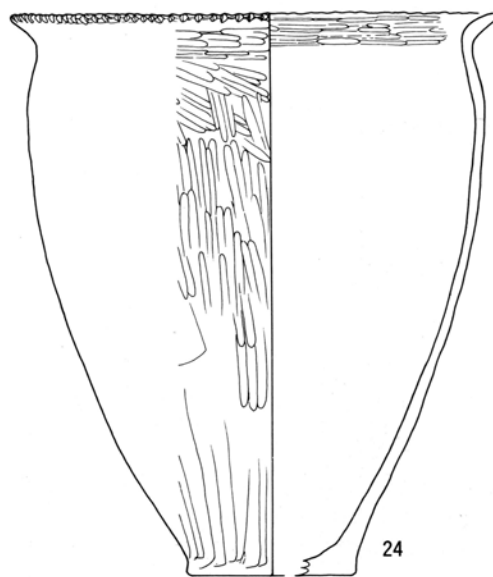
21



22



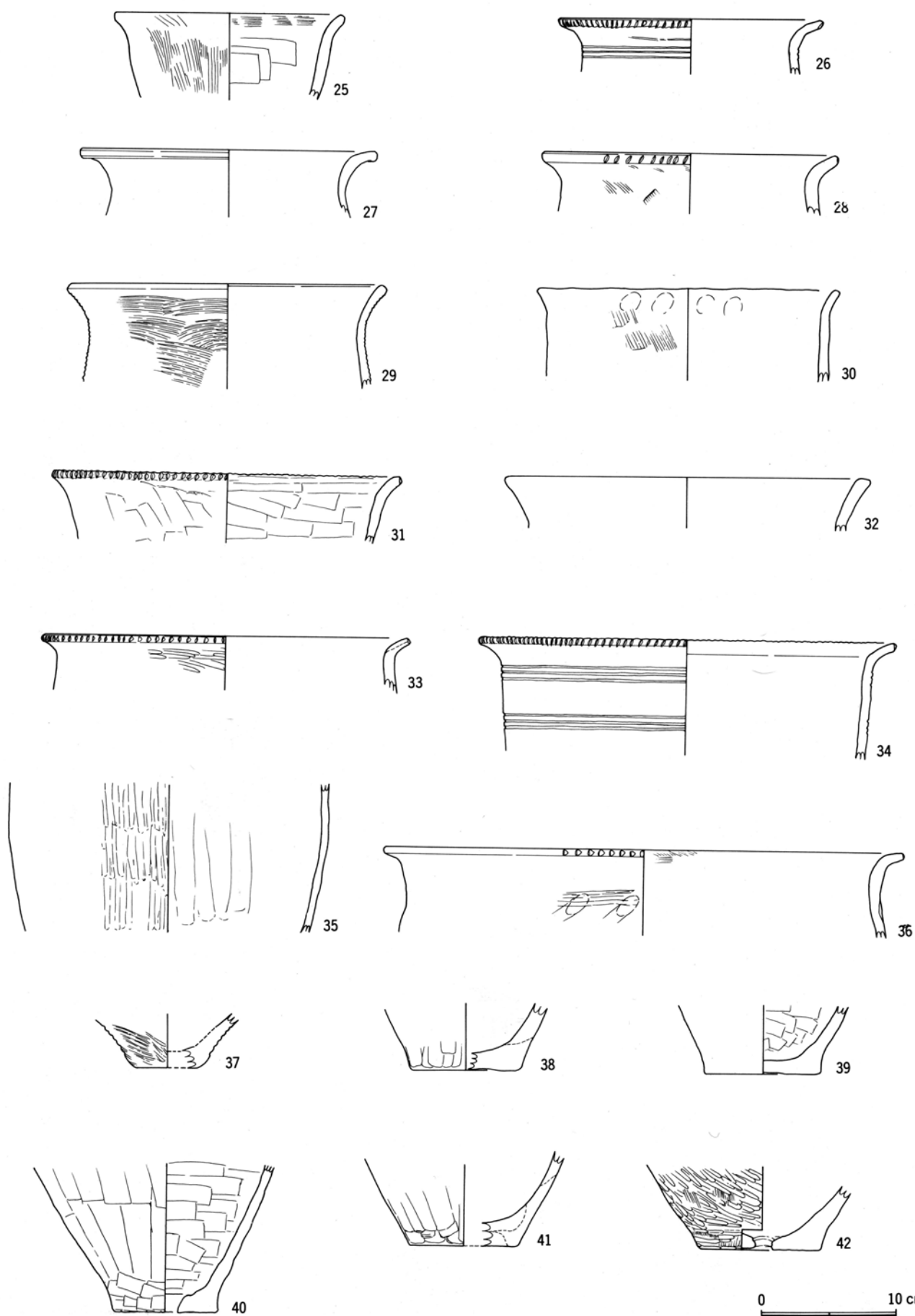
23



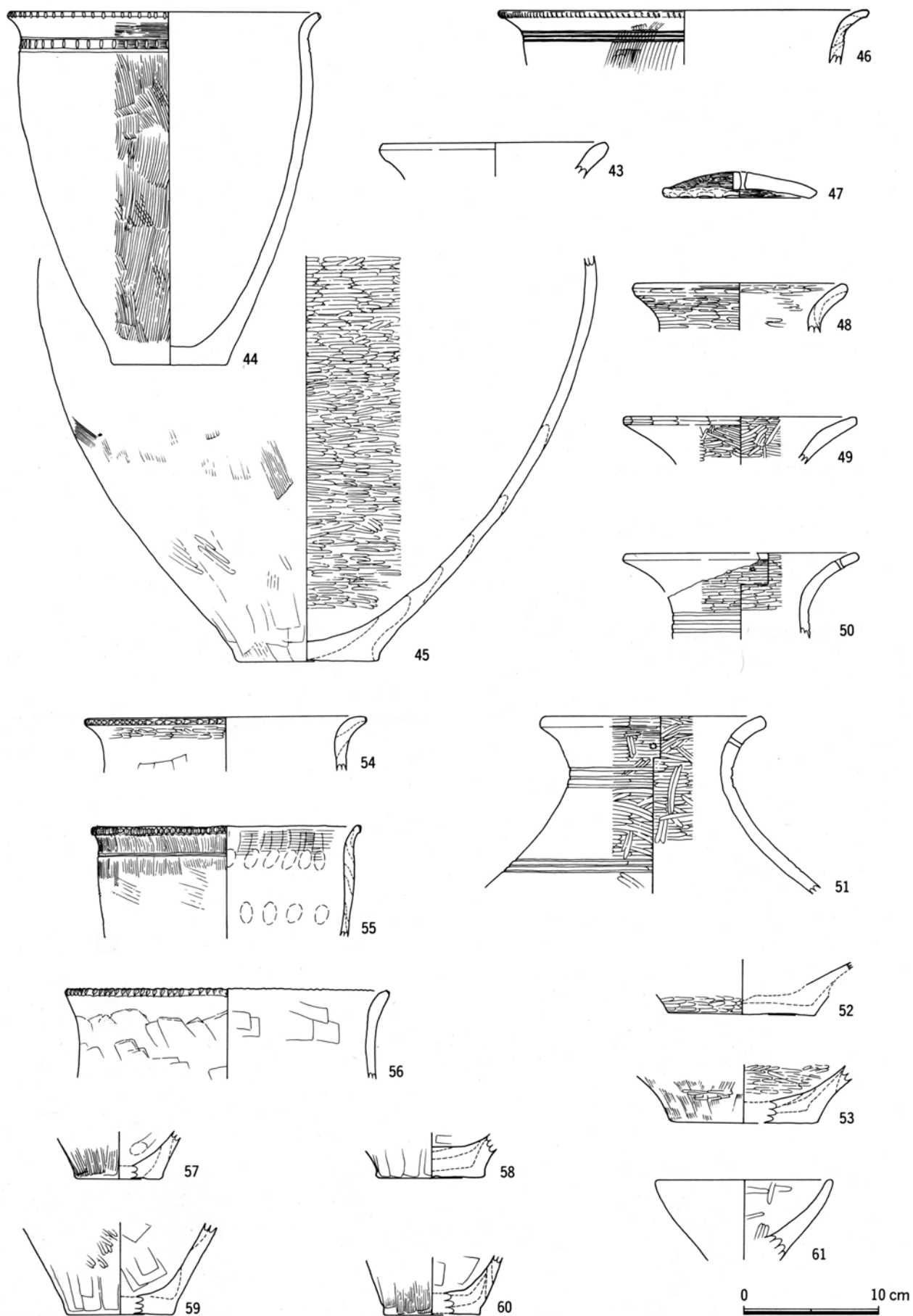
24

0 10 cm

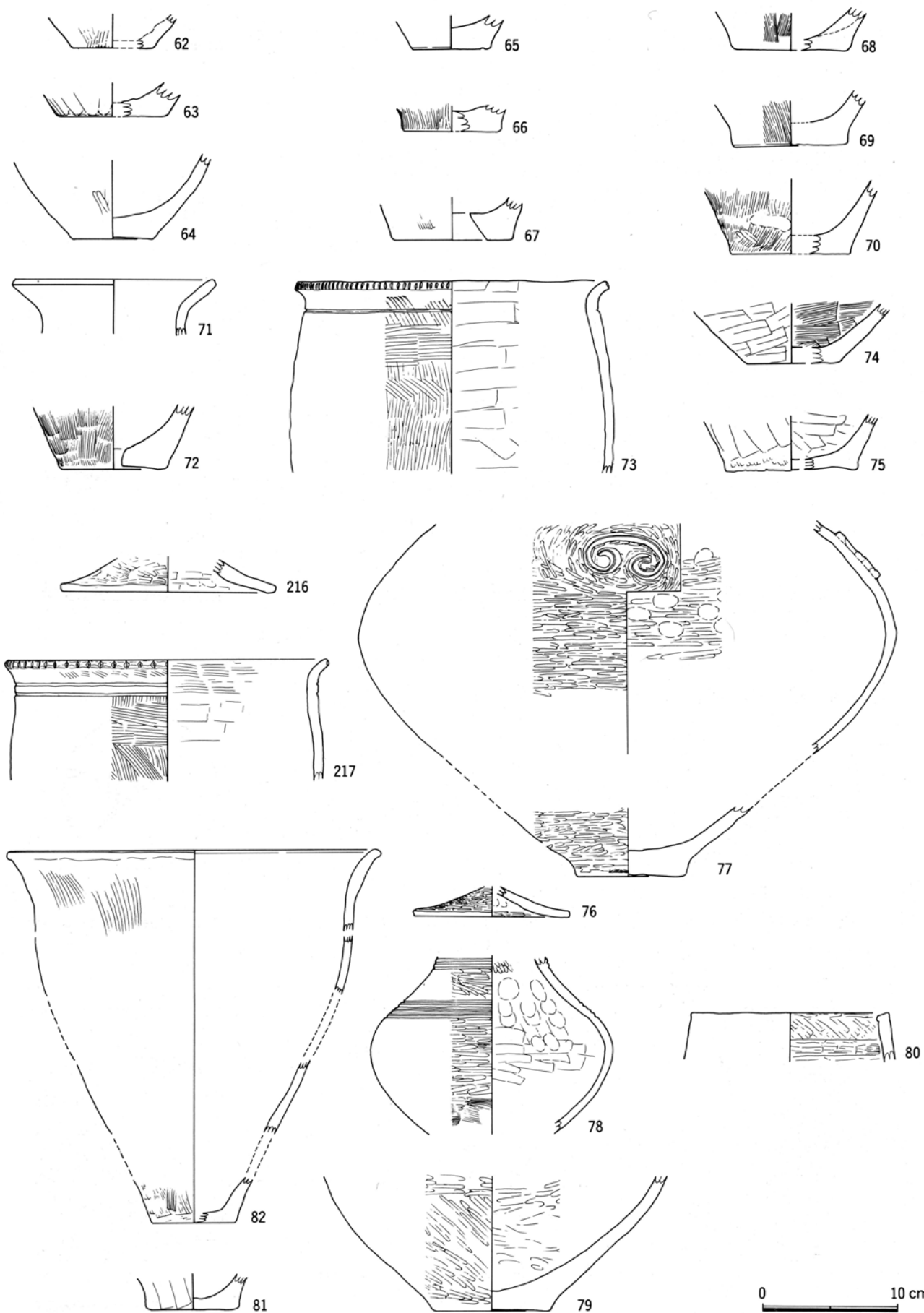
第17図 月繩手遺跡弥生時代土器実測図(2)



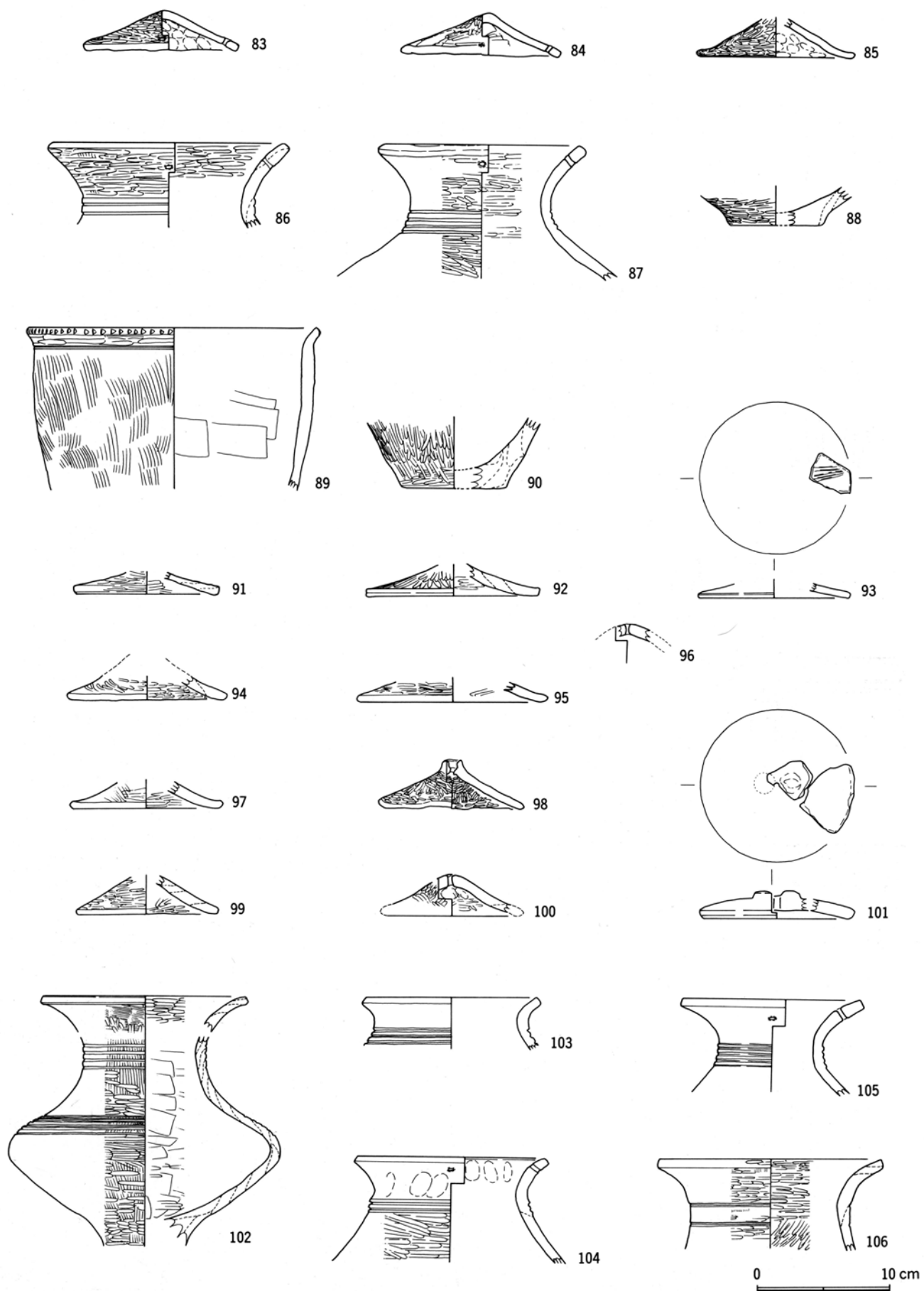
第12図 月繩手遺跡弥生時代土器実測図(3)



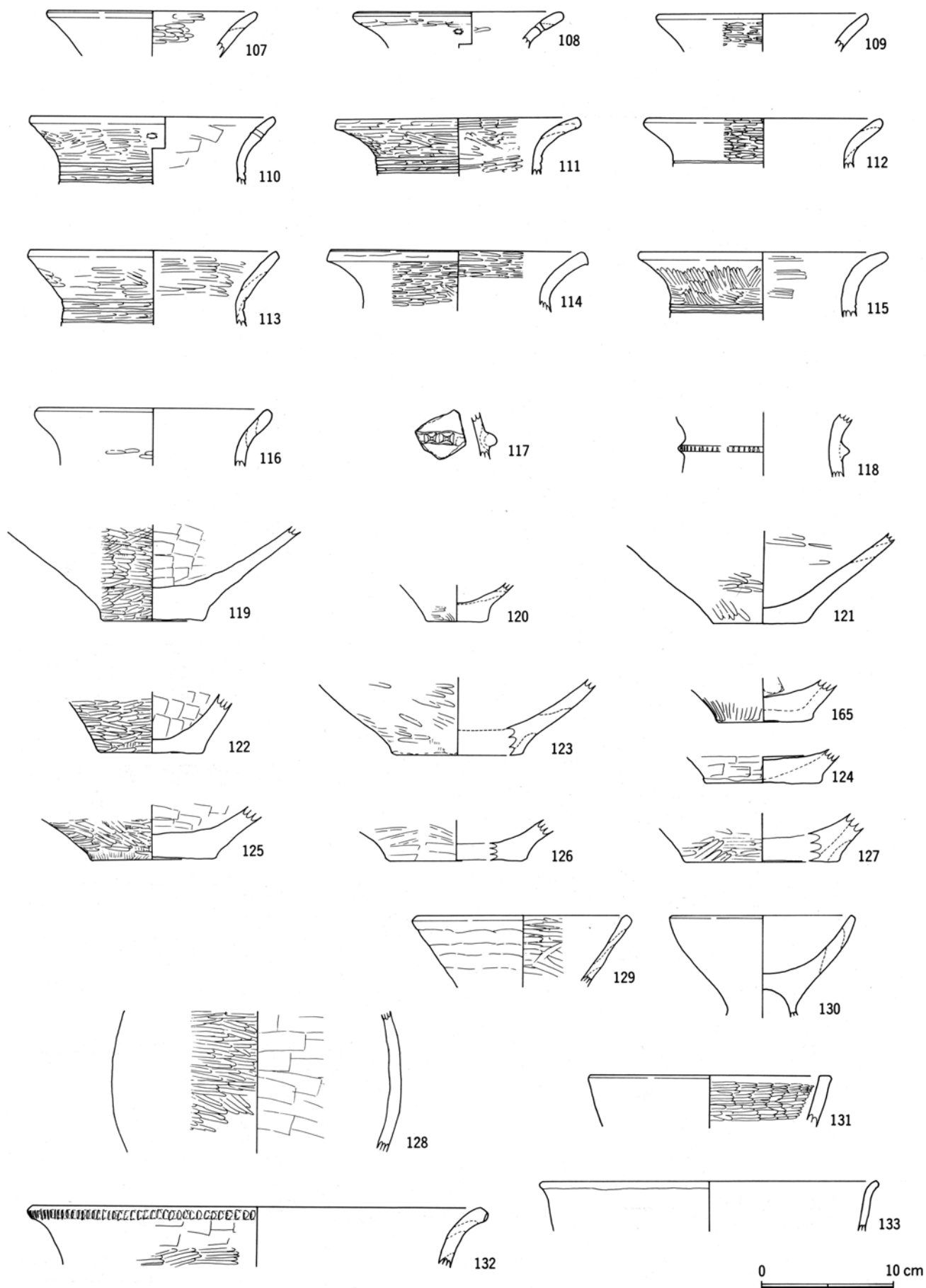
第13図 月繩手遺跡弥生時代土器実測図(4)



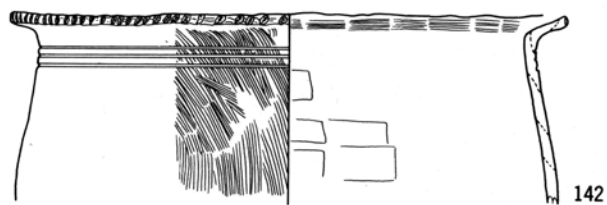
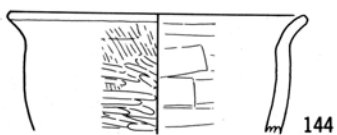
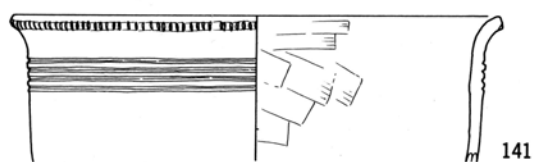
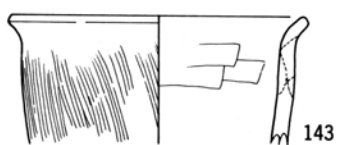
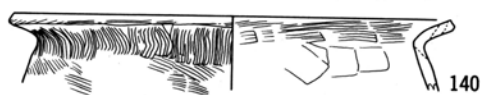
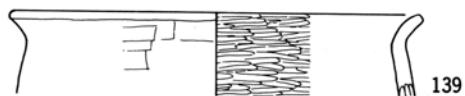
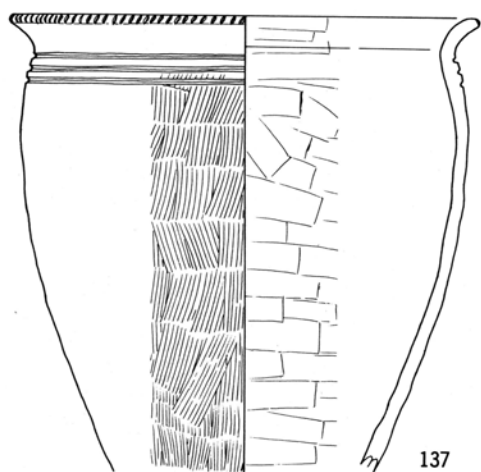
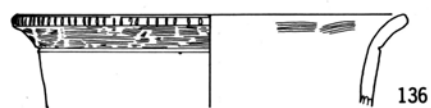
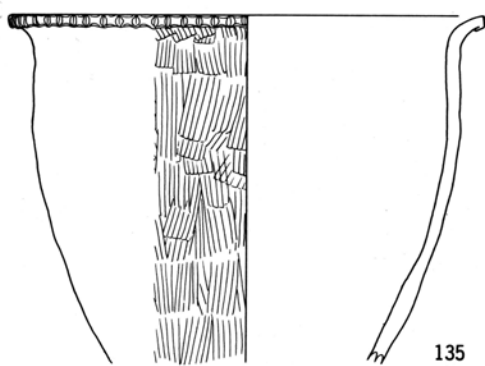
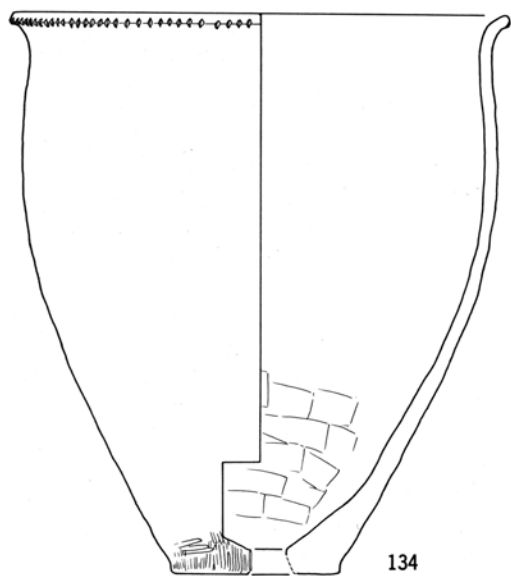
第14図 月繩手遺跡弥生時代土器実測図(5)



第15図 月繩手遺跡弥生時代土器実測図(6)

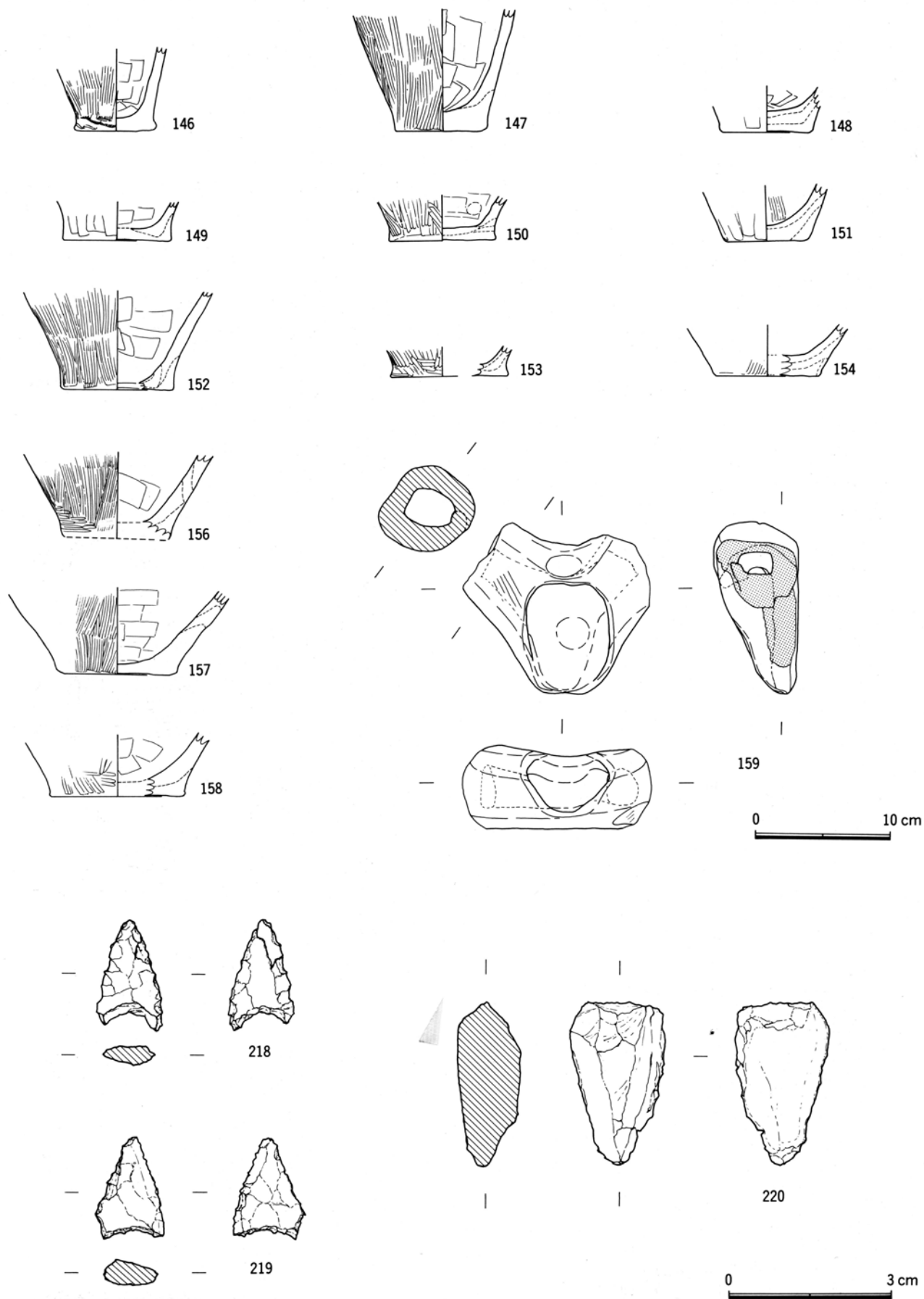


第16図 月繩手遺跡弥生時代土器実測図(7)



0 10 cm

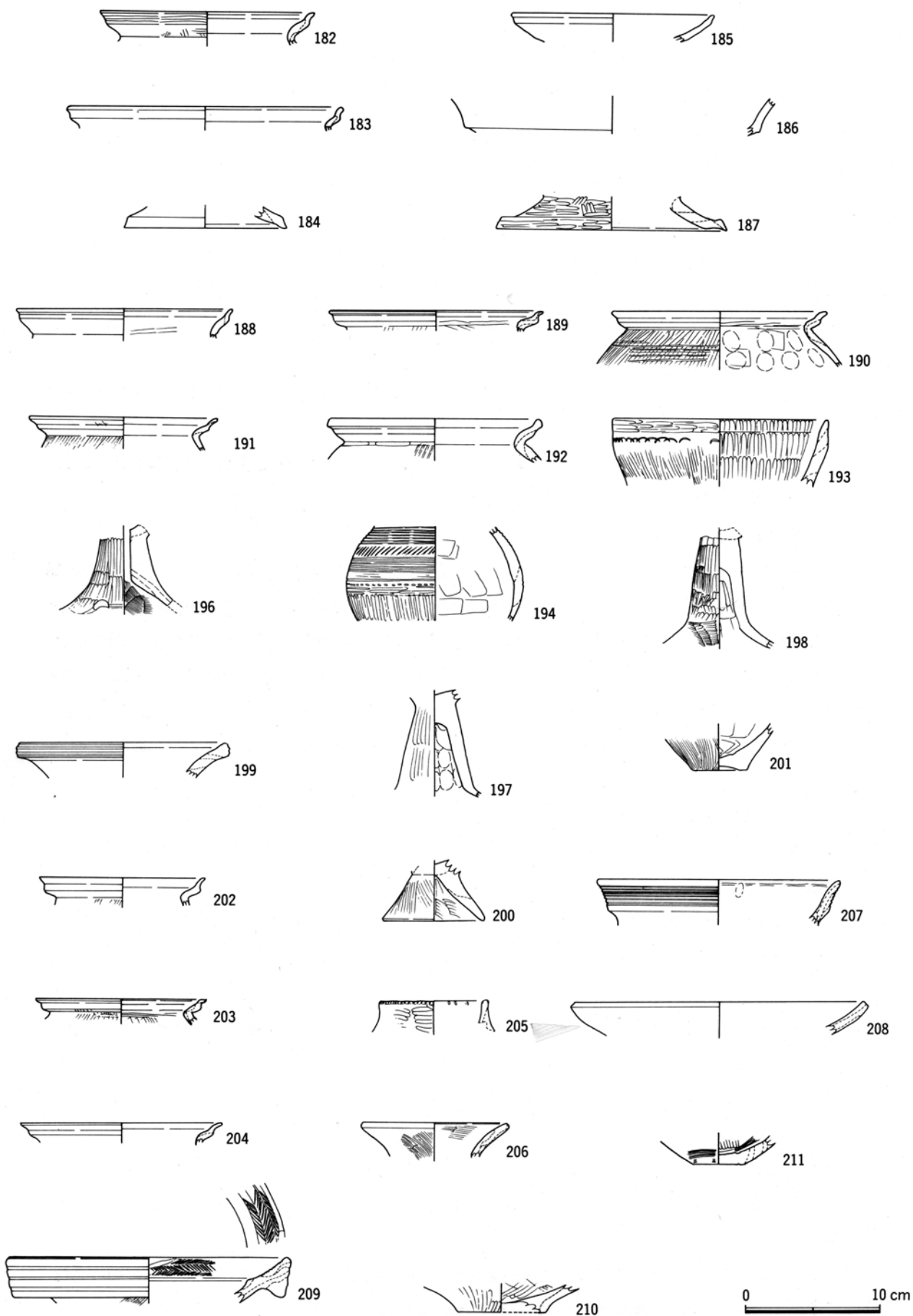
第17図 月繩手遺跡弥生時代土器実測図(8)



第18図 月縄手遺跡弥生時代土器・石器実測図(9)



第19圖 月繩手遺跡弥生時代土器拓影



第20図 月繩手遺跡古墳時代土器実測図

4. 自然科学的分析

(1) 弥生時代前期土器胎土の重鉱物分析

1. 試料

試料は、名古屋市内にある月縄手遺跡、高蔵遺跡および清洲町の朝日遺跡から出土した弥生時代前期の土器29点である。各試料の出土した遺跡名、器種、部位、整形技法、表面観察結果などを表1に示す。

2. 分析方法

土器片約10～15gを鉄乳鉢を用いて粉碎し、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4mm-1/8mmの粒子をテトラプロモエタン（比重約2.96）により重液分離、重鉱物のプレパラートを作製、偏光顕微鏡下にて同定した。同定の際、変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。

3. 分析結果

鉱物の同定粒数は、250個を目標としたがこれに満たない試料が12点あった。さらにこのうち100個に満たない試料がNo.10、No.14、No.24の3点あった。これら3点の組成は、他の試料と同等に扱うことはできない。このうち、No.24は計数だけにとどめ、他の2点は参考としてダイアグラムまで作成した。

試料全体的に多く認められた鉱物は、斜方輝石と単斜輝石の両輝石および角閃石・不透明鉱物である。これらの鉱物の各試料における量比は様々である。また、試料によっては、多量の黒雲母を含むものや少量の酸化角閃石とジルコン、微量のカンラン石とザクロ石および電気石などを含むものがある。

各試料の鉱物組成を表2、図1に示す。

4. 考察

(1) 試料の分類

分析結果をもとに各試料の重鉱物組成において優占する鉱物、含まれる鉱物の組合せおよびその量比などから以下（Ⅰ-1・2・3，Ⅱ-1・2・3・4・5，Ⅲ）のような試料の分類をおこなった。

○Ⅰグループ

斜方輝石と角閃石・不透明鉱物を主体とし、少量のジルコンを伴う。各鉱物の量比から次の小グループにわけることができる。

●Ⅰ-1（No.1・4・6・8・9・16・23）

不透明鉱物が最も多い。

●Ⅰ-2（No.2）

斜方輝石が最も多く、角閃石と不透明鉱物がほぼ同量である。

●Ⅰ-3（No.5・7・15・17・18）

全体的に「その他」が非常に多く、斜方輝石と不透明鉱物がほぼ同量である。さらにザクロ石を少量伴う。No.10の組成の傾向は、本グループに近い。

○Ⅱグループ

斜方輝石が多い。他の鉱物との組合せから次の小グループにわけることができる。

●Ⅱ－１（No.29）

斜方輝石が非常に多い。

●Ⅱ－２（No.11・13）

斜方輝石と角閃石が多い。

●Ⅱ－３（No.20・21・25）

斜方輝石と角閃石が多いが、少量の黒雲母を伴う。

●Ⅱ－４（No.12・14・22・27）

Ⅱ－３に似るが、全体的に「その他」が多い。

●Ⅱ－５（No.19・26）

斜方輝石と黒雲母が多い。

○Ⅲグループ（No.3・28）

黒雲母が最も多く、少量の角閃石を伴う。斜方輝石は微量である。

以上のグループを図2に示す。

(2)胎土グループと土器の外見的特徴との関係について

今回の試料においては、胎土と土器の出土遺跡・器種・部位・整形技法との間に特に対応関係は認められない（図2）。また、土器に認められる突帯と胎土との間にも明瞭な対応関係は認められない。ただし、突帯文（圧痕）という特徴の共通するNo.3とNo.29がいずれも他の試料とは胎土の傾向が異なるⅢグループに属する。このことは、突帯と胎土との間に、ある限られた範囲において対応関係のある可能性が考えられる。

(3)名古屋市周辺域の遺跡より出土した弥生時代の土器の胎土について

これまで当社では、（助愛知県埋蔵文化財センターからの依頼により弥生時代前期から弥生時代末～古墳時代にかけての土器について胎土分析を行ってきた。これらの試料の中には、本分析の試料とよく似た胎土を持つものが多数認められる。ここで、本分析の胎土のグループに類似するこれまでの弥生時代の土器の胎土のグループを以下に示す。

本分析 これまでの分析

- | | | |
|-------|---|---------------------------------------|
| Ⅰ－１ | － | 阿弥陀寺遺跡関連試料（1988）Ⅰ－４ |
| Ⅱ－１ | － | 阿弥陀寺遺跡関連試料（1988）Ⅰ－１・町田遺跡関連試料（1988）Ⅶ |
| Ⅲ－２ | － | 阿弥陀寺遺跡関連試料（1988）Ⅰ－５・町田遺跡関連試料（1988）Ⅶ |
| Ⅱ－３・４ | － | 阿弥陀寺遺跡関連試料（1988）Ⅰ－４・町田遺跡関連試料（1988）Ⅶ |
| Ⅱ－５ | － | 阿弥陀寺遺跡関連試料（1988）Ⅰ－２・廻間遺跡関連試料（1988）Ⅰ－３ |
| Ⅲ | － | 阿弥陀寺遺跡関連試料（1988）Ⅳ－１ |

上記の報告における各グループの試料の状況は概ね次の通りである。阿弥陀寺遺跡関連試料（1988）のⅠグループは、阿弥陀寺遺跡または勝川遺跡より出土した考古学的にみて遺跡周辺地域で作られたと考えられる弥生時代中期の壺または甕が中心である。町田遺跡関連試料（1988）Ⅶグループは、八

開・清洲・春日井の各地の遺跡より出土した弥生時代後期～古墳時代のS字甕で、この報告においては少数グループであった。廻間遺跡関連試料(1989)Ⅰ－3グループは、廻間遺跡出土の弥生時代末～古墳時代のS字甕または受け口甕のグループである。この報告においてもこのグループは、やはりS字甕の中では少数グループである。阿弥陀寺遺跡関連試料(1988)Ⅳ－1グループは、阿弥陀寺遺跡より出土した考古学的にみて外来系と考えられる弥生時代中期の壺や甕、および豊橋市の瓜郷遺跡や吉良町の遺跡から出土した同時代の壺や甕である。

以上のような本分析のグループと各報告のグループの対応状況から、本分析のⅠ・Ⅱグループは、名古屋市周辺地域で作られた可能性が考えられる。鉱物組成をみてもいずれも両輝石の比較的多い組成で、これまで濃尾平野地域で作られた可能性の高い土器の指標としてきたものに相当する。一方、本分析のⅢグループは、阿弥陀寺遺跡出土の外来系の土器や愛知県東部の遺跡から出土した土器の胎土に類似することから外来の可能性を考えることができる。

ところで、本分析におけるⅠ・Ⅱグループは、今回の試料のなかでは圧倒的多数を占め、主流グループを成す。しかし、上記に述べたようにそれに対応するグループはそれぞれの報告において必ずしも主流ではない。むしろ弥生末～古墳時代の試料においては少数グループになっている。このことから、名古屋市周辺の遺跡から出土する弥生時代の土器においては、時代が新しくなるにつれ両輝石の多い胎土の土器が減少する傾向があるのではないだろうか。これまでのところ各報告とも試料の時代・遺跡などの選択状況にばらつきがあり検討の必要があることは言うまでもない。しかし、弥生時代における土器の供給状況の時代的变化の可能性を考えるための基礎試料として今後も注目すべき事項である。

第2表 月縄手遺跡関連連胎土分析試料表

試料番号	遺跡名	出土地点	器種	部位	整形	備考	表面の色（表・裏）	表面の質感（表・裏）	表面観察結果（表・裏）
1	月縄手	SX01	壺	肩部	ミガキ	突帯文（圧痕）	にぶい黄・灰白・灰白	粗い	灰色・白色岩片多量、赤色岩片少量含む。径10mmのチャート岩片あり。
2	"	"	"	体部	"		にぶい黄・灰白・灰白	ややきめ細かい	黒色岩片少量含む。
3	"	"	"	頸部	"		にぶい赤・黄・黄・黄	粗い	灰色・白色岩片多量、黒色岩片少量含む。
4	"	"	"	口縁部	"		灰白・同	粗い	灰色・白色岩片多量、黒色岩片少量含む。
5	"	"	"	底部	"		灰白・同	粗い	灰色・白色岩片多量、黒色岩片少量含む。
6	"	"	"	"	"		灰黄・黄・黄・黄	やや粗い	白色粒少量含む。白色岩片・白色粒少量含む。
7	"	"	"	"	"		灰白・灰黄・黄	粗いーやや粗い	灰色岩片多量、白色粒少量含む。白色粒少量含む。
8	"	"	"	体部	"		灰黄・黄・黄・黄	ややきめ細かいーやや粗い	灰色岩片少量含む。白色粒少量含む。灰色岩片少量含む。
9	"	"	甕	"	条痕		黄・黄・黄・黄	粗い	白色粒・黒雲母片少量含む。白色粒多量、黒雲母片少量含む。
10	"	"	"	"	"		灰・黄・黄・黄	やや粗いー粗い	白色岩片少量含む。白色・灰色岩片中料含む。
11	"	"	"	口縁部	前痕		にぶい黄・黄・黄・黄	やや粗いー粗い	白色粒多量、灰色岩片少量含む。灰色岩片多量、黒色岩片少量含む。
12	"	"	"	裾部	"		灰・黄・黄・黄	粗い	白色岩片多量含む。白色・灰色岩片多量含む。
13	"	"	"	体部	"		黄・黄・黄・黄	やや粗いー粗い	白色粒少量含む。白色・灰色岩片多量、赤色粒少量含む。
14	"	"	"	裾部	ハケ		にぶい黄・黄・黄・黄	粗いーやや粗い	白色岩片中料含む。白色・灰色岩片中料含む。
15	"	"	"	"	"		灰・黄・黄・黄	粗い	白色・灰色岩片少量含む。白色・灰色岩片・白色粒多量含む。
16	"	"	"	肩部	"		黄・黄・黄・黄	やや粗い	白色粒多量、白色岩片少量含む。
17	"	"	"	体部	"		黒・灰黄・黄・黄	粗い	白色・灰色岩片・白色粒中量含む。白色岩片多量、黒雲母片少量含む。
18	"	"	"	裾部	"		にぶい黄・黄・黄・黄	やや粗い	白色・灰色岩片・白色粒少量含む。白色岩片少量含む。
19	"	"	"	頸部	"		浅黄・黄・黄・黄	粗い	白色岩片多量、赤色粒少量、黒雲母片少量含む。
20	"	"	"	裾部	前痕		灰・黄・黄・黄	粗い	白色・灰色岩片多量、赤色粒少量含む。白色・灰色岩片多量、赤色粒少量含む。
21	朝日	P11-1.2	壺	肩部	ミガキ	削り出し突帯	灰黄・黄・黄・黄	ややきめ細かい	灰色岩片多量含む。
22	"	混土具層4	"	体部	"	貼付突帯	にぶい黄・黄・黄・黄	粗い	灰色岩片少量含む。灰色・黒色岩片多量含む。
23	"	第3具層	"	頸部	"	削り出し突帯	浅黄・黄・黄・黄	やや粗いー粗い	灰色岩片少量含む。灰色・黒色岩片多量含む。
24	"	P1V	"	"	条痕	貼付指押突帯	黄・黄・黄・黄	やや粗い	白色岩片少量含む。
25	"	黒色土下部	"	体部	ハケ	刺突列点文	灰白・暗灰・浅黄・黄	粗いーやや粗い	灰色岩片多量、白色岩片少量含む。白色岩片少量含む。
26	"	黒色砂層	"	"	前痕跡ミガキ	710514	黒・黄・黄・黄	やや粗いー粗い	白色岩片・黒雲母片少量含む。灰色・白色岩片多量、黒雲母片少量含む。
27	高蔵	P-1-1-3	"	肩～頸部	ミガキ	710602	灰白・同	やや粗い	灰色岩片少量含む。灰色・黒色岩片（最大径4mm）中量含む。
28	"	混土具層	"	体部	"	710323	にぶい黄・黄・黄・黄	やや粗いー粗い	灰色岩片中量含む。灰色岩片多量、白色岩片少量含む。
29	"	D2	甕	"	刷毛	突帯（圧痕）貼付	淡黄・灰黄	ややきめ細かいーやや粗い	灰色岩片少量含む。

* 岩片：粒径約0.5～2mm程度の角ばった砂粒。

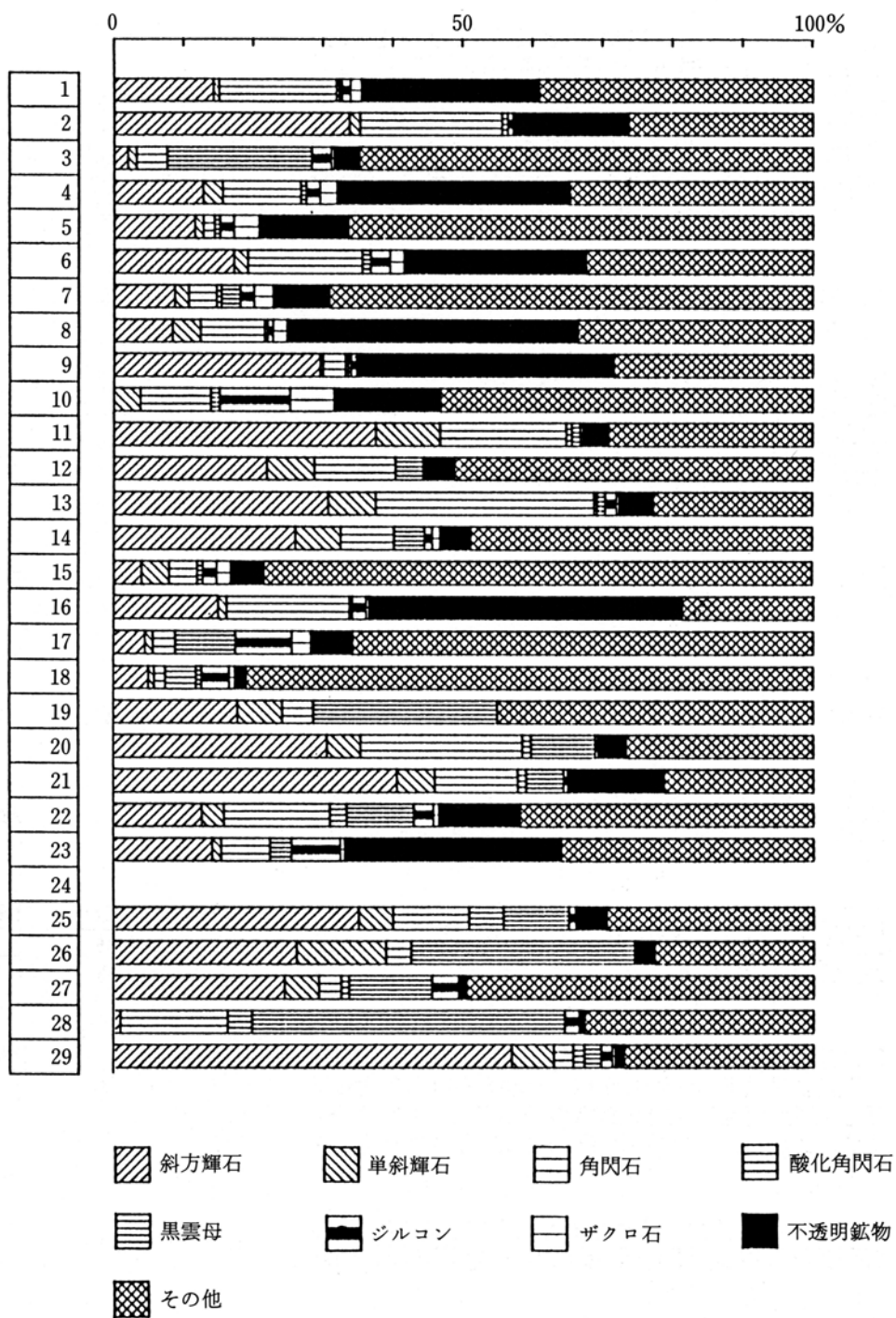
粒：粒径0.2mm程度。外見的には粘土の微細な固まりのように見える。

表面の質感および表面観察の結果で裏の記載のないものは、表に同じである。

第3表 月縄手遺跡関連試料 胎土重鉱物組成

試料番号	重 鉱 物 組 成													固定鉱物粒数
	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石		酸化角閃石	黒雲母		ジルコン	ザクロ石	電気石	不透明鉱物	その他	
				緑色	褐色		緑色	赤褐色						
1		35	2	40	1	1	1		3	4	1	62	94	244
2		45	2	27		1			1			22	35	133
3		5	3	11			49	3	7	1	3	9	159	250
4		32	7	28			2		5	6	1	83	86	250
5		29	3	4			2		5	9		32	166	250
6		43	5	41			3		7	5	1	65	80	250
7		13	3	6		1	3	1	3	4		12	103	149
8		21	10	23			1		2	5	2	104	82	250
9		74	1	8		1	1		2			92	71	250
10			3	8				1	8	5		12	42	79
11		94	23	45		2	3			1		9	73	250
12		55	17	29			10				2	11	126	250
13		77	17	78		1	1	2	4	1		12	57	250
14		24	6	7			3	1	1	1		4	45	92
15		10	10	9	1			2	5	5		12	196	250
16		37	3	44				1	5	1	5	112	42	250
17		8	2	6			14	2	15	5	3	11	119	185
18		12	2	3	1	11	2		10	2		4	203	250
19		44	16	11			54	12					113	250
20		76	12	58		3	18	5	1			10	67	250
21		68	9	20		2	7	2	1			23	36	168
22		31	8	35	3	6	19	5	7	2		29	105	250
23		22	2	11			4	1	11	1		49	57	158
24	2	1	2	7				1	4	7	2	9	11	46
25		71	10	16	6	10	5	14	2			9	60	203
26	1	65	32	9			57	23				7	56	250
27		45	9	5	1	2	5	17	7		2	2	90	185
28		1		22		5	37	27	3		2	1	45	143
29		142	15	5	2	4	4	2	4	1		3	68	250

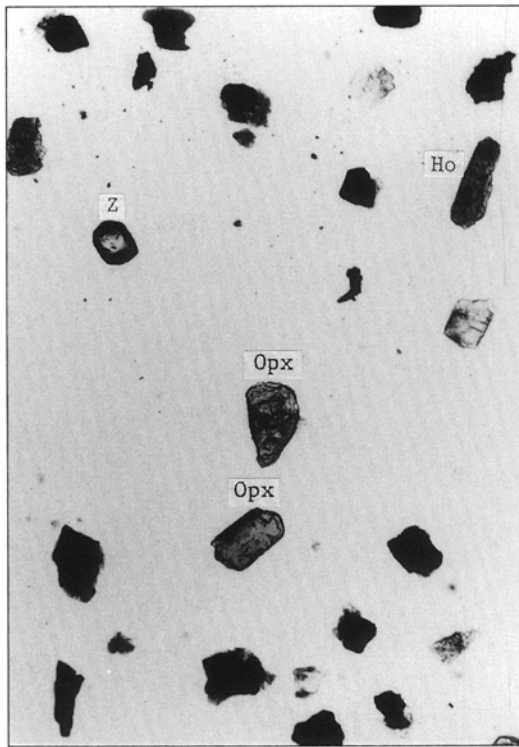
*数値は全て粒数



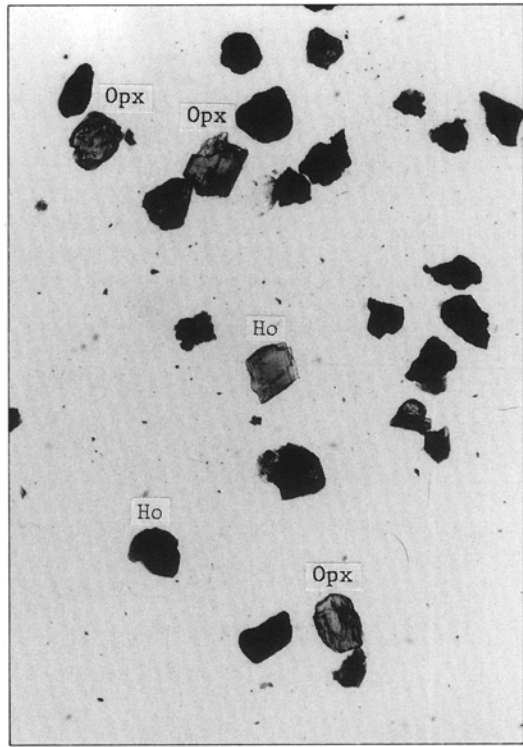
第21図 月縄手遺跡関連資料 胎土重鉱物組成ダイアグラム

			遺跡名	器種	整形	
I - 1	1		月縄手	壺	ミガキ	
	4					
	6					
	8			甗	冬痕	
	9				ハケ	
	16					
	23					
		朝日	壺	ミガキ	削り出し突帯	
I - 2	2		月縄手	壺	ミガキ	
I - 3	5		月縄手	壺	ミガキ	
	7					
	15			甗	ハケ	
	17					
	18					
*	10		月縄手	甗	冬痕	
II - 1	29		高蔵	甗	ハケ	
II - 2	11		月縄手	甗	削痕	
	13					
II - 3	20		月縄手	壺	削痕	
	21		朝日	甗	ミガキ	
	25			壺	ハケ	
II - 4	12		月縄手	甗	削痕	
	14				ハケ	
	22		朝日	壺	ミガキ	
	27		高蔵		貼付突帯	
II - 5	19		月縄手	甗	ハケ	
	26		朝日		削痕後 ミガキ	
III	3		月縄手	壺	ミガキ	突帯文（圧痕）
	28		高蔵			突帯（圧痕） 貼付

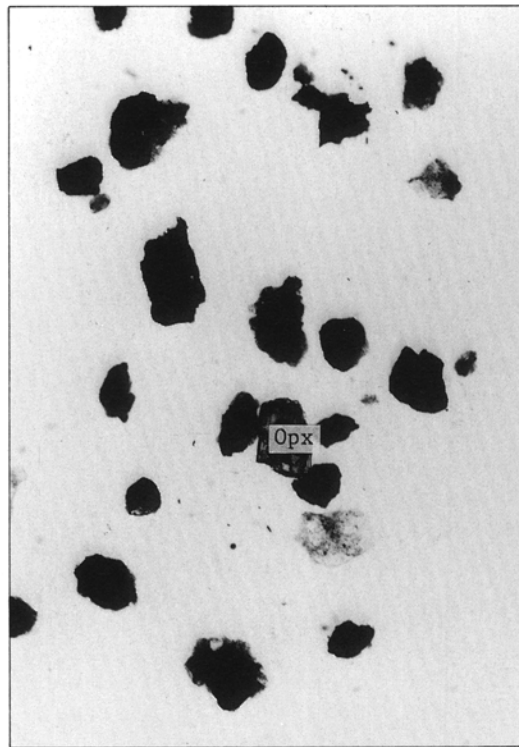
第22図 月縄手遺跡関連資料 胎土重鉱物組成ダイアグラム(グループ別)



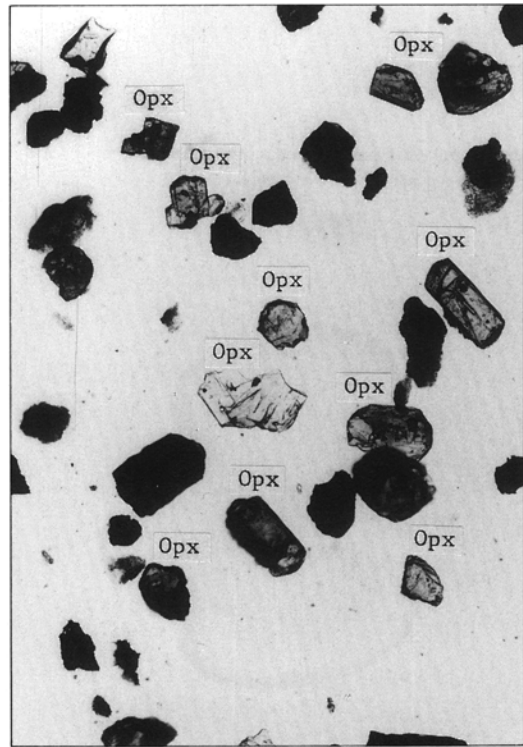
I - 1 グループ (No. 16)



I - 2 グループ (No. 2)

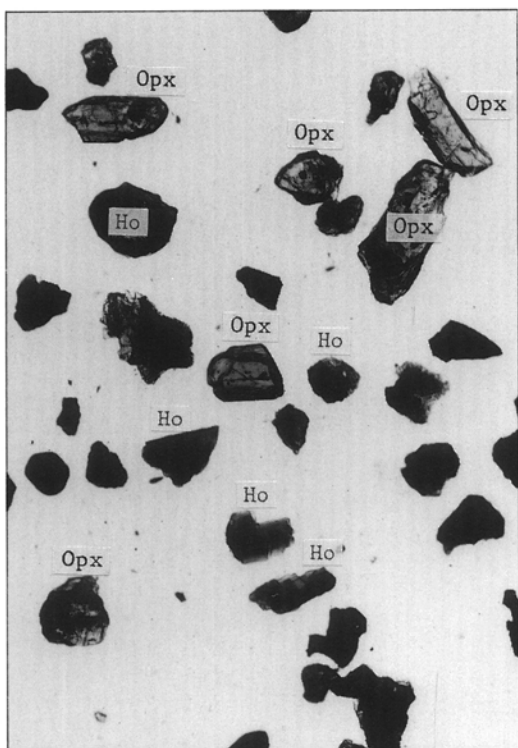


I - 3 グループ (No. 7)

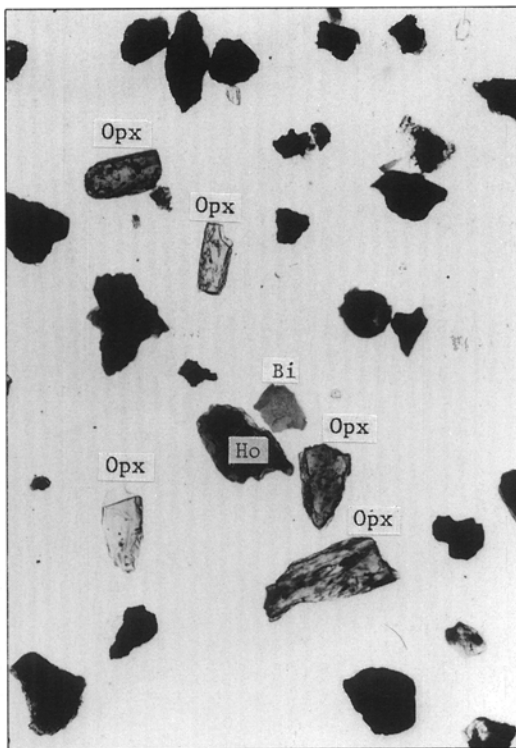


II - 1 グループ (No. 29)

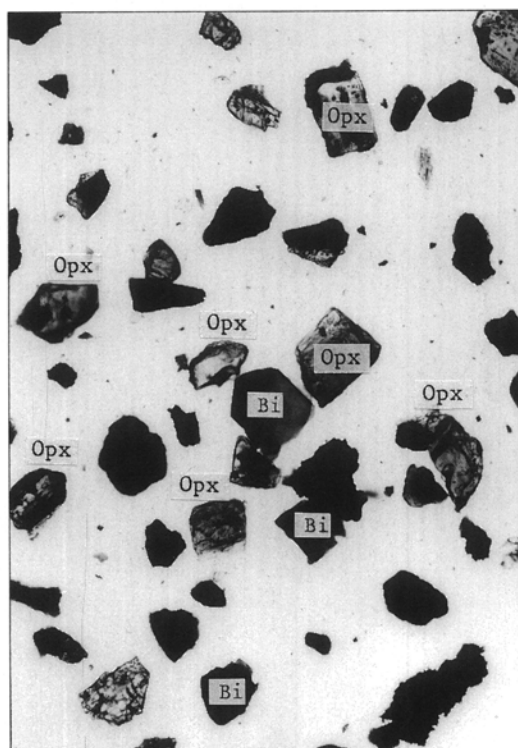
第23図 月縄手遺跡関連資料 偏光顕微鏡写真(1)



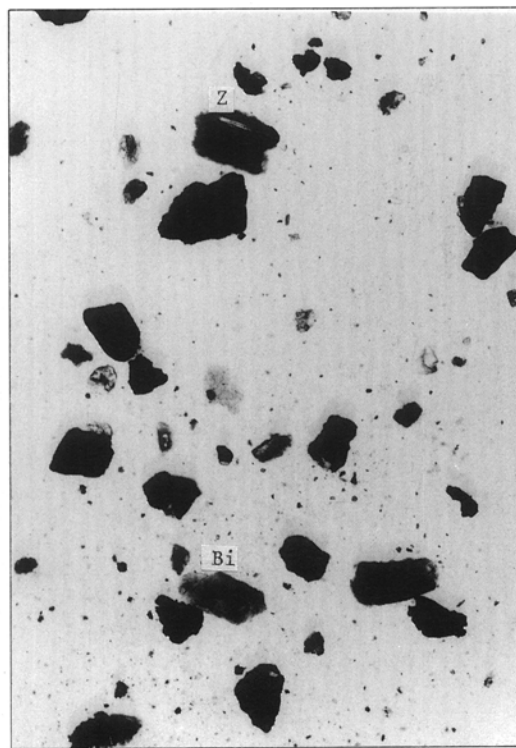
II-2 グループ (No. 13)



II-3 グループ (No. 20)



II-5 グループ (No. 26)



IIIグループ (No. 28)

Opx: 斜方輝石, Ho: 角閃石, Bi: 黒雲母, Z: ジルコン

第24図 月縄手遺跡関連資料 偏光顕微鏡写真(2)

(2)月縄手遺跡包含層の堆積環境について

I. はじめに

月縄手遺跡62B区において、遺跡包含層の堆積環境を推定するために、珪藻分析、花粉分析および放射性炭素年代の測定を行ったので、その概要をここに報告する。

なお、珪藻分析については筆者が、花粉分析についてはパリノサーベイ株式会社、放射性炭素年代の測定についてはパリノサーベイ株式会社を通じて学習院大学放射性炭素年代測定室に依頼して実施した。

II. 分析方法

1. 珪藻

月縄手遺跡（INH62B区）の南壁セクションの基本土層（A～E）中より計5試料を採取し分析した。分析層準と柱状図は図1のとおりである。

試料の処理および抽出は、過酸化水素水（35%）処理ののち比重選別法によって分離し、マウントメディア（和光純薬製）にて封入した。検鏡は1000倍の光学顕微鏡を使用し、各試料とも200個の珪藻殻を同定するよう努めた。しかし、試料中に含まれる珪藻殻が極端に少ない場合は、200個に達しなくても検鏡を打ち切った。珪藻殻の算定にあたっては、400倍で複数枚のプレパラート中の8走査線以上を検鏡し、鏡下に出現した個数と試料の希釈率から算出した。

2. 花粉

分析を依頼した試料は、月縄手遺跡（INH62B区）の南壁セクションより25試料、同じく西壁セクションより5試料の計30試料である。

花粉・孢子化石の抽出は、以下の方法によった。試料15gをフッ化水素・アセトリシス処理、さらにKOH処理ののちグリセリンにて封入した。検鏡はプレパラート全面を走査し、その間に出現したすべての種類について同定・計数した。

III. 分析結果

1. 珪藻

今回の分析で得られた珪藻は、21属69種（2変種および未同定種1種を含む）計730個体であった（表1）。珪藻遺骸の群集組成は、全体にpHについては、好アルカリ～不定性種が多く、水流性については大部分が不定性種で占められ、真～好止性種が各試料ともわずかずつ出現した。また、珪藻の生態性ではそのほとんどが底生の種群で占められ、数～10%程度の付着生種群が伴われた。

珪藻殻の含有殻数は、試料1で 1.4×10^4 個/g、試料2で 6.4×10^5 個/g、試料3で 3.6×10^5 個/g、試料4で 4.4×10^4 個/g、試料5で 5.3×10^5 個/gであった。試料5を除いて珪藻殻の保存状態は悪く、各試料とも10～20%の二次化石や誘導化石が伴われる。（ただし、今回の計数からは除外した）。

また、*Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia subcapitata*、*Pinnularia borearis*など、水分のほとんどないところでも生活できる好気性の「陸生珪藻」が試料2の59%を最高に、54%（試料3・4）、34%（試料5）、30%（試料1）と大変高率で出現した。

2. 花 粉

パリノサーベイ株式会社の分析結果によれば、分析を依頼した計30試料のうち、良好な花粉化石が検出されたのはD層中の1試料(計5試料のうち最上位の試料)、E層中の1試料の計2試料のみであった。残りの28試料についてはまったく花粉が検出されなかったか、あっても花粉外膜が壊れていて同定・計数できないものばかりであった。

D層中の試料からは樹木花粉ではアカガシ亜属(総花粉の10%)、コナラ亜属(同7%)、草本花粉ではイネ科(同27%)、ヨモギ属(同9%)などが出現している。また、E層の試料からは樹木花粉ではアカガシ亜属(同5%)、コナラ亜属(同2%)、草本花粉ではイネ科(同70%)、カヤツリグサ科(同3%)などが出現した。

3. 放射性炭素年代

月縄手遺跡(INH62B区)の西壁セクションの黒灰色砂質シルト層中の有機物試料から、 3280 ± 150 y.B.P. (Gak-13520) という測定値が得られた(図1)。この測定結果は、考古遺物から推定される弥生時代前期という相対年代よりはかなり古い。ただし、ここでの年代値は1950年より起算した年数である。

VI. 考 察

珪藻・花粉ともに分析試料が少なく、そのうえ検出された化石の保存状態が悪いので、古環境を復元することは困難である。

乏しい情報をもとに古環境を考察すると、遺跡の基盤層を構成する灰白色細砂層(弥生時代前期以前)は珪藻殻がきわめて少なく、安定した水域の堆積物とは考えにくい。柱状図bでこれより下位数mにわたり、細砂～中・粗粒砂層が分布していることから、この砂層はおそらく「沖積上部砂層」を構成する堆積物の一部にあたるのではないかと考えられる(朝日遺跡では同層準の砂層下位より汽水性の珪藻が多産した、森・伊藤;1989)。

弥生時代前期の遺物包含層は、珪藻殻の含有率が比較的高い。しかし、珪藻遺骸群集に陸生珪藻が59%も含まれることから、あまり水の影響を受けることのない湿潤な地表面、ないしはせいぜい水たまり的な環境下で堆積した地層であろうと考えられる。珪藻遺骸に二次化石・誘導化石が多いことより、包含層を構成する碎屑物には何らかの原因でより古い時代の堆積物が混入している可能性が高く、そのことが放射性炭素年代値を大きくした原因になっているのかもしれない。いずれにせよ、今後、年代測定にあたっては同一層準であっても多数の試料を測定することによって、測定値のばらつきを補正する必要があるように思われる。

これより上位には、緑灰色の細砂層をはさんで古墳時代前半の溝が検出された。この溝中の試料についても陸生珪藻の出現率が高く、弥生時代前期の遺物包含層同様、水の影響の少ない堆積物と考えられる。

最上位に位置する地層Eの時期になると、陸生珪藻の出現率が減少するとともに、珪藻殻数および珪藻種数の増加が著しくなり、珪藻の繁殖しやすい環境に変化したことが考えられる。この地層は、考古学的には近・現代の水田耕作土と推定されており、このことは珪藻の分析結果ともよく一致する。花粉分析結果でもこの地層中よりイネ科(イネ属)の花粉が多数検出されており、水田耕作土であっ

たという推定を裏づけている。

文 献

森 勇一 (1989) 愛知県町田遺跡における珪藻遺骸群集、愛知県埋蔵文化財センター町田遺跡報告書、64-73

森 勇一 (1989) 昆虫化石から得られた愛知県勝川遺跡周辺の古環境、考古学と自然科学、27、57-81

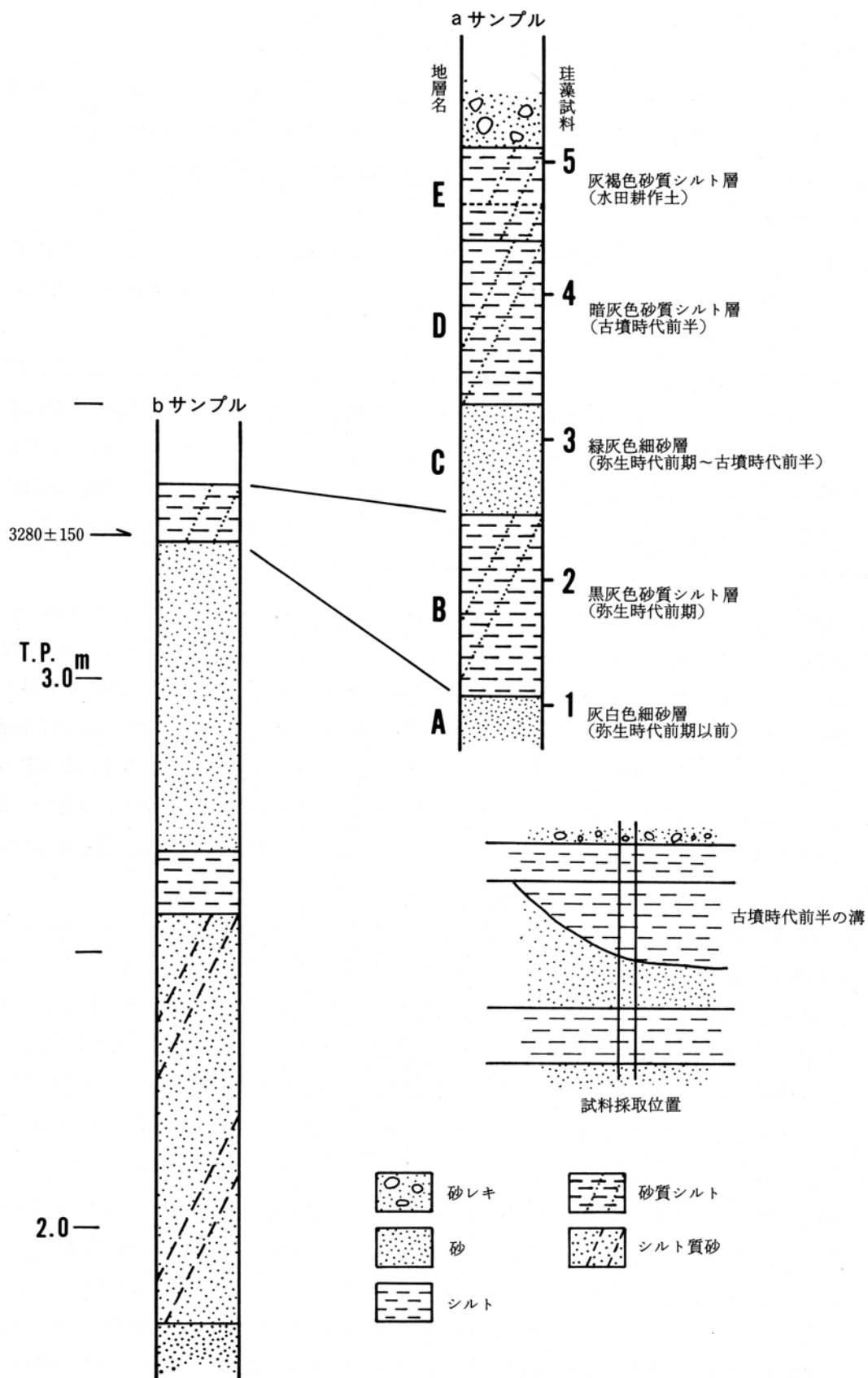
森 勇一・伊藤隆彦 (1989) 古生物学的にみた朝日遺跡の古環境の変遷、愛知県埋蔵文化財センター年報 (昭和63年度)、76-91

第4表 月縄手遺跡の珪藻分析結果

種 名	生 態 値				1	2	3	4	5	計
	pH	CURR	ECOL	CI						
1 <i>Achnanthes lanceolata</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	2	1	2	•	•	5
2 <i>Achnanthes linearis</i>	Ind	Ind	Epip	Ind	1	1	1	1	•	4
3 <i>Amphora ovalis</i> var. <i>libyca</i>	Alph	Ind	Bent	Ind	2	•	•	•	2	4
4 <i>Amphora perpusilla</i>	Alph	Ind	Bent	Ind	•	•	1	•	•	1
5 <i>Amphora veneta</i>	Alph	Ind	Bent	Ind	•	•	1	•	•	1
6 <i>Caloneis bacillum</i>	Alph	Ind	Bent	Ind	•	•	•	•	3	3
7 <i>Caloneis hyalina</i>	Alph	Ind	Bent	Ind	•	•	•	1	1	2
8 <i>Caloneis silicula</i>	Acph	Ind	Bent	Ind	•	•	•	•	1	1
9 <i>Cocconeis placentula</i> var. <i>euglypta</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	1	•	5	1	•	7
10 <i>Cymbella aequalis</i>	Alph	Liph	Epip	Ind	•	•	•	•	1	1
11 <i>Cymbella aspera</i>	Acph	Ind	Epip	Ind	1	•	•	•	1	2
12 <i>Cymbella ehrenbergii</i>	Acph	Libi	Epip	Ind	•	•	•	•	1	1
13 <i>Cymbella gracilis</i>	Ind	Liph	Epip	Ind	•	•	•	•	2	2
14 <i>Cymbella minuta</i>	Ind	R-ph	Epip	Ind	3	1	1	1	•	15
15 <i>Cymbella naviculiformis</i>	Ind	Ind	Epip	Ind	•	•	•	•	1	1
16 <i>Cymbella sinuata</i>	Ind	Libi	Epip	Ind	1	1	1	•	•	3
17 <i>Cymbella turgida</i>	Albi	Libi	Epip	Ind	•	1	1	•	1	3
18 <i>Diploneis ovalis</i>	Ind	Ind	Bent	Ind	•	•	7	•	7	14
19 <i>Epithemia zebra</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	•	•	•	•	1	1
20 <i>Eunotia flexuosa</i>	Acph	Ind	Epip	Hpho	•	1	1	•	•	2
21 <i>Eunotia lunaris</i>	Acph	Ind	Epip	Hpho	•	4	1	1	1	7
22 <i>Eunotia pectinalis</i>	Acph	Ind	Epip	Hpho	•	1	6	7	1	15
23 <i>Eunotia praerupta</i>	Acph	Ind	Epip	Hpho	•	•	2	•	•	2
24 <i>Eunotia sudetica</i>	Acph	Ind	Epip	Hpho	•	1	•	•	•	1
25 <i>Fragilaria construens</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	•	•	•	•	5	5
26 <i>Frustulia rhomboides</i>	Acph	Liph	Epip	Hpho	•	•	•	•	5	5
27 <i>Frustulia vulgaris</i>	Ind	Ind	Epip	Ind	•	•	•	1	•	1
28 <i>Gomphonema acuminatum</i>	Ind	Liph	Epip	Ind	•	•	•	4	1	5
29 <i>Gomphonema angustatum</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	•	•	•	1	1	2
30 <i>Gomphonema constrictum</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	•	•	•	•	1	1
31 <i>Gomphonema gracile</i>	Ind	Liph	Epip	Ind	•	•	•	•	1	1
32 <i>Gomphonema parvulum</i>	Ind	R-ph	Epip	Ind	4	3	10	1	5	23
33 <i>Gomphonema sphaerophorum</i>	Aplh	Ind	Epip	Ind	1	•	•	•	3	4
34 <i>Gomphonema subtile</i>	Ind	Ind	Epip	Ind	•	•	•	•	1	1
35 <i>Hantzschia amphioxys</i>	Alph	Ind	Bent	Ind	6	39	26	22	17	110
36 <i>Melosira granulata</i>	Alph	Liph	Plan	Ind	•	1	•	•	6	7
37 <i>Navicula acceptata</i>	Alph	Liph	Bent	Ind	•	1	•	•	•	1
38 <i>Navicula bacillum</i>	Alph	Ind	Bent	Ind	•	•	•	•	1	1
39 <i>Navicula contenta</i>	Alph	R-ph	Bent	Ind	•	2	8	2	•	12
40 <i>Navicula eliginensis</i>	Alph	R-bi	Bent	Ind	1	27	11	4	1	44
41 <i>Navicula eliginensis</i> var. <i>neglecta</i>	Alph	R-bi	Bent	Ind	•	2	•	1	•	3
42 <i>Navicula mutica</i>	Ind	Ind	Bent	Ind	1	11	5	6	9	32
43 <i>Navicula placentia</i>	Ind	Ind	Bent	Ind	•	2	•	•	•	2
44 <i>Navicula pupula</i>	Ind	Ind	Bent	Ind	2	2	•	•	•	4
45 <i>Navicula radiosa</i>	Ind	Ind	Bent	Ind	•	•	•	•	2	2
46 <i>Navicula</i> sp.	Ind	Ind	Bent	Ind	•	1	•	•	•	1
47 <i>Neidium bisulcatum</i>	?	?	Bent	?	•	3	•	3	2	8
48 <i>Neidium iridis</i>	Ind	Liph	Bent	Hpho	•	3	5	3	5	16
49 <i>Nitzschia obtusa</i>	Alph	?	Bent	Meha	•	•	1	•	•	1
50 <i>Nitzschia palea</i>	Ind	Ind	Bent	Ind	•	1	2	1	2	6
51 <i>Nitzschia parvula</i>	Ind	Ind	Bent	Ind	•	3	1	1	1	6
52 <i>Pinnularia acrosphaeria</i>	Ind	Ind	Bent	Ind	•	1	•	•	•	1
53 <i>Pinnularia appendiculata</i>	Acph	?	?	?	•	•	•	•	3	3
54 <i>Pinnularia borealis</i>	Ind	Ind	Bent	Ind	6	38	4	2	3	53
55 <i>Pinnularia braunii</i>	Acph	Ind	Bent	?	•	•	•	•	1	1
56 <i>Pinnularia dactylus</i>	Acph	Ind	Bent	Ind	•	•	1	•	•	1
57 <i>Pinnularia gibba</i>	Acph	Ind	Bent	Ind	•	3	3	•	8	14
58 <i>Pinnularia hemiptera</i>	Acph	Libi	Bent	Ind	•	•	•	•	1	1
59 <i>Pinnularia interrupta</i>	Ind	Ind	Bent	Ind	•	•	•	•	3	3
60 <i>Pinnularia microstauron</i>	Acph	Ind	Bent	Ind	•	3	4	3	6	16
61 <i>Pinnularia subcapitata</i>	Ind	Libi	Bent	Ind	•	27	52	28	38	145
62 <i>Pinnularia viridis</i>	Ind	Ind	Bent	Ind	•	•	2	1	1	4
63 <i>Rhopalodia gibberula</i>	Alph	Ind	Epip	Meha	4	5	3	5	17	34
64 <i>Rhopalodia musculus</i>	Alph	Ind	Epip	Haph	1	1	•	•	•	2
65 <i>Stauroneis anceps</i>	Ind	Ind	Bent	Ind	•	•	•	•	1	1
66 <i>Stauroneis phoenicenteron</i>	Ind	Ind	Bent	Ind	•	3	•	1	6	10
67 <i>Synedra rumpens</i>	Ind	Liph	Epip	Ind	•	•	•	•	1	1
68 <i>Synedra ulna</i>	Alph	Ind	Epip	Ind	6	6	8	9	8	37
69 <i>Tabellaria fenestrata</i>	Acph	Ind	Epip	Hpho	•	•	•	•	1	1
TOTAL					43	200	176	111	200	730

生態値凡例

pH (pH spectra)	水流性 (Current spectra)	生態性 (Ecology)	塩分 (Halobion spectra)
Albi: Alkalibiontic forms (真アルカリ性種)	Libi: Limnobiontic forms (真止水性種)	Bent: Benthonic forms (底生種)	Euha: Euhalobous forms (真塩性種)
Alph: Alkaliphilous forms (好アルカリ性種)	Liph: Limnophilous forms (好止水性種)	Epip: Epiphytic forms (付着生種)	Meha: Mesohalobous forms (中塩性種)
Ind: Indifferent forms (不定性種)	Ind: Indifferent forms (不定性種)	Plan: Planktonic forms (浮遊生種)	Haph: Halophilous forms (好塩性種)
Acph: Acidophilous forms (好酸性種)	R-ph: Rheophilous forms (好流水性種)	?: Unknown (不明種)	Ind: Indifferent forms (不定性種)
Acbi: Acidobiontic forms (真酸性種)	R-bi: Rheobiontic forms (真流水性種)		Hpho: Halophobous forms (嫌塩性種)
?: Unknown (不明種)	?: Unknown (不明種)		?: Unknown (不明種)



第25図 月縄手遺跡の模式柱状図

5. まとめ

今回の月縄手遺跡の発掘調査では、尾張地方の、わけても庄内川中流域における原始、古代を解明する上で新たな資料を追加することになり、特に資料の少ない弥生時代前期における単純層の検出は最大の成果であったと考える。以下ではこの弥生時代前期の月縄手遺跡について考えてみたい。

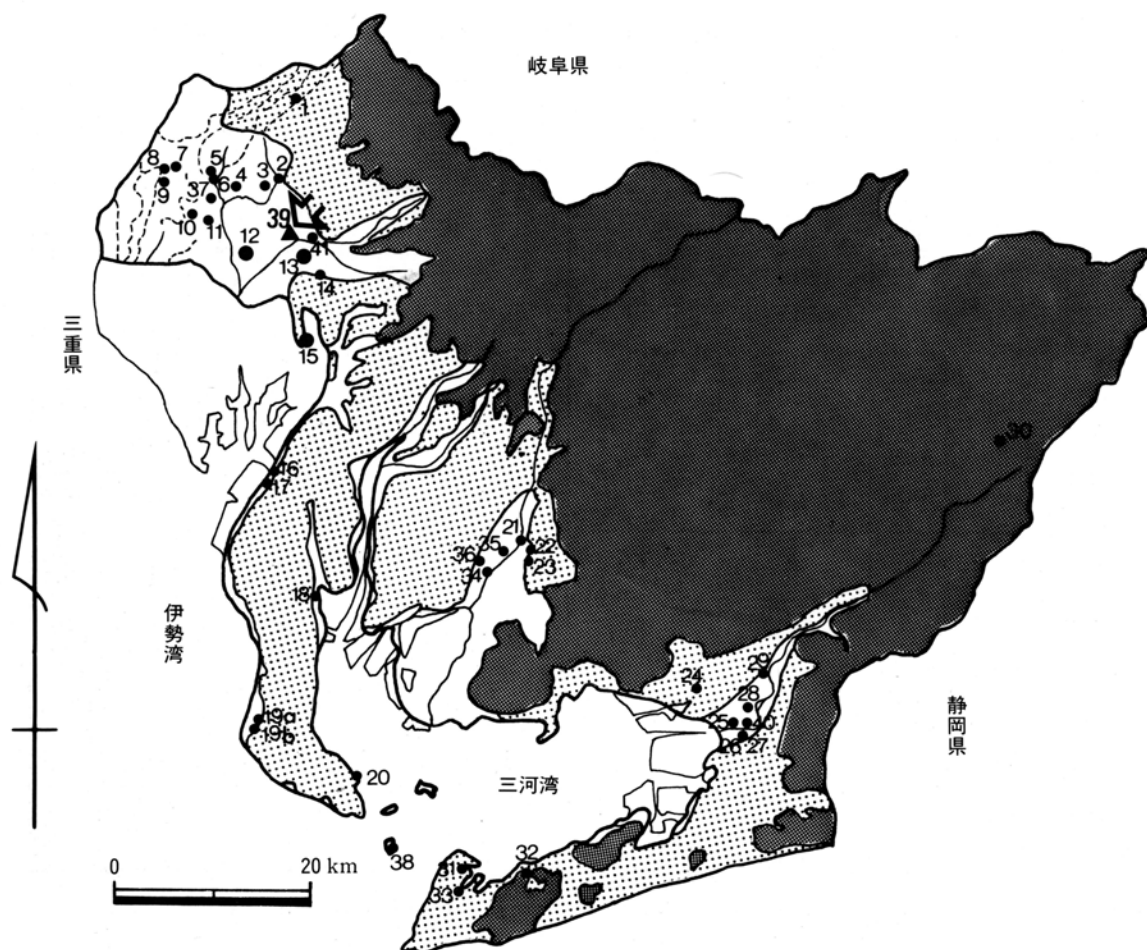
〔空間的特質〕

弥生時代前期の尾張北西部は、稲作農耕を伴う前期弥生文化の伝播を語る時、必ずといって良い程紹介される地域である。それはこの地域が面的な意味で、前期弥生文化が直接影響を及ぼした地域の東端にあたるからである。

縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて、東海地方を中心とする地域には、条痕文系土器文化が繁栄する。こうした地域に、西から稲作を伴う遠賀川系土器文化が伝播し、条痕文系土器文化と接触を持ちながらも、この時期には二つの土器文化がそれぞれどちらかに、完全に吸収されることもなく共存し、遠賀川系土器文化の東進は、この地域で失速したと現在まで考えられている。しかし尾張北西部の弥生時代前期の様相は、こうした説が語られているにもかかわらず、その接触状況や共存状況を具体的に示すような良好な同時代資料に乏しいのが現状である。

第9図に示したように、愛知県内ではこれまでに遠賀川系土器が確認された遺跡は、40を超える。図に示されたような分布状況を見ると、尾張北西部の低地帯、矢作川流域の低地帯、豊川流域の低地帯^{※1}に遺跡のまとまりが認められる。しかしこの内、尾張北西部の数遺跡を除いて、遠賀川系土器の出土状況は客体的であり、表採資料のみ確認された例や、わずか数片のみ出土した例、現在では確認が不可能な例など、状況が明確に把握できないものが半数近くを占める。その中で、遠賀川系土器本来の組成に近い資料を主体的に出土する遺跡は、尾張北西部に集中するのである。今回の調査で、これらに月縄手遺跡が加わったことになる。したがって全体の様相としては、遠賀川系土器を持った集団のこの地域への進出は、主として尾張北西部の低地帯までと考えざるを得ない。

この尾張北西部の弥生時代前期の遺跡に関しては、高橋信明氏が興味深い分析を行なっている。氏は、この地域における遠賀川系土器が出土する遺跡を、出土遺物の在り方からパターンに分類^{※2}している。第10図に示したように、縄文土器が主体となる縄文型（第10図1、西浦遺跡が相当）、遠賀川系土器が相対的^{※3}数量においてのみ優勢となる「弥生A型」（第10図、Aグループ）、遠賀川系土器が主体（9割強）となる「弥生B型」（第10図、Bグループ）である。「縄文型」は扇状地に、「弥生A型」は丘陵に近い平野部に、「弥生B型」は当時の海岸線に近い平野部に位置する。このような諸遺跡の位置関係は、「縄文ムラ」から「弥生ムラ」への変容過程を考える時、重要な意味を含んでいるといえよう。月縄手遺跡の弥生時代前期出土遺物は、遺物の項でも触れたように僅かに含まれる条痕系土器を除いて、遠賀川系土器によって占められており、位置的にも、内容的にも「弥生B型」に属するといっていよいであろう。遠賀川系土器を持った集団は、海岸に近い低地に進出し、それぞれの水系の上流の在来集団と交流を持つといった図式が、第10図からは読み取れるが、今後の周辺資料の増加によっても位置関係は大きくはずれずともなく、このような図式がより明確になってゆくものと思われる。



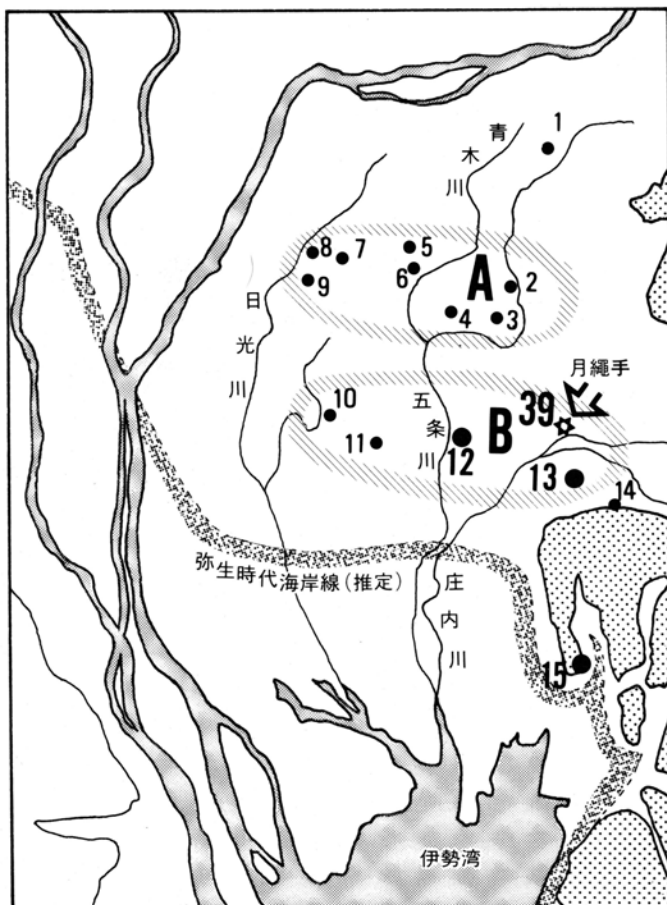
番号	遺跡名	所在地	番号	遺跡名	所在地
1	西浦	丹波郡大口町	21	矢作川河床	岡崎市
2	曾野	岩倉市	22	高木	岡崎市
3	のんべ	岩倉市	23	神明	岡崎市
4	元屋敷	一宮市	24	河原田	宝飯郡御津町
5	馬見塚D地点	一宮市	25	檜王	宝飯郡小坂井町
6	弥鞆	一宮市	26	五貫森	豊橋市
7	北川田	一宮市	27	大蚊里	豊橋市
8	山中	一宮市	28	麻生田大橋	豊川市
9	河田	一宮市	29	水神平	宝飯郡一宮町
10	大塚古墳下層	稲沢市	30	桜平	北設楽郡東栄町
11	清水	稲沢市	31	八幡上	渥美郡渥美町
12	朝日	西春日井郡清洲町	32	西郷中	渥美郡渥美町
13	西志賀	名古屋市北区	33	保美	渥美郡渥美町
14	片山神社	名古屋市東区	34	亀塚	安城市
15	高蔵	名古屋市熱田区	35	楠	安城市
16	荒古 (八幡森地点)	知多市	36	釈迦山	安城市
17	細見	知多市	37	下津城	稲沢市
18	岩滑	半田市	38	神明社	知多郡南知多町
19 a	下高田	知多郡美浜町	39	月縄手	名古屋市西区
19 b	下高田 (丸山地点)	知多郡美浜町	40	郷中	豊川市
20	山田	知多郡美浜町	41	松河戸	春日井市

第26図 愛知県遠賀川系土器出土遺跡分布図

〔時間的特質〕

この伊勢湾北岸域にあたる尾張北西部の弥生時代前期は、現在まで時間軸の中でどのように捉えられてきたのであろうか。

この地方の弥生時代前期への認識は、1930年代に行なわれた一連の西志賀貝塚（名古屋市北区）の調査及び報告に端を発する。日本の考古学史上にも重要な足跡を残したこの遺跡の調査、研究を中心とし、高蔵貝塚（名古屋市熱田区）、貝殻山貝塚（西春日井郡清洲町）など、遠賀川系土器がまとまって出土した遺跡との対比から、弥生時代前期は大きく2時期に分けられ、これが現在まで続いている。すなわち、畿内第Ⅰ様式中段階に併行するであろうと思われる貝殻山式¹⁴（貝殻山下層式）、同じく中・新段階に併行するであろうと思われる西志賀式（貝殻山上層式）で



第27図 尾張北西部遺跡分布図

ある。このような尾張北西部の弥生時代前期は、この2時期の中にも諸段階が存在したであろうことが前述¹⁵の遺跡の出土遺物や、他地域の様相などから窺える。しかし既存の資料には、遺構に伴う良

文様	遺跡	月縄手	高蔵 S D03	高蔵 D02	高蔵 D10
段					
削り出し突帯					
削り出し突帯+沈線少条	7 (25.0%)	3 (3.3%)			
削り出し突帯+沈線多条		2 (2.2%)		1 (5.6%)	
沈線少条	13 (46.4%)	5 (5.6%)	3 (15.8%)	2 (11.1%)	
沈線多条	4 (14.3%)	51 (57.3%)	11 (57.9%)	9 (50%)	
貼り付け突帯	4 (14.3%)	21 (23.6%)	5 (26.3%)	6 (33.3%)	
無文		7 (7.8%)			
観察個体計	28 (100%)	89 (99.9%)	19 (100%)	18 (100%)	

第5表 壺形土器の文様構成

好な資料が少なく、当該期の「弥生B型」の遺跡数も少ないため、換言すれば、既存の資料を畿内第Ⅰ様式に照合して推断せざるを得ない状況でもある。

月縄手遺跡の出土遺物から時期幅を求めるために、主要器種である広口壺形土器の文様構成をまとめたのが第1表である。これを当地域において比較するためには、同様の器種がまとまって遺構から出土している遺跡を抽出しなければならないと考え、著名な貝殻山、西志賀貝塚の資料は除き、高蔵遺跡S D03、D02、D10の資料を並記する。ただし月縄手遺跡の資料は、間層によって独立した弥生時代前期^{註6}単純層であるため^{註7}、包含層出土資料まで含んだものである。

月縄手遺跡の場合、弥生時代前期の中でも、畿内第Ⅰ様式古・中段階にみられる段をもつものや、幅の狭い削り出し突帯をもつものはみられず、最古の様相としては同中段階にみられる削り出し突帯にへら描沈線を少条（1～3条）施すものが、全体の約4分の1みられる。最も多くみられるのはへら描沈線少条で、全体の約2分の1を占める。同中段階後半から新段階にみられる沈線多条や、貼り付け突帯は両者を合わせても全体の3分の1に満たない。主流となる文様は沈線少条で、そこに新旧の様相が混在するとみてよいのではなかろうか。これらの文様構成要素からみて、月縄手遺跡の資料は前期中段階の後半とするのが妥当ではないかと思われる。

これに対して高蔵遺跡（名古屋台地上）は、遺跡の立地条件が月縄手遺跡と異なるが、同様のカウントを行なった結果、南山大学が調査を行なったS D03出土資料では、古い様相として削り出し突帯に沈線をもつものや、沈線少条のものが、合わせても全体の10分の1程度であり、沈線多条のものになると半数以上を占めている。さらに月縄手遺跡の沈線多条は4～5条であるのに対して、S D03のものは4～9条と多条化が目立つ。そして沈線多条及び貼り付け突帯を合わせたものが、月縄手遺跡では30%未満なのに対して、高蔵遺跡S D03では80%を超える。僅かに古い様相も入るが、主流となる文様は沈線多条で、貼り付け突帯も含めて大半は前期の中でも新しい様相で占められているとみてよいだろう。これらの文様構成要素からみて、S D03出土資料は前期新段階に相当するものと思われる。調査面積、出土点数に差はあるものの、名古屋市教育委員会が調査を行なったD02、D10出土資

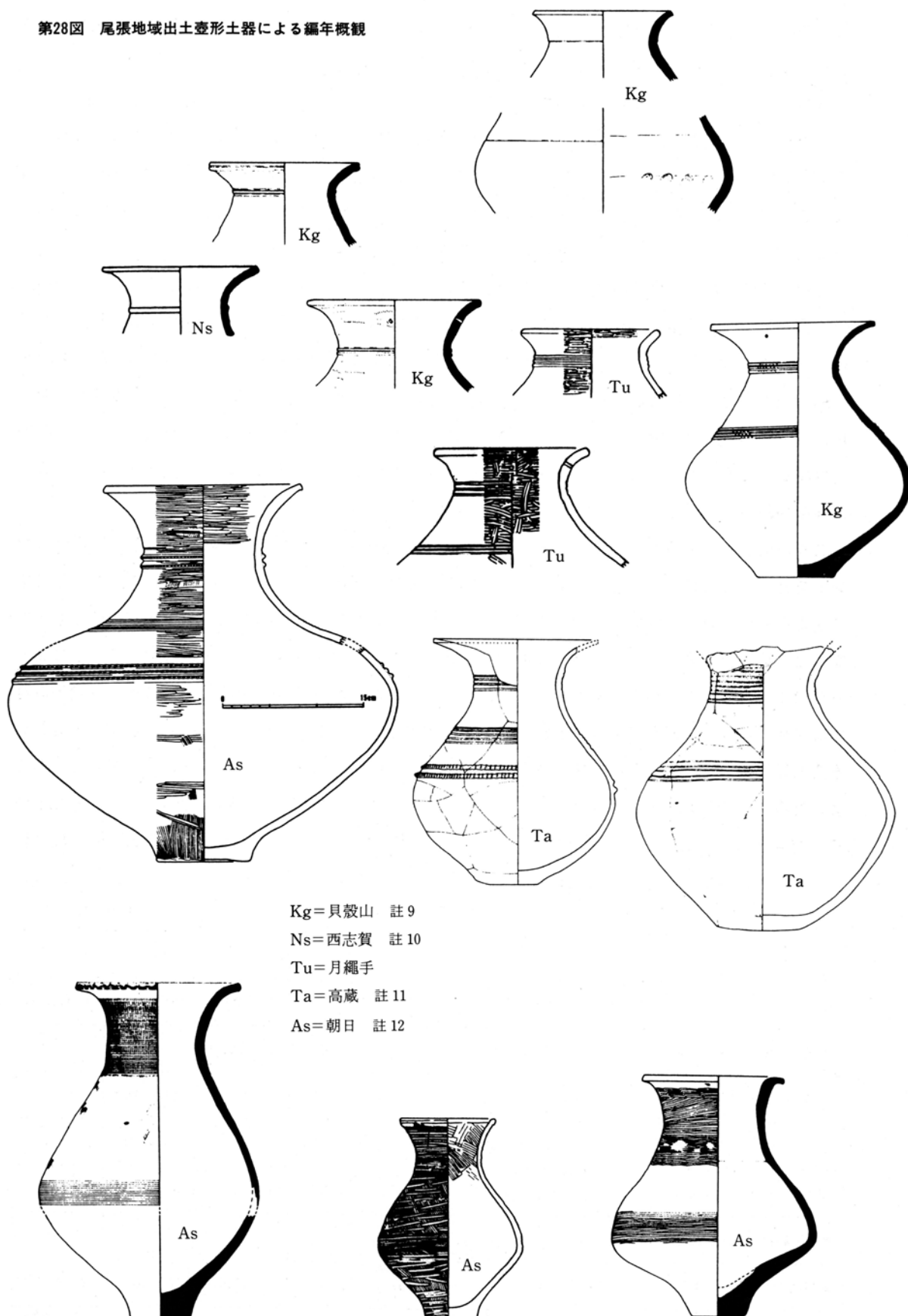
口縁部刻目 頸部文様	月 縄 手		高蔵S D03		高蔵D02		高蔵D10	
	有	無	有	無	有	無	有	無
無 文	17 (47.2%)	5 (100%)	9 (39.1%)	4 (100%)	2 (18.2%)	4 (40%)	1 (14.3%)	4 (100%)
沈 線 1 条	5 (13.9%)		2 (8.7%)		1 (10%)	1 (10%)		
沈 線 2 条	3 (8.3%)		4 (17.4%)		2 (18.2%)	2 (20%)	2 (28.6%)	
沈 線 3 条	8 (22.2%)		1 (4.3%)		2 (18.2%)	2 (20%)	1 (14.3%)	
沈線4条以上	2 (5.6%)		7 (30.4%)		4 (36.4%)	1 (10%)	3 (42.3%)	
沈線間刺突	1 (2.8%)							
観察個体計	36 (100%)	5 (100%)	23 (99.9%)	4 (100%)	11 (99.1%)	10 (100%)	7 (99.4%)	4 (100%)

第6表 壺形土器の文様構成

第28図 尾張地域出土壺形土器による編年概観

弥
生
時
代
前
期

中
期
前
葉



料においても沈線多条のものが半数以上を占め、貼り付け突帯と合わせた新しい様相のものが80%をそれぞれ超えていることなど、比率としては全く同様の結果を示している。

甕形土器に関して文様構成を同様にカウントしまとめたものが第2表である。この表には器面調整は分類項目に入れていないが、月縄手遺跡の場合、甕形土器の3分の1近くがヘラ削り調整であることに注意したい。そして形態、文様、調整などから、二系統の特徴が見出されるのである。すなわち甕A類はハケ目調整で底部はそのまま窄まり、甕B類のうちヘラ削り調整のものは底部が僅かに広がる。またヘラ削り調整のものには、頸部に文様が施されているものがみられないのである。このヘラ削り調整の甕は、先に述べた「弥生A型」の遺跡からの出土が顕著であり、出自も現在の一宮市付近が候補地とされている。このような甕が、前期中段階後半の「弥生B型」に属する月縄手遺跡から多く出土しているということ^{註8}は、遠賀川系土器をもたらした集団の文化動態、変容過程を窺う上で興味深いものがある。さらにこの表作成のために取り上げた高蔵遺跡の甕には、ヘラ削り調整を施すものがみられなかったことも、前期新段階の名古屋台地上の土器組成を考える上で興味深い。表にみられる遺跡間の差としては、高蔵遺跡D02においてのみ口縁部に刻目をもたないものに文様を施す例がみられることである。そして沈線を4条以上施すものが月縄手遺跡に比べて、高蔵遺跡の各遺構において比率が高いことが掲げられる。このように甕における多条化の傾向は壺の状況と一致しているため、時間軸の中で月縄手遺跡は、高蔵遺跡と比較しやや先行するものと位置づけたい。尚、これらの出土土器に関しては、月縄手遺跡、貝殻山貝塚、高蔵遺跡の遺物を対象として、(株)パリオ・サーヴェイに胎土分析を依頼し、第4章(1)にその結果を報告している。月縄手遺跡S X01出土資料から20点、貝殻山貝塚出土資料6点、高蔵遺跡D02出土資料3点を選出し、出土遺跡、器種、部位、調整技法などによってそれぞれ特徴がつかめないものかと期待したが、明瞭な対応関係は認められないようである。尤も貼付突帯資料に関しては、一つの傾向が窺える。これらの胎土は分析の中でⅢグループとされ、尾張の外来系弥生式土器や、愛知県東部の遺跡出土資料の胎土と類似しており、人的、物的交流を考える上で興味深い。また、名古屋市周辺他遺跡から出土している弥生時代の土器との比較から、時代が新しくなるにしたがって、斜方、単斜の両輝石を多く含む胎土の土器が減少する傾向がみられることは、その要因を窺う上での基礎資料となるであろう。

現資料の段階で尾張北西部における弥生時代前期の様相を語ることは、困難を伴う。少ない資料による各研究者の区分が、混乱を招いているからである。現時点では、弥生時代前期を大枠で捉えながらも、資料の増加に目を向け、それらの比較検討により各段階の正確な把握を行なうことが先決であると考ええる。遠賀川系土器文化という光が伊勢湾北岸域に至った時、この地では他の西日本の諸地域に比べその光をより屈折させ分散させていったわけで、月縄手遺跡出土資料は弥生時代前期におけるリズムとしての当地域の様相を示す資料として重要なものとなるであろう。

弥生時代前期は、西日本全般に斉一性をもつというイメージで捉えられがちである。しかし諸地域には、それぞれの在来土器の影響による地域ごとの諸段階が存在する。それらを解明する上で、月縄手遺跡の出土資料が有効な材料となることを希望する。

註

- 1) 考古学談話会 (1985)『マージナル』5 所載の分布図をもとに補足、改訂を行なった
- 2) 高橋信明 (1985)「尾張東北部及び南西部」『マージナル』5
- 3) 註2に同じ
- 4) 佐原真 (1967)「山城における弥生文化の成立」『史林』50-5
- 5) 紅村弘 (1956)「愛知県における前期弥生式土器と終末期縄文土器との関係」『古代学研究』13
- 6) 名古屋市教育委員会 (1987)『熱田区夜寒町 高蔵遺跡発掘調査報告書』 数値は南山大学人類学博物館保管のものをカウントし、重松和男助教授に掲載の許可を戴いた
- 7) 名古屋市教育委員会 (1982)『高蔵遺跡発掘調査概要報告書』 数値は見晴台考古資料館保管のものをカウントし、木村有作、野澤則幸氏に掲載の許可を戴いた
- 8) 紅村弘 (1976)「中部東海西部」『考古学ジャーナル』125
- 9) 愛知県教育委員会 (1972)『貝殻山貝塚調査報告』
- 10) 杉原荘介 (1960)「愛知県西志賀貝塚」『日本農耕文化の生成』
- 11) 註6に同じ
- 12) 愛知県教育委員会 (1976)『朝日遺跡群第一次調査報告』
愛知県教育サービスセンター (1983)「朝日遺跡」『埋蔵文化財発掘調査年報』I

参考文献

- 小林行雄・杉原荘介 (1989再)『弥生土器集成』本編 東京堂出版
伊藤久嗣 (1980)『納所遺跡』三重県教育委員会
田崎博之 (1986)「弥生土器の起源」『論争学説 日本の考古学』雄山閣
深澤芳樹 (1989)「木葉紋と流水紋」『考古学研究』36-3 考古学研究

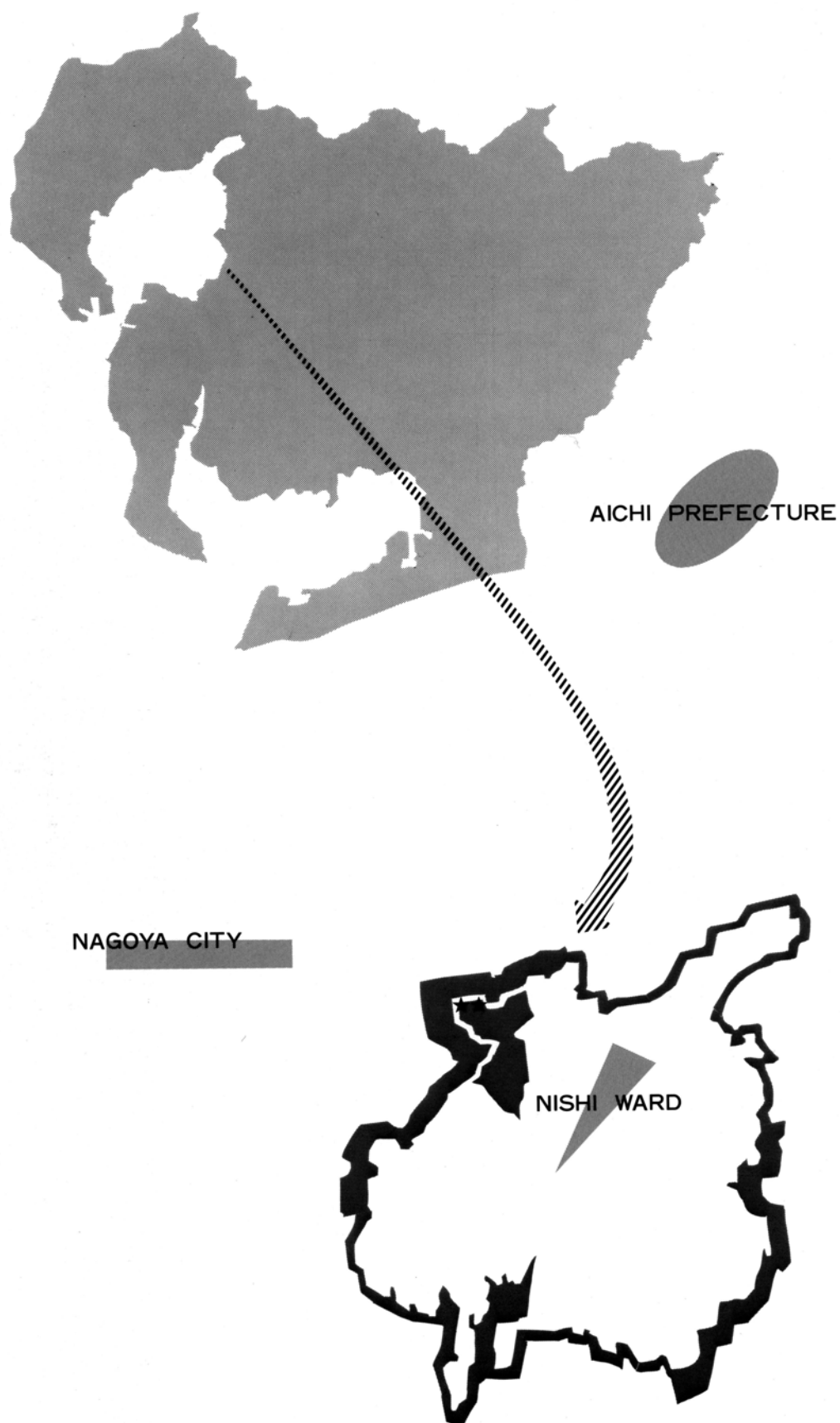
註に掲載のものは省略

第7表 月縄手遺跡出土遺物一覧表

番号	遺構	器種	登録番号	番号	遺構	器種	登録番号	番号	遺構	器種	登録番号
1	S X 01	壺の蓋 ^①	E - 1	41	S X 01	甕	E - 41	81	S K 23	甕	E - 81
2	" "	壺	E - 2	42	" "	"	E - 42	82	" "	"	E - 82
3	" "	"	E - 3	43	S K 16	壺	E - 43	83	S K 24	壺の蓋 ^①	E - 83
4	" "	" ^①	E - 4	44	S K 18	甕 ^②	E - 44	84	" "	" ^①	E - 84
5	" "	" ^②	E - 5	45	" "	壺	E - 45	85	" "	"	E - 85
6	" "	" ^①	E - 6	46	" "	甕	E - 46	86	" "	壺 ^①	E - 86
7	" "	"	E - 7	47	S K 19	壺の蓋	E - 47	87	" "	" ^②	E - 87
8	" "	"	E - 8	48	" "	壺	E - 48	88	" "	"	E - 88
9	" "	"	E - 9	49	" "	"	E - 49	89	" "	甕 ^①	E - 89
10	" "	"	E - 10	50	" "	"	E - 50	90	" "	"	E - 90
11	" "	"	E - 11	51	" "	" ^①	E - 51	91	検出	壺の蓋	E - 91
12	" "	壺の底	E - 12	52	" "	"	E - 52	92	トレンチ	"	E - 92
13	" "	壺	E - 13	53	" "	"	E - 53	93	"	"	E - 93
14	" "	"	E - 14	54	" "	甕	E - 54	94	検出	"	E - 94
15	" "	"	E - 15	55	" "	" ^①	E - 55	95	"	"	E - 95
16	" "	"	E - 16	56	" "	" ^①	E - 56	96	トレンチ	"	E - 96
17	" "	"	E - 17	57	" "	"	E - 57	97	"	"	E - 97
18	" "	甕 ^②	E - 18	58	" "	"	E - 58	98	"	" ^②	E - 98
19	" "	" ^①	E - 19	59	" "	"	E - 59	99	検出	"	E - 99
20	" "	" ^②	E - 20	60	" "	"	E - 60	100	トレンチ	" ^①	E - 100
21	" "	" ^②	E - 21	61	" "	鉢	E - 61	101	"	" ^③	E - 101
22	" "	" ^②	E - 22	62	S K 20	壺	E - 62	102	検出	壺 ^②	E - 102
23	" "	" ^①	E - 23	63	" "	"	E - 63	103	"	" ^①	E - 103
24	" "	" ^②	E - 24	64	" "	"	E - 64	104	トレンチ	" ^①	E - 104
25	" "	壺	E - 25	65	" "	甕	E - 65	105	"	" ^②	E - 105
26	" "	甕	E - 26	66	" "	"	E - 66	106	検出	" ^①	E - 106
27	" "	" ^②	E - 27	67	" "	"	E - 67	107	"	"	E - 107
28	" "	"	E - 28	68	" "	"	E - 68	108	"	"	E - 108
29	" "	"	E - 29	69	" "	"	E - 69	109	"	"	E - 109
30	" "	" ^①	E - 30	70	" "	"	E - 70	110	"	" ^②	E - 110
31	" "	"	E - 31	71	S K 21	壺	E - 71	111	"	" ^②	E - 111
32	" "	"	E - 32	72	" "	甕	E - 72	112	"	"	E - 112
33	" "	"	E - 33	73	" "	"	E - 73	113	"	" ^②	E - 113
34	" "	" ^①	E - 34	74	S K 22	壺	E - 74	114	トレンチ	"	E - 114
35	" "	"	E - 35	75	" "	甕	E - 75	115	検出	"	E - 115
36	" "	" ^②	E - 36	76	S K 23	壺の蓋	E - 76	116	"	"	E - 116
37	" "	"	E - 37	77	" "	壺	E - 77	117	"	"	E - 117
38	" "	"	E - 38	78	" "	"	E - 78	118	検出	"	E - 118
39	" "	"	E - 39	79	" "	"	E - 79	119	検出	"	E - 119
40	" "	"	E - 40	80	" "	無頸壺	E - 80	120	検出	"	E - 120

第8表 月縄手遺跡出土遺物一覧表

番号	遺 構	器 種	登録番号	番号	遺 構	器 種	登録番号	番号	遺 構	器 種	登録番号
121	検 出	壺	E-121	161	検 出	甕	E-161	203	検 II	S 字 甕	E-203
122	検 V	"	E-122	162	S K 20	"	E-162	204	検 II III	"	E-204
123	トレンチ	"	E-123	163	検 出	"	E-163	205	検 III		E-205
124	"	"	E-124	164	S K 19	"	E-164	206	"		E-206
125	検 出	"	E-125	165	S X 01	壺	E-165	207	"	甕	E-207
126	"	"	E-126	166	検 出	甕	E-166	208	"		E-208
127	"	"	E-127	167	S K 01	"	E-167	209	"	壺	E-209
128	検 V	"	E-128	168	"	"	E-168	210	"	"	E-210
129	トレンチ	"	E-129	169	検 出	"	E-169	211	"	"	E-211
130	"	台付鉢	E-130	170	S X 01	壺	E-170	212	S K 23	甕	E-212
131	検 出		E-131	171	検 出	"	E-171	214	S X 01		E-214
132	"	鉢	E-132	172	S K 19		E-172	215	" "	甕	E-215
133	トレンチ		E-133	173	検 V		E-173	216	S K 23	壺の蓋	E-216
134	検 出	甕 ㊸	E-134	174	検 出		E-174	217	" "	甕	E-217
135	"	" ㊸	E-135	175	"	壺	E-175	218	検 出	石 鏃	S-1
136	トレンチ	"	E-136	176	検 V	"	E-176	219	S K 19	石鏃未製品	S-2
137	検 出	" ㊸	E-137	177	S X 01	甕	E-177	220	" "	楔形石器	S-3
138	"	" ㊸	E-138	178	" "	壺	E-178				
139	"	"	E-139	179	" "		E-179				
140	"	"	E-140	180	トレンチ	甕	E-180				
141	"	"	E-141	182	S D 03	S 字 甕	E-182				
142	"	"	E-142	183	" "	"	E-183				
143	トレンチ	"	E-143	184	" "	高 杯	E-184				
144	検 出	"	E-144	185	" "	"	E-185				
145	トレンチ	"	E-145	186	" "	"	E-186				
146	検 出	"	E-146	187	" "	"	E-187				
147	トレンチ	"	E-147	188	検 II	S 字 甕	E-188				
148	検 出	"	E-148	189	"	"	E-189				
149	トレンチ	"	E-149	190	"	"	E-190				
150	検 出	"	E-150	191	検 I	"	E-191				
151	"	"	E-151	192	検 II	"	E-192				
152	"	"	E-152	193	"	ヒサゴ	E-193				
153	"	"	E-153	194	"	壺	E-194				
154	"	"	E-154	196	"	高 杯	E-196				
155	"	"	E-155	197	"	"	E-197				
156	"	"	E-156	198	"	"	E-198				
157	"	"	E-157	199	"	壺	E-199				
158	トレンチ	"	E-158	200	"		E-200				
159	"	二又注口状製品	E-159	201	"	壺	E-201				
160	S K 20	甕	E-160	202	"	S 字 甕	E-202				



貴生町遺跡

IV 貴 生 町 遺 跡

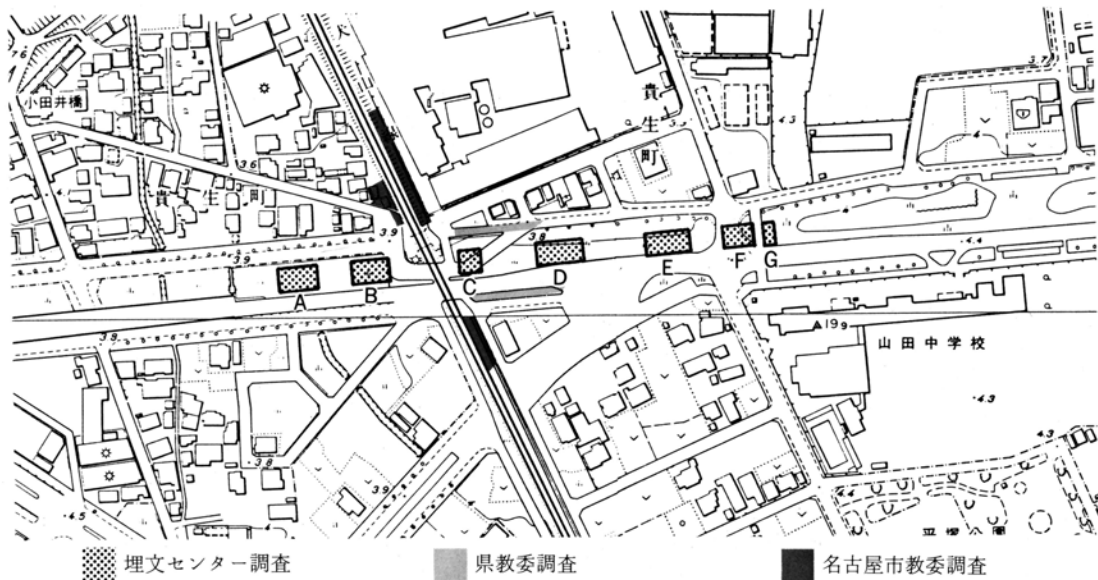
1. 概要

層序

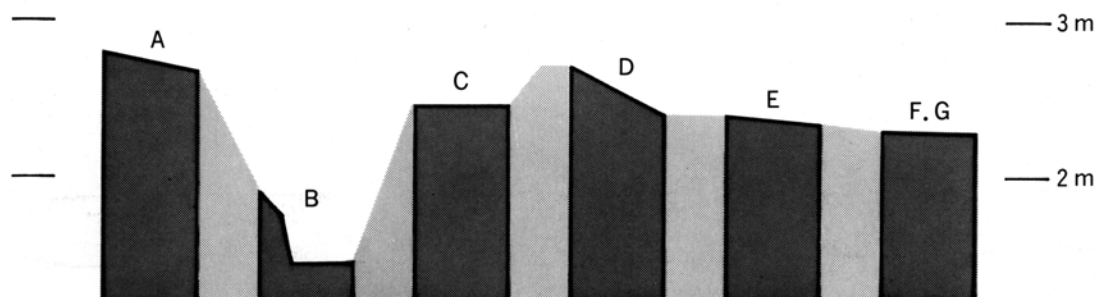
基本的には、表土－褐色粘質土－暗茶褐色粘質土（A・B区のみ）－黒色粘土（B～G区のみ）－地山（灰白色シルト・砂）に分かれる。各層の時期は、表土－現代、褐色粘質土－近世～近代、暗茶褐色粘質土－古墳時代、黒色粘土－古墳時代以前となるが、暗茶褐色粘質土と黒色粘質土の時期については、遺物量・出土状況の問題でさらに検討の必要があろう。

遺構の概要

各調査区の比高は第○図のとおりで、B区付近に谷地形がみられる。古墳時代の遺構はA・B区だけにみられ、地山上で検出した。褐色粘質土中では幾つかの高まりがみられ、水田跡の可能性があったが、A・B区を除いて明瞭な遺構としては認定できなかった。



第29図 調査区位置図

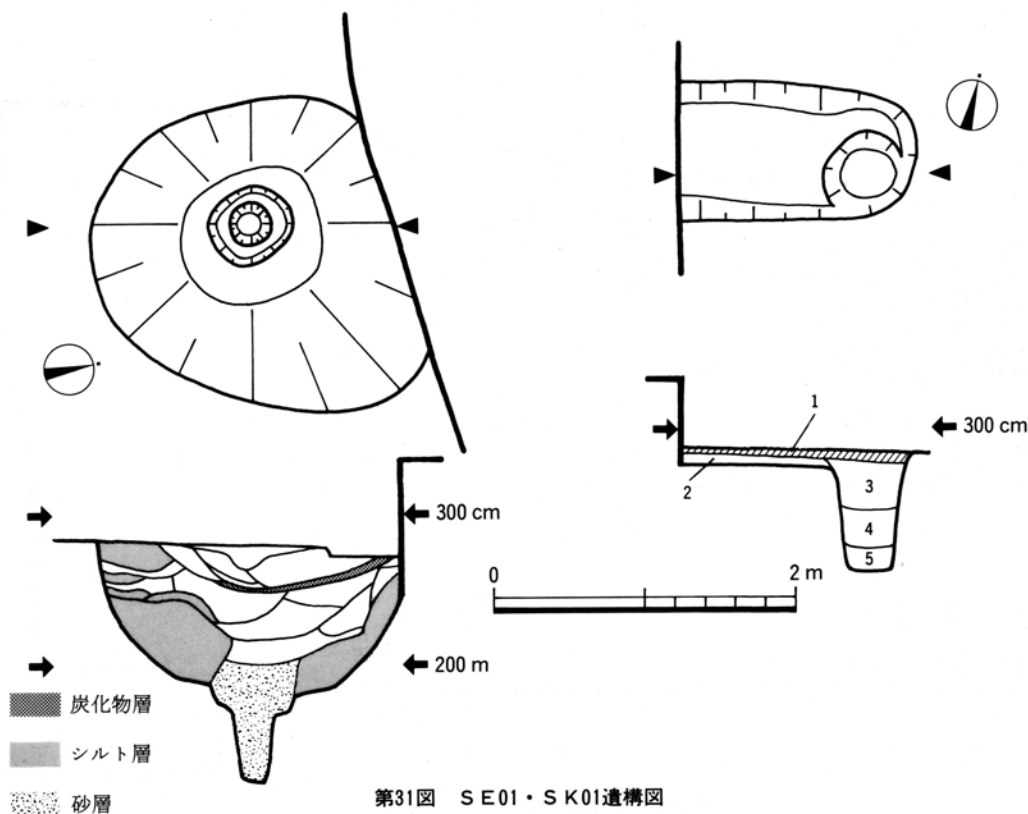


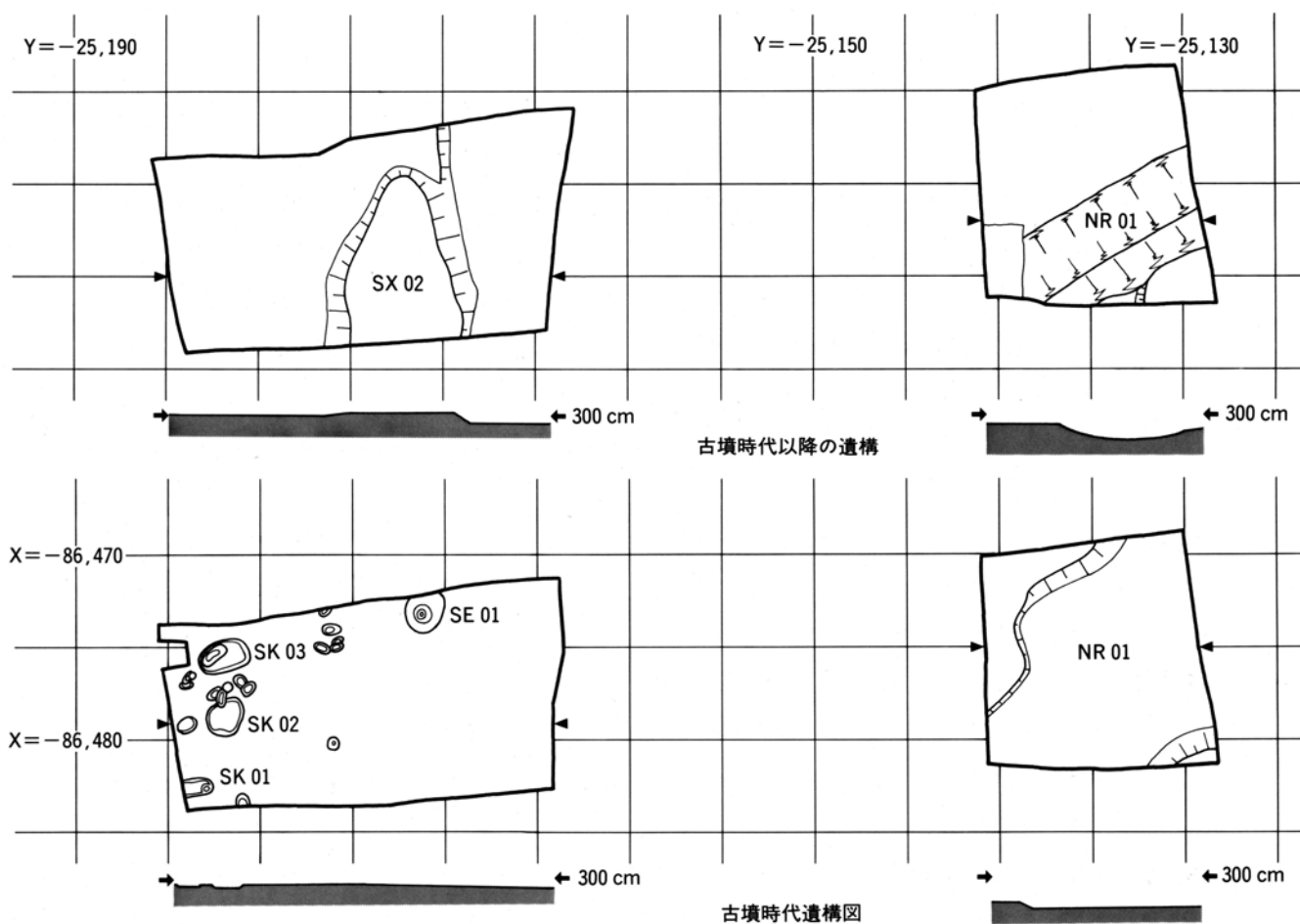
第30図 各調査区比高図

2. 遺構

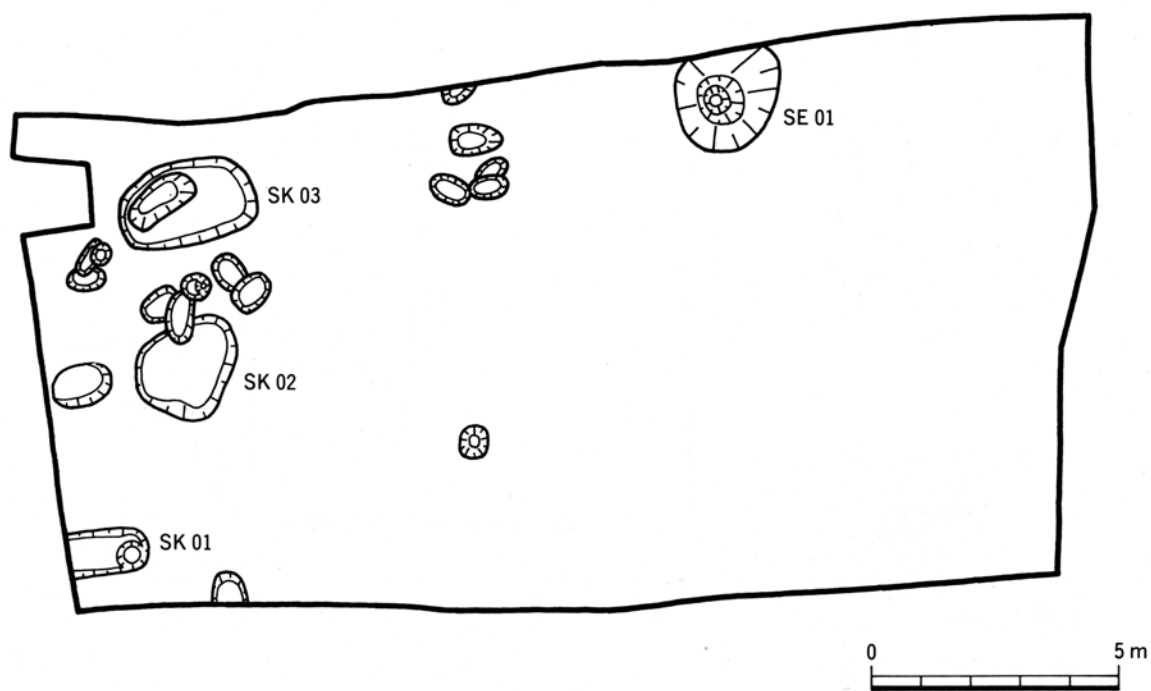
古墳時代

- S K 01** A区南西隅で検出されたため西端は不明であるが、長径160cm・短径90cm・深さ77cmを測る楕円形の土坑である。埋土の状況は（第 図）、1－暗灰色粘質土・2－暗茶褐色粘質土（炭化物を多量に含む）・3～5－暗褐色粘質土（地山ブロックを含む）で、出土遺物の大多数は1層より出土している。形態や埋土からみて柱穴状のものが考えられたが、他の地点で同様のものは検出されなかった。
- S K 02** 長径210cm・短径200cm・深さ4～9cmを測る土坑である。埋土は暗茶褐色粘質土で分層はできず、遺物も小片が疎らに出土するのみであった。
- S K 03** 長径270cm・短径170cm・深さ9～12cmを測る土坑である。この土坑の中にさらに小土坑がみられるが、これとS K 03の関係については、S K 03と同時かそれよりも古いという点しか明らかにできなかった。埋土は暗茶褐色粘質土で、少量の遺物が出土した。
- S E 01** 長径（205cm）・短径200cm・深さ158cmを測る。断面は半球状を呈し、中央においてさらに円形に二段に落ち込んでいる。埋土をみると、下層に底から噴き出したような粗砂、中層にシルトと粘質土が複雑に入り組んだ堆積、上層に最下底に炭化物の層を含む粘土・粘質土層があり、大多数の遺物は上層より出土している。
- S X 01** A区S K 03の上位の西接した場所で、ほぼ同じレベルで検出された土器群であるが、掘型等は明らかにすることはできなかった。遺物も小片ばかりである。





第32図 A・B区遺構図 (1 : 400)

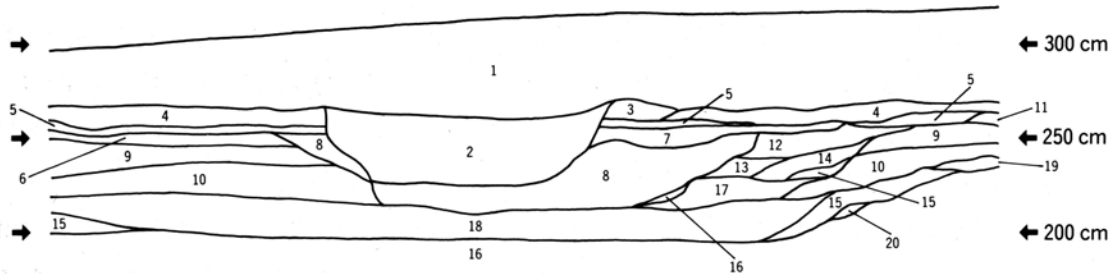


第33図 A区古墳時代遺構図 (1 : 1500)

古墳時代以降

NR01 B区の北東から南西へ走る谷状の地形であり、人為的な掘削の痕はみられない。開谷の時期は明らかではないが、少なくとも古墳時代には落ち込みがあり、近代に至るまで谷地形を成していたと考えられる。長期間にわたる埋没・削平を受けているため、第34図の各層の時期の比定は難しいが、砂が多量に堆積している時期は近世～近代であり、黒色粘土以下が古墳時代以前となる。8層より64の甕61の急須が出土している。

SX02 A区において検出された高さ25～40cmの高まりで、南北方向に伸びる。時期は覆土からみて、近世～近代に属している。この様の高まりはA区でもレベルを違えて他に1面、D・E区でも検出されているが、いずれも不明瞭な形状しか成さなかった。遺構の性格は一概に言えないが、その形態や土層の堆積状況より、水田畦畔の可能性が考えられる。



1. 盛土 2. 現代溝 3. 暗青灰色粘質土 4. 暗灰色粘土 5. 明黄灰色粘質土 6. 灰褐色粘質土
7. 明黄灰色砂 8. 明黄灰色砂(黄色粘土混) 9. 灰褐色粘質土 10. 暗褐色粘土 11. 黄灰色粘質土
12. 明灰褐色粘質土 13. 暗灰色粘質土 14. 明褐色粘質土 15. 暗褐色粘質土 16. 灰色粗砂
17. 黒色粘土(灰色粘土混) 18. 黒色粘土 19. 暗灰色粘質土(黄色シルト混)

第34図 B区東壁土層図(1:100)

第9表 貴生町遺跡遺構一覧表

遺構番号		調査区遺構番号	規 模 (cm)			時 期・備 考
			長 径	短 径	深 さ	
S K						
	01	62A SK10・12	(160)	90	8～77	古墳時代
	02	62A SK06	210	200	4～9	古墳時代
	03	62A SK03	270	170	9～12	古墳時代
S E						
	01	62A SK01	205	200	158	古墳時代
S X						
	01	62A SX01	(100)	(70)	—	古墳時代
	02		(565)	505	高25～40	近世
N R						
	01	62B NR01	—	(750)	20～50	不明～近世

() は現況での長さ

3. 遺物

(1)土 器

縄文時代～弥生時代

包含層 1～4の土器は縄文時代後期前半の深鉢で、同一個体の可能性が高い。1と2は口縁で、端部が若干肥厚する。文様は沈線による渦巻文が施される。5・6は貝殻による条痕を縦羽状に施したもので、同一個体と思われる。

古墳時代

S K01 口縁端部をヨコナデにより丸く肥厚させたものが7で、8は同じくヨコナデにより外側に面取りされている。9はS字状口縁甕でD類に属する。口縁端部はわずかに肥厚し外側に面取りされている。10の甕下体部と脚は、脚端部の折り返しや脚外面のハケのナデ消しより、S字状口縁甕とみられ、9との接合の可能性が考えられる。15の高杯の杯部外面にはヘラによるケズリ痕が残されているが、17のそれはナデ消されている。16・18の高杯の脚は中空の筒状をなし、外面にユビナデがなされている。

S K02 19は口縁が外方に伸び上端部に面をもつS字状口縁甕でC類に属する。口縁部にハケ工具痕、頸部に沈線がみられる。20～22の各甕口縁部はヨコナデにより、各々有段化している。23の壺口縁は、端部がヨコナデにより丸く肥厚している。

S E01 26はやや外湾してハ字状に幅広く開く高杯脚で、外面はユビナデで調整される。

S E01 31は逆ハ字状に開く小形の杯で、内面にハケ調整、外面の調整は不明である。32はS字状口縁甕の脚部かと思われる。

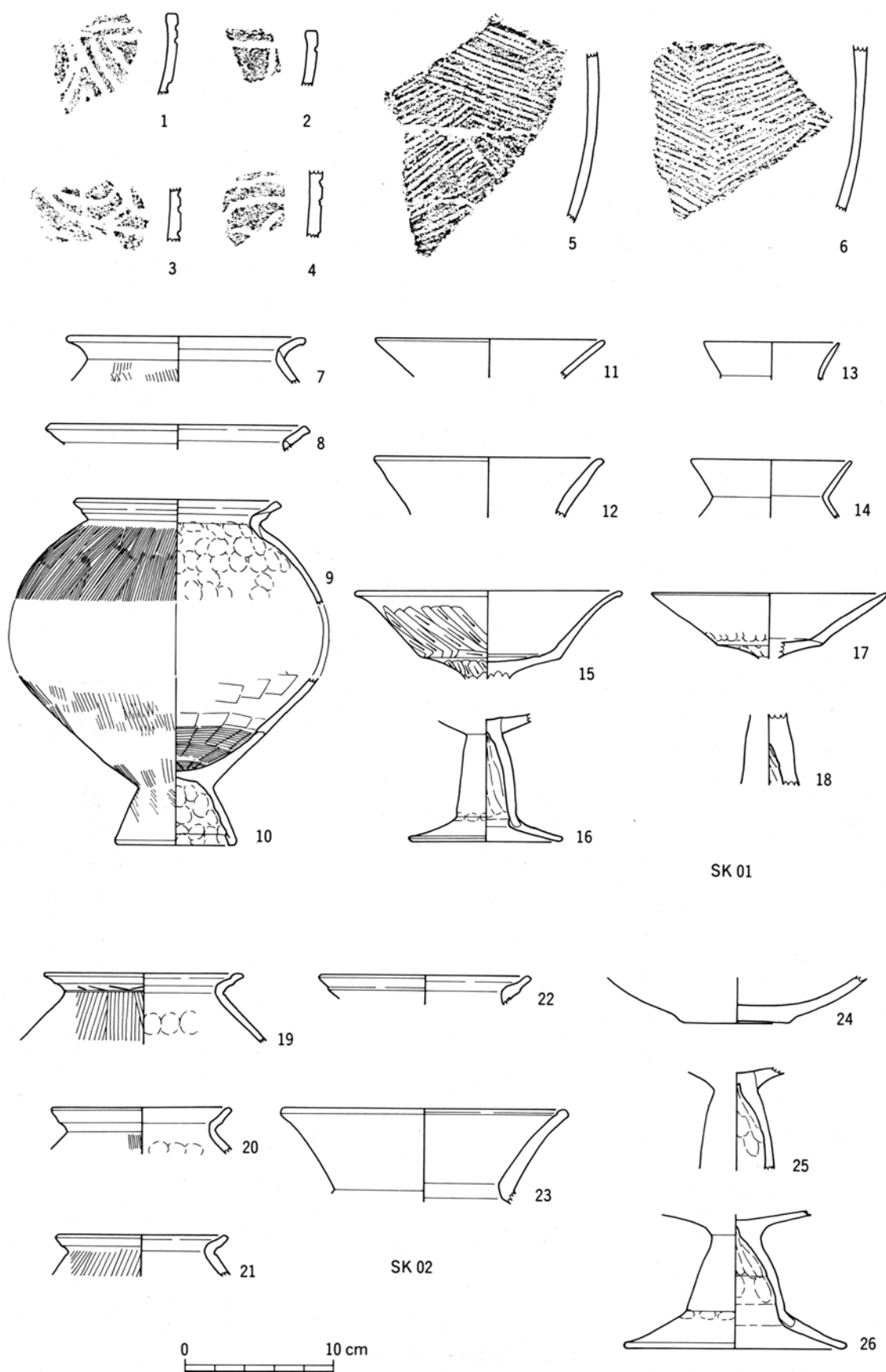
S K03 36は外面にヘラミガキを施した高杯の脚である。37は小形壺で外面にやや不整のヘラミガキを施している。38・39は小形壺の底部で、38は外面に荒いハケ、39はヘラ及びユビによる整形のみで仕上げられている粗雑なものである。

包含層 40はS字状口縁甕のB類にあたり、41～43はD類に属する。44の甕の脚は、内面の上部に雲母を含む砂粒の多い粘土が貼付されており、S字状口縁甕のものと思われる。48の壺の有段口縁の外内面には、クシ刺突による横羽状の施文がなされている。49～51はユビ押圧のみで作られた小形壺及び杯である。53・54は高杯の杯部となる。60は須恵器で、小形の長頸壺か提瓶の口縁になるものと思われる。

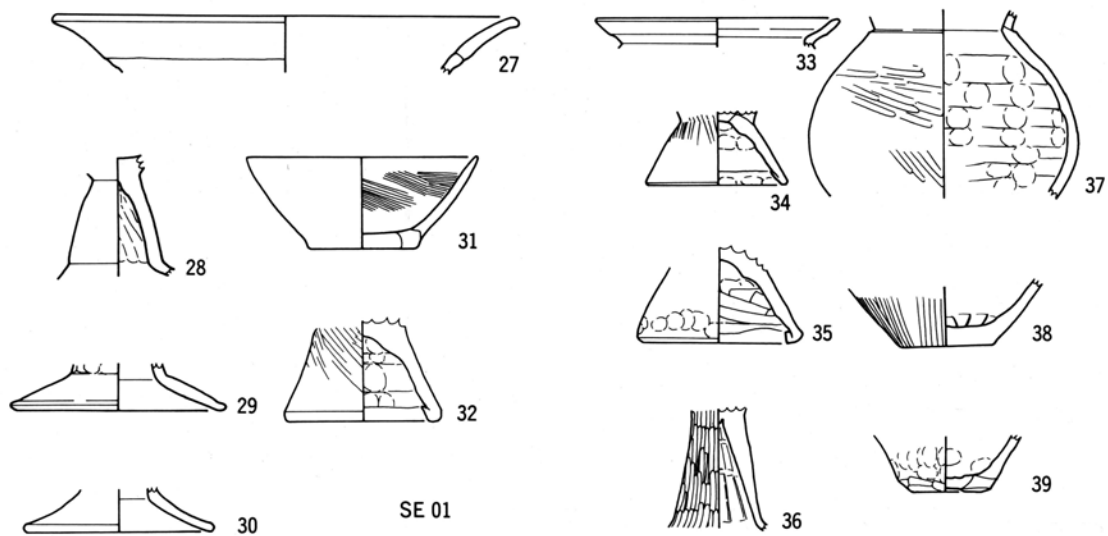
古墳時代以降

NR01 東肩に集中して出土した。出土状態から一括投棄とみられる。61は陶器の急須である。体部外面に鉄釉がかかる。64は常滑の甕で口縁がY字形になる。中野氏の編年によると18世紀のものとなる。^(注)

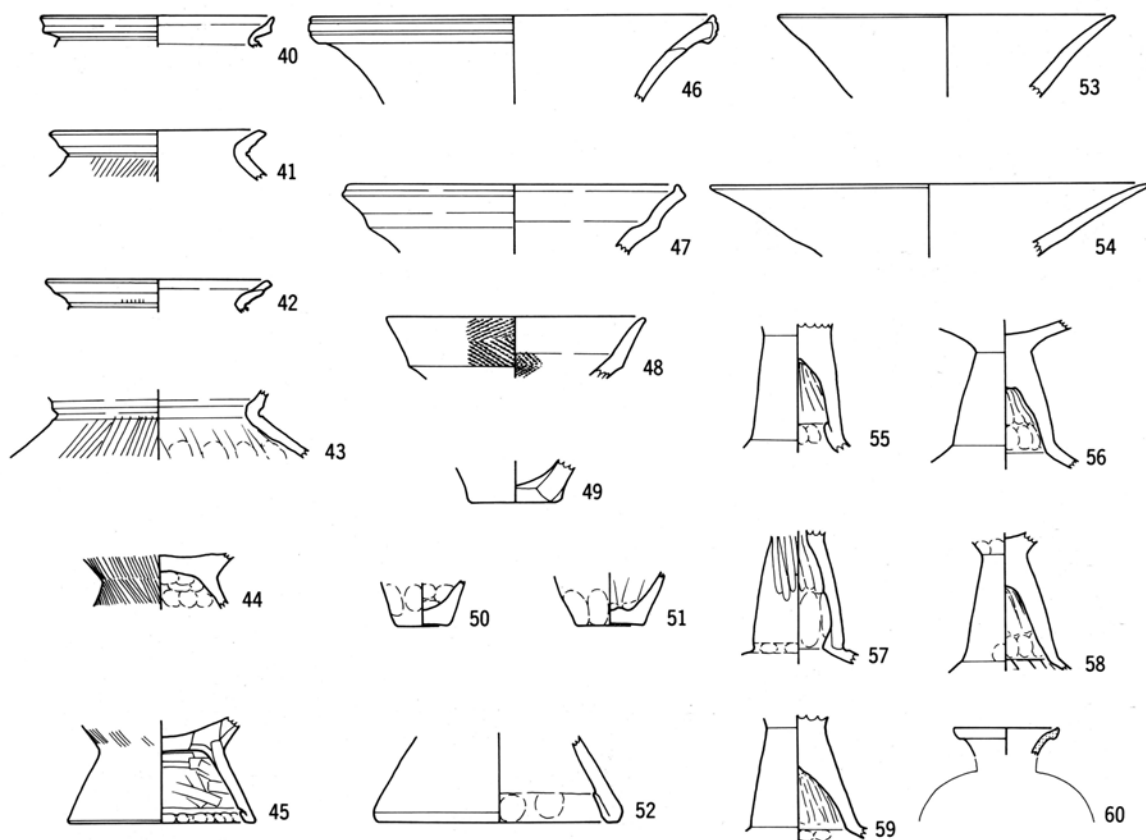
包含層 包含層からは15～19世紀の陶磁器、土器が出土した。62、67、68は天目茶碗で内外面に鉄釉がかかる。共に大窯製品。63は灰釉丸碗。窖窯または大窯初期のものと考えられる。66は磁器の小碗。66は所謂、山茶碗と呼称される無釉陶器。胎土に砂粒が多量に混入する南部系と



第35図 貴生町遺跡出土土器(1)

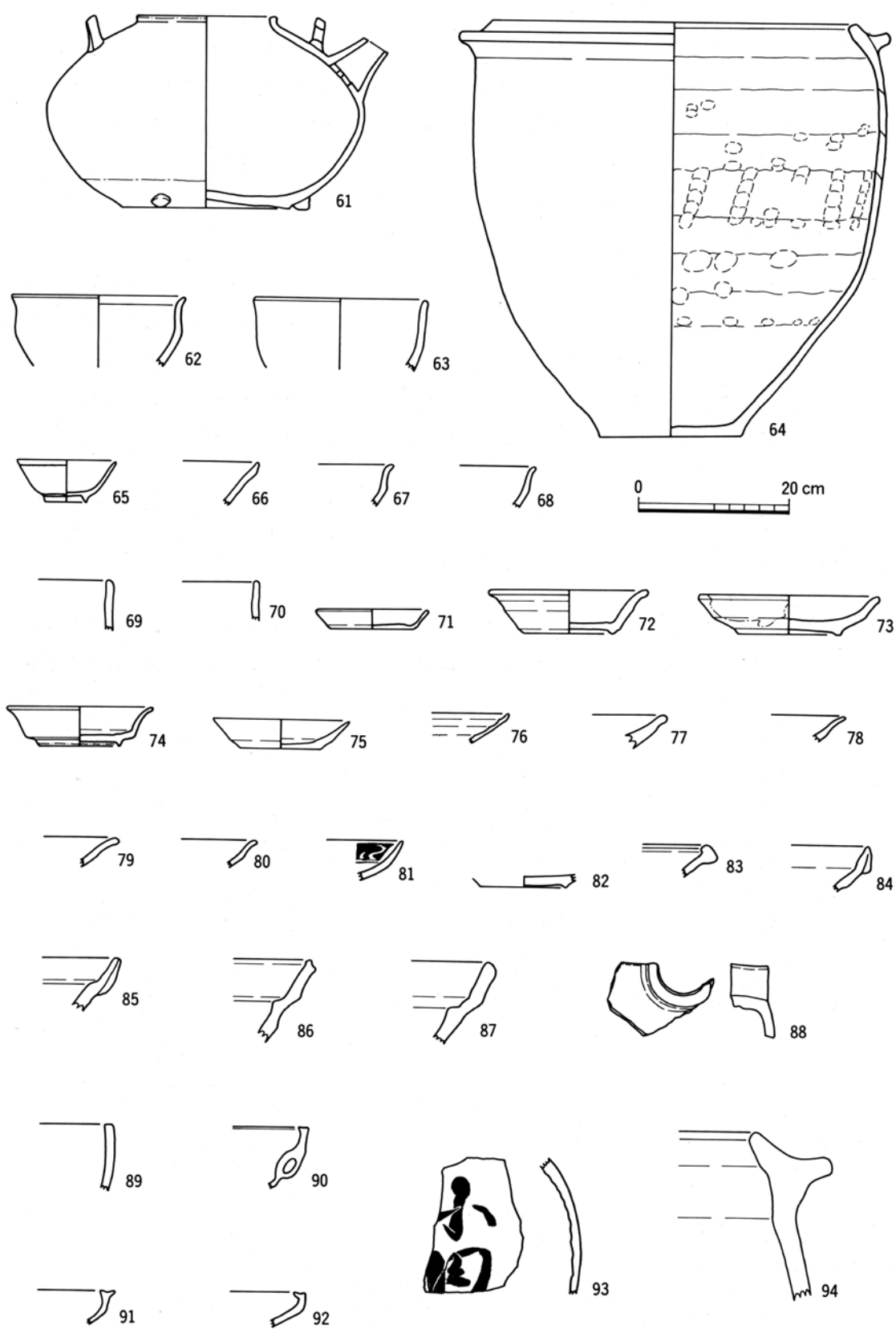


SK 03



0 10 cm

第36図 貴生町遺跡出土土器(2)



第37図 貴生町遺跡出土土器(3)

(64は S=1/8)

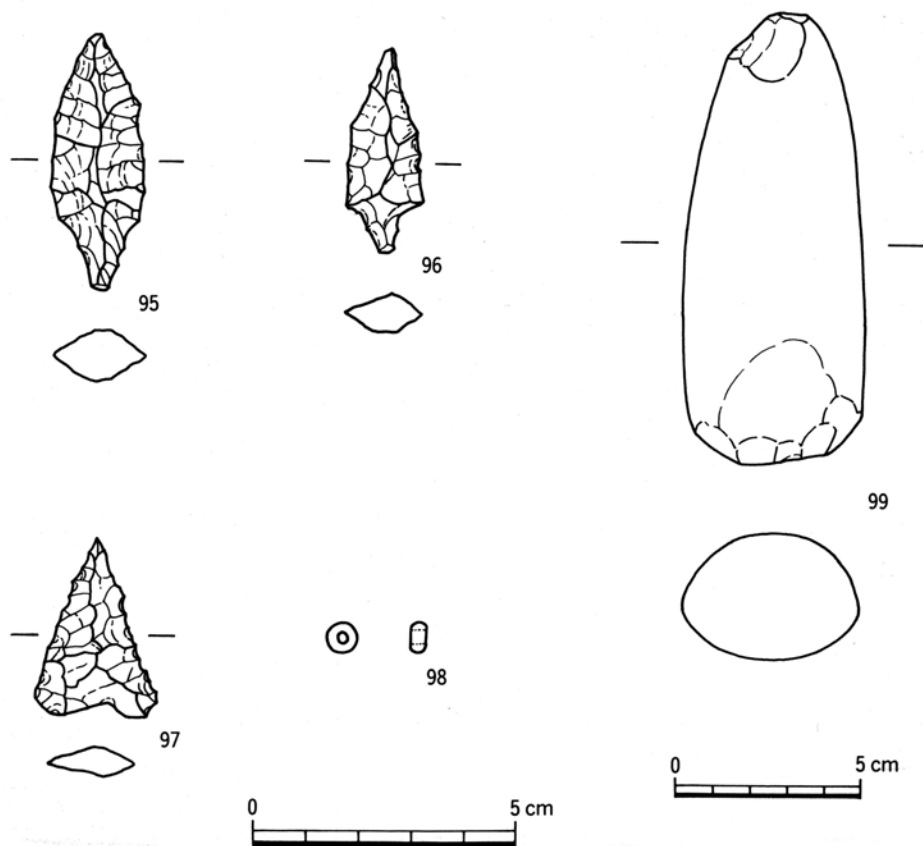
呼ばれるもの。69は長石釉、70は鉄釉の筒茶碗。共に大窯製品と考える。71、76は無釉陶器の皿。71は緻密な胎土で北部系と呼ばれるもの。76は内面に同心円状の圈線がみられる。72は灰釉の稜皿。見込みの部分は無釉である。底面に輪トチの跡が残る。73、77は長石釉の皿。72、73、77は共に大窯製品。74、81は磁器の皿。81の内面には呉須で草花文らしきものが描かれる。75は土器の皿。胎土は粗く赤褐色を呈する。78は鉄釉の皿。82は灰釉の皿で底面に輪トチの跡がある。共に大窯製品。79、80は灰釉の皿で連房製品と思われる。83～87は播鉢。84は大窯、他のものは連房製品と考える。88は灰釉の片口鉢の口縁である。窖窯製品と思われる。89は羽釜の口縁で外面に透明釉がかかる。90～92は土製の鍋。内面に吊手が2ないしは3つく。形状から90は深くなるタイプ、91、92は浅い焙烙鍋タイプになると考えられる。93は陶器の徳利。胴部に呉須で「小田」と書かれる。周辺の地名が小田井であることから当地の地名が記入されていると思われる。94は常滑の甕。64と同じタイプ。

註

中野晴久 「近世常滑焼における甕の編年的研究ノート」 『常滑市民俗資料館 研究紀要Ⅱ』 1986

(2) 石 器

包含層 95、96は有茎鎌、97は三角鎌である。材質は95はチャート、96は石英安山岩、97はガラス質安山岩である。98は菅玉、材質は滑石。99は磨製石斧で、依存状態が悪く外面のほとんどが磨滅している。刃部と基部に敲打痕が残る。材質はホルンフェルス。



第38図 貴生町遺跡出土石器

4. まとめ

遺構 A区SE01は、掘削が砂層（湧水層）にまで達していることやその形態からみて、井戸としてよいであろう。このことは、古墳時代の居住域が近接して存在する可能性が高いことを示しており、その推定地は現在でも微高地となっている調査区北西側に考えられる。また東側は、北東から南西に走る谷（NR01）を挟んで湿地状を呈していたかと思われる。

近世以降も基本地形はそのまま、B区等で畦畔状の高まりがあることからみて、水田として利用されていたと考えられる。またNR01は、名古屋市教委調査の流路2に繋がる可能性がある。

縄文土器 縄文土器は小片であるため確定的なことは言えないが、縄文時代後期前葉の堀之内Ⅰ式・北白川上層式1期併行、当地域の林ノ峰Ⅲ～Ⅳ式に相当する。この時期には、西にある朝日遺跡でもドングリピットが検出されており、今後沖積地における当該期の遺跡の展開について検討を加えねばならない。

古墳時代土器 確実に欠山期に上るものは無く、ほとんどのものが元屋敷期の中でおさまる。S字状口縁甕をみると、主流はD類で、SK01はその良好な一括資料となる。時期は、元屋敷後葉のH-111及びTK73～216併行期となる。SK02は、元屋敷中葉にはいる可能性がある。

参考文献

愛知県教育委員会『環状2号線関係 朝日遺跡群発掘調査中間概報6』1979
赤塚次郎「S字甕覚書'85」『年報 昭和60年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター 1986
赤塚次郎「東海」『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』埋蔵文化財研究会 1989

泉拓良「近畿地方の土器」『縄文文化の研究』雄山閣 1981
名古屋市教育委員会『貴生町遺跡 第1次・第2次発掘調査概要報告書』1988
山下勝年『林ノ峰貝塚Ⅰ』1983

第10表 貴生町遺跡遺物一覧表

番号	出土地点	登録番号	番号	出土地点	登録番号	番号	出土地点	登録番号
1	62D 検出	62D-E-6	34	62A SK03	62A-E-18	67	62A 検出	62A-E-68
2	" "	62D-E-9	35	" "	62A-E-1	68	62D "	62D-E-17
3	" "	62D-E-7	36	" "	62A-E-6	69	62A "	62A-E-56
4	" "	62D-E-8	37	" "	62A-E-17	70	" "	62A-E-61
5	" 検出	62D-E-2	38	" "	62A-E-13	71	62D "	62D-E-18
6	" "	62D-E-3	39	" "	62A-E-14	72	" "	62D-E-16
7	62A SK01	62A-E-28	40	62D 検出	62D-E-1	73	62B "	62B-E-10
8	" "	62A-E-38	41	62A "	62A-E-39	74	" "	62B-E-2
9	" "	62A-E-22	42	" "	62A-E-54	75	62D "	62D-E-13
10	" "	62A-E-16	43	" "	62A-E-37	76	62A "	62A-E-60
11	" "	62A-E-27	44	" "	62A-E-41	77	" "	62A-E-58
12	" "	62A-E-24	45	" "	62A-E-15	78	" "	62A-E-67
13	" "	62A-E-32	46	" "	62A-E-53	79	62D "	62D-E-14
14	" "	62A-E-33	47	" "	62A-E-21	80	" "	62D-E-19
15	" "	62A-E-9	48	" "	62A-E-40	81	62A "	62A-E-63
16	" "	62A-E-4	49	62D "	62D-E-4	82	62D "	62D-E-10
17	" "	62A-E-10	50	62A "	62A-E-45	83	62B "	62B-E-6
18	" "	62A-E-10	51	" "	62A-E-55	84	62D "	62D-E-12
19	" SK02	62A-E-25	52	" "	62A-E-51	85	" "	62D-E-15
20	" "	62A-E-36	53	" "	62A-E-47	86	62B "	62B-E-3
21	" "	62A-E-26	54	" "	62A-E-29	87	62A "	62A-E-59
22	" "	62A-E-31	55	" "	62A-E-42	88	62B "	62B-E-5
23	" "	62A-E-19	56	" "	62A-E-50	89	" "	62B-E-9
24	" SX01	62A-E-30	57	62D "	62D-E-5	90	62A "	62A-E-65
25	" "	62A-E-8	58	62A "	62A-E-52	91	62D "	62D-E-11
26	" "	62A-E-3	59	" "	62A-E-43	92	62A "	62A-E-62
27	" SE01	62A-E-20	60	62D "	62D-E-5	93	62B "	62B-E-8
28	" "	62A-E-5	61	62B NR01	62B-E-1	94	" "	62B-E-7
29	" "	62A-E-11	62	62A 検出	62A-E-64	95	62A "	62A-E-2
30	" "	62A-E-12	63	" "	62A-E-57	96	62C "	62C-E-1
31	" "	62A-E-23	64	62B NR01	62B-E-11	97	62D "	62D-E-1
32	" "	62A-E-2	65	" 検出	62B-E-4	98	62A "	62A-E-1
33	" "	62A-E-35	66	62A "	62A-E-66	99	62B "	62B-E-1

図
版

月 縄 手 遺 跡

図版 1

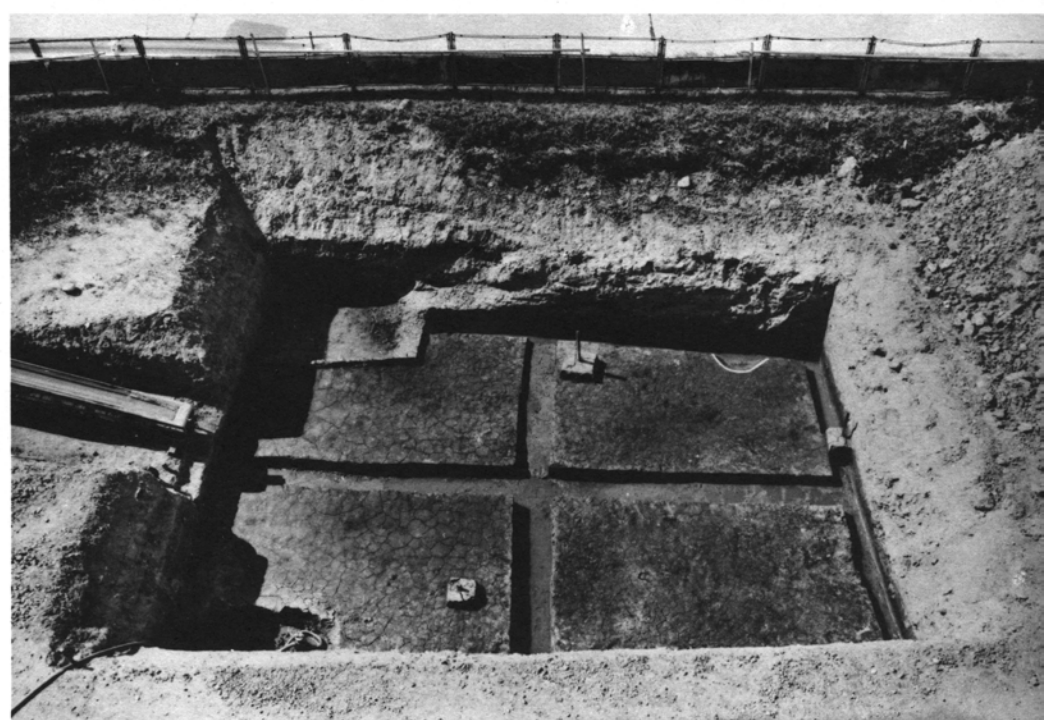
A区
(西より)



B区調査前
(西より)



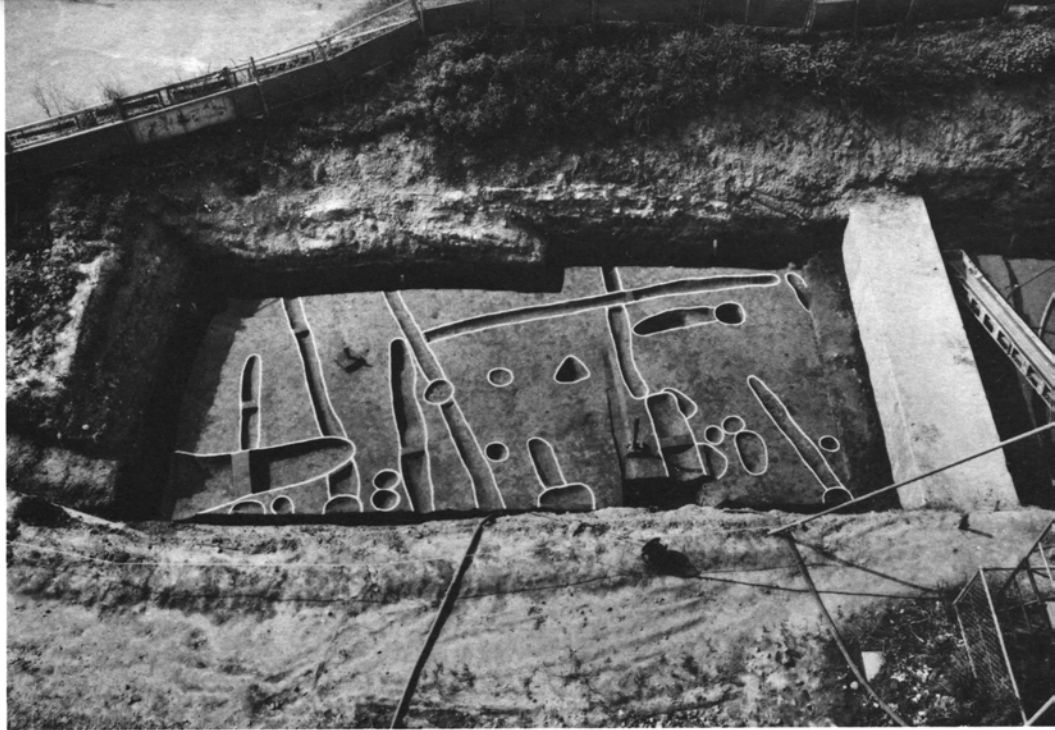
C区全景
(南より)



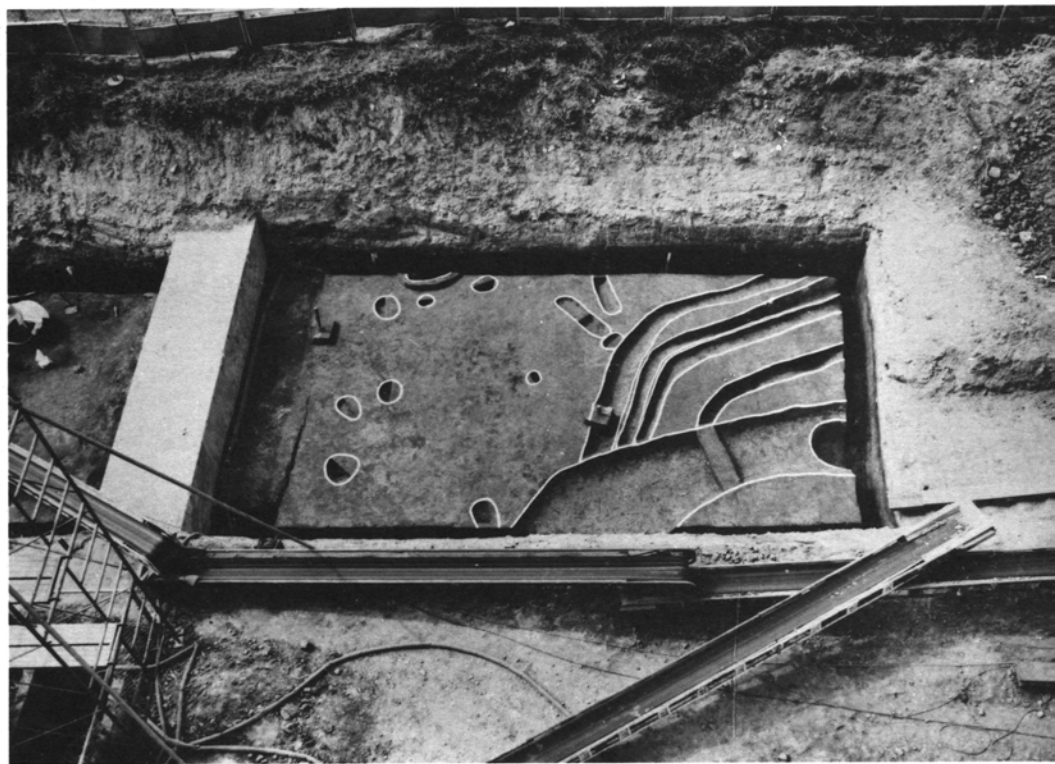
月 縄 手 遺 跡

図版 2

B区西側
上層検出状況
(南より)



B区東側
上層検出状況
(南より)



B区
下層検出状況
(南西より)



月 縄 手 遺 跡

図版 3

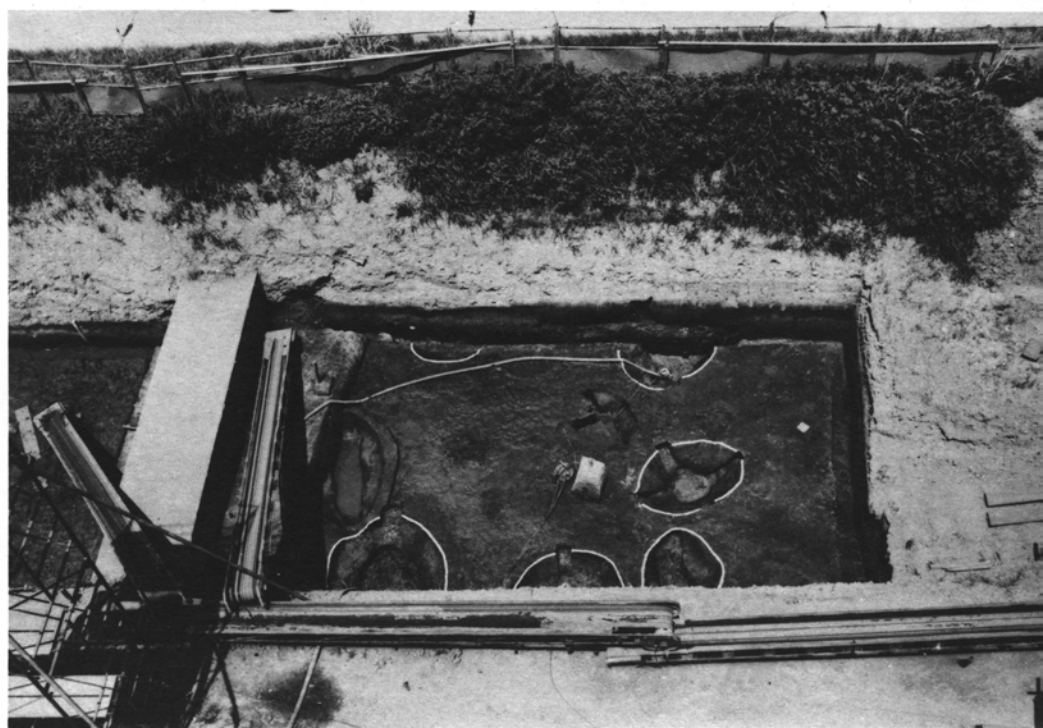
B区西側
下層検出状況
(南より)



B区東側
下層検出状況
(南より)



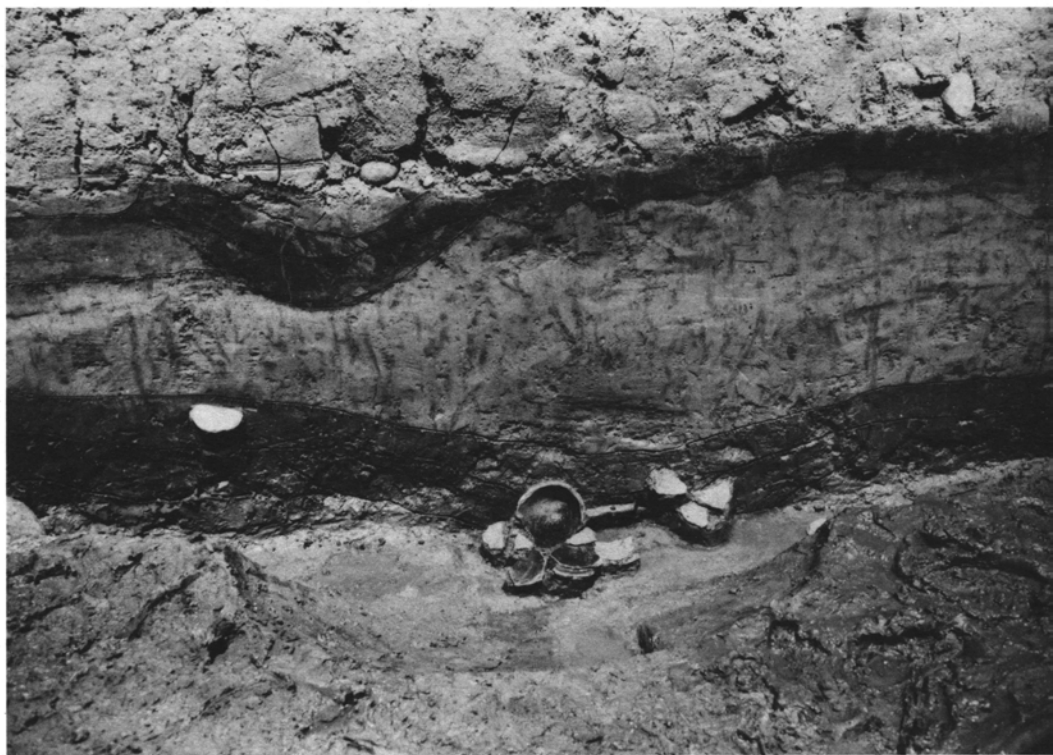
B区東側
下層遺構
(南より)



B区
SK17
(南東より)



B区
SK18
(南より)



B区
SK20
(南より)



B区
SK22
(北より)



B区
SK24
(南より)



B区東側
調査風景
(東より)



B区
SX01
(南より)



B区
SX01遺物
出土状況
(南東より)



B区
SX01
(北西より)



B区東側
南壁
(北より)

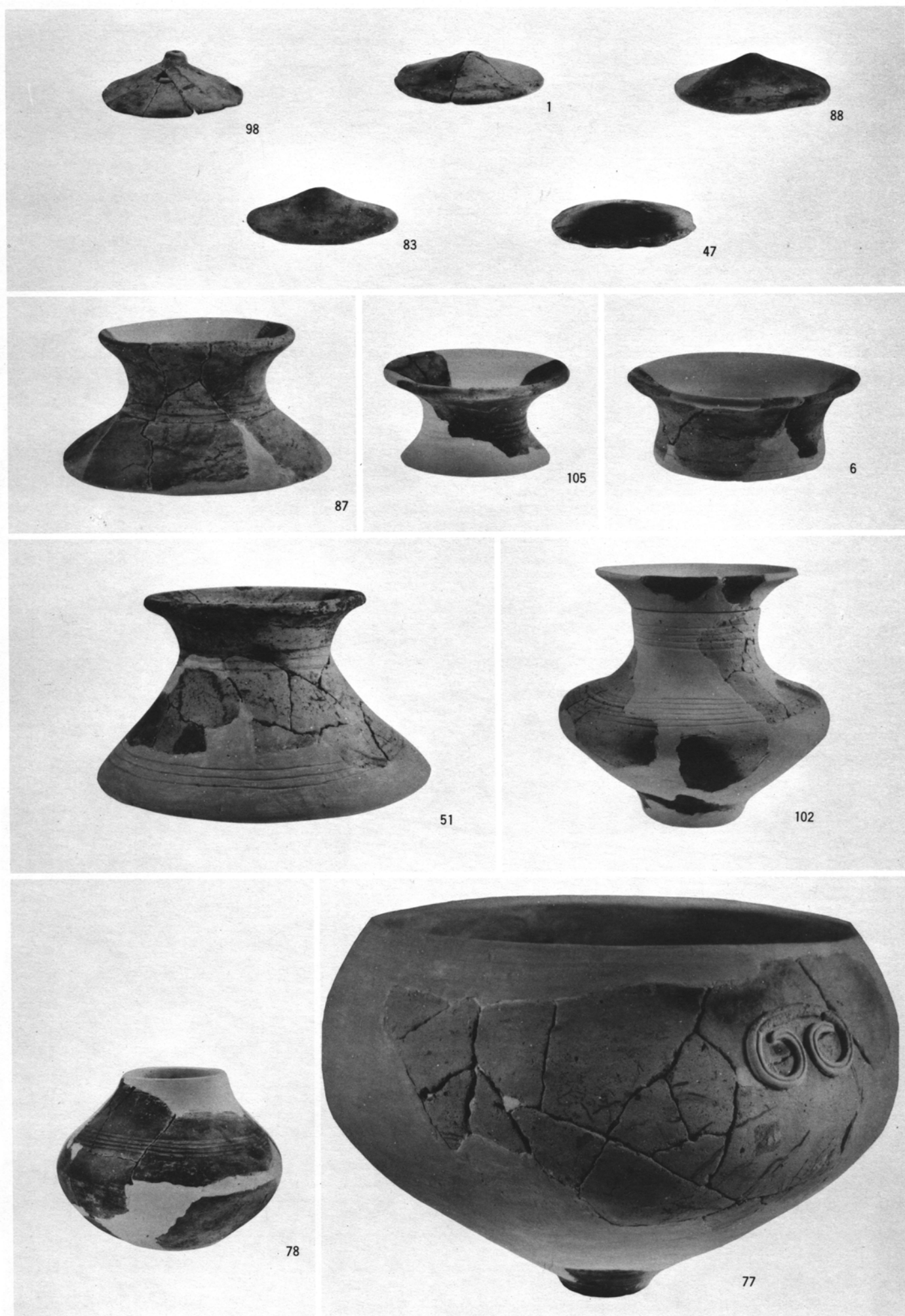


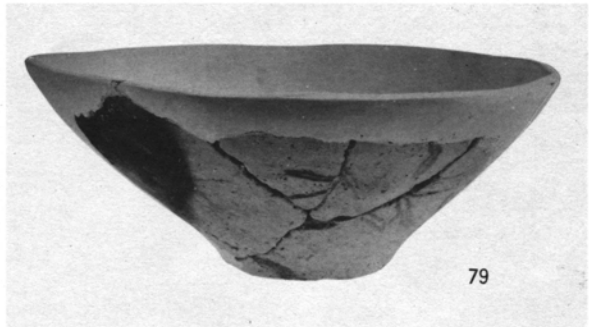
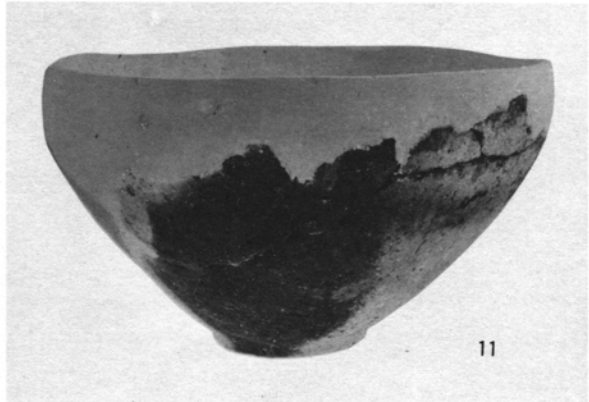
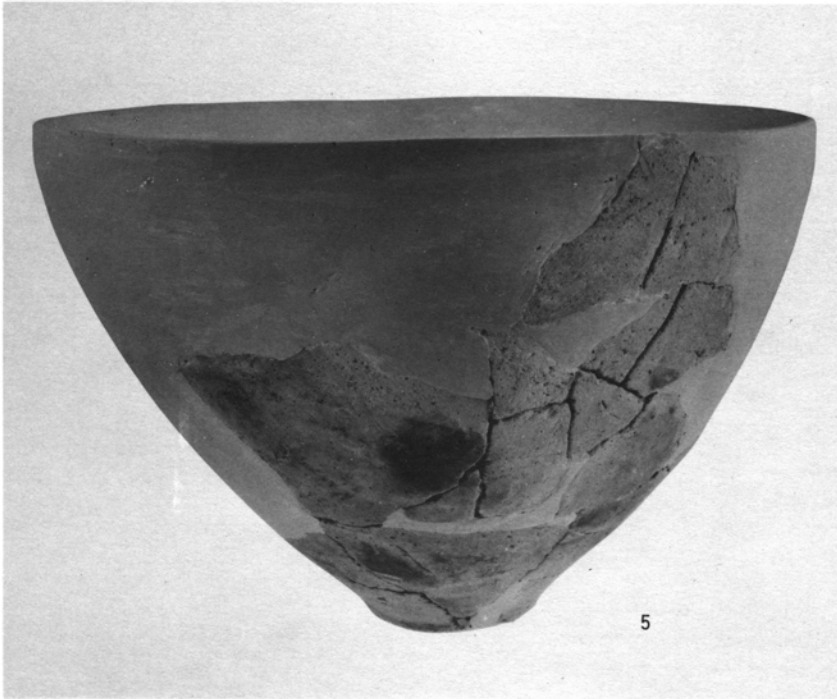
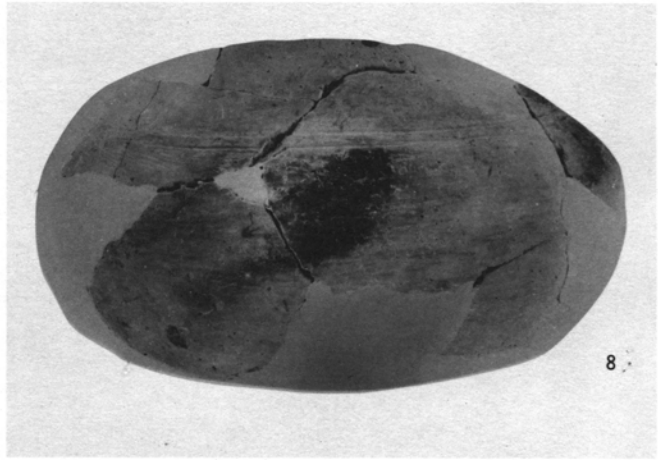
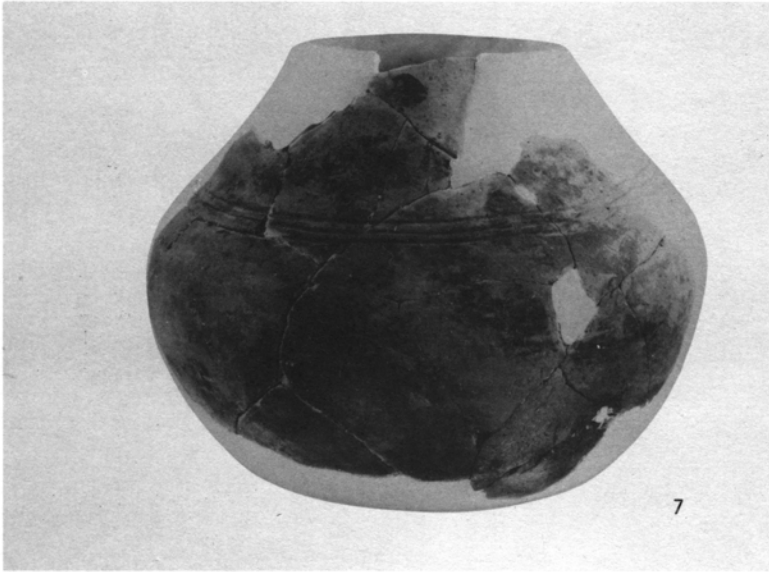
B区西側
南壁
(北より)

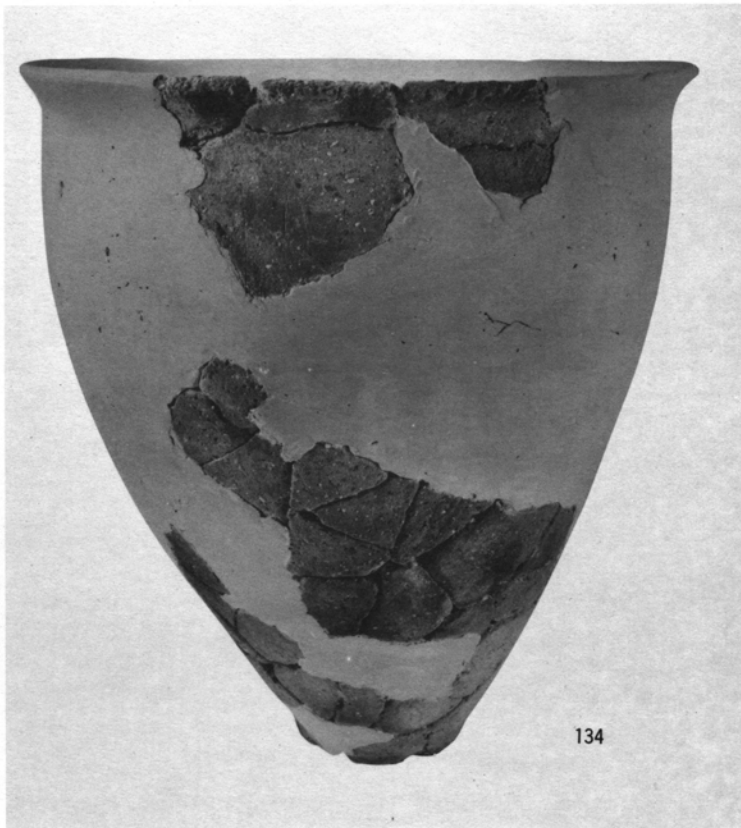
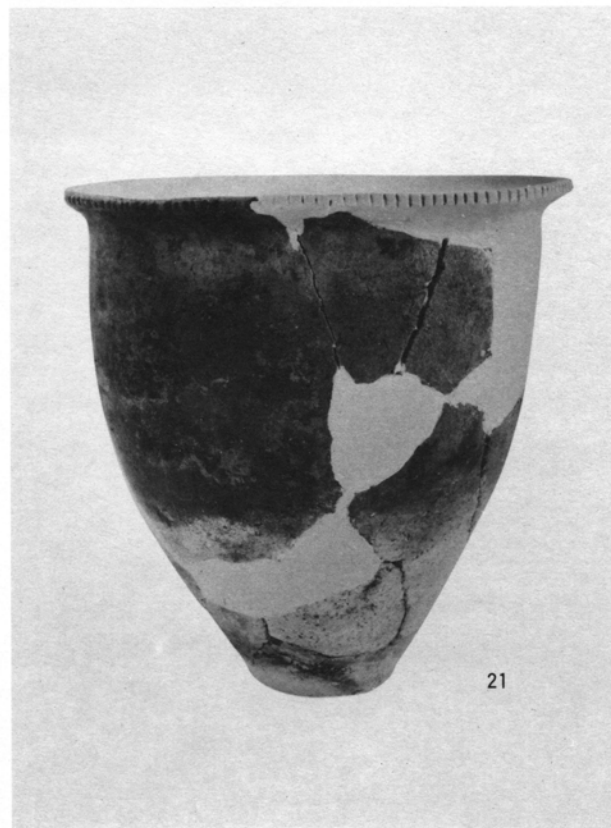
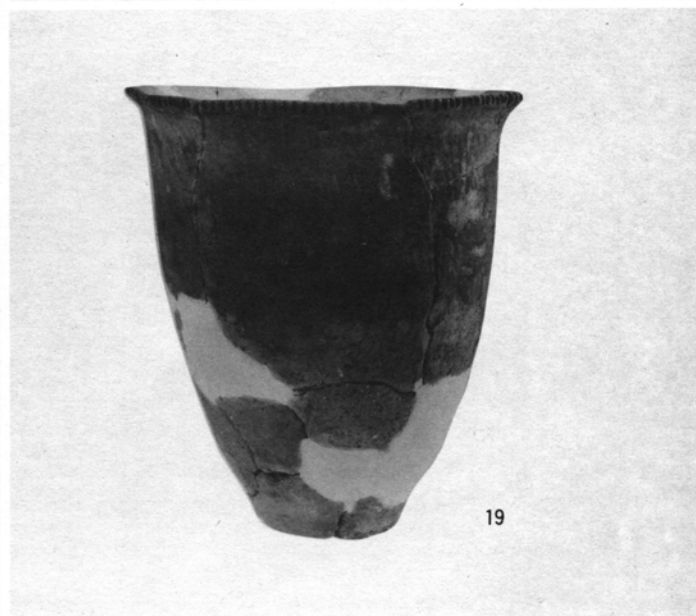
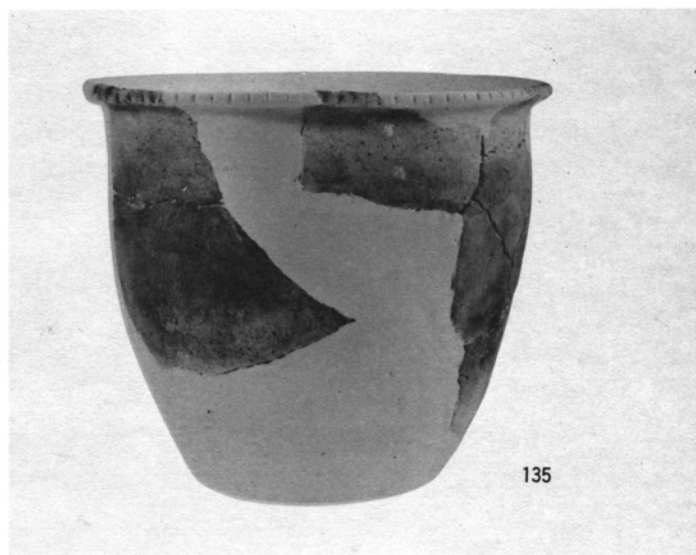
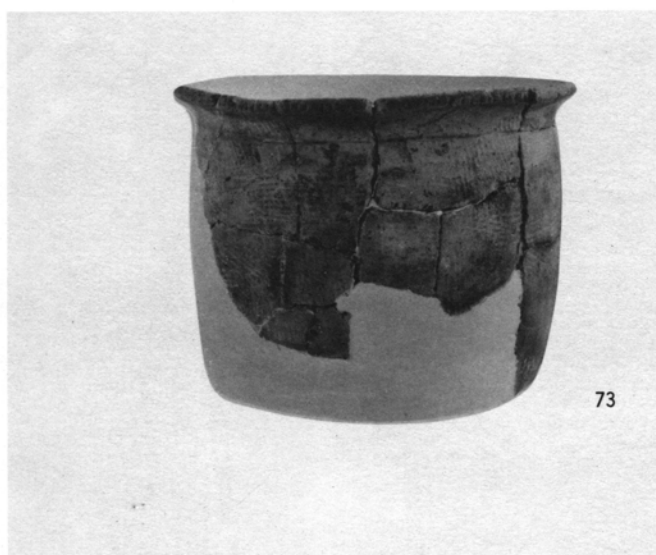


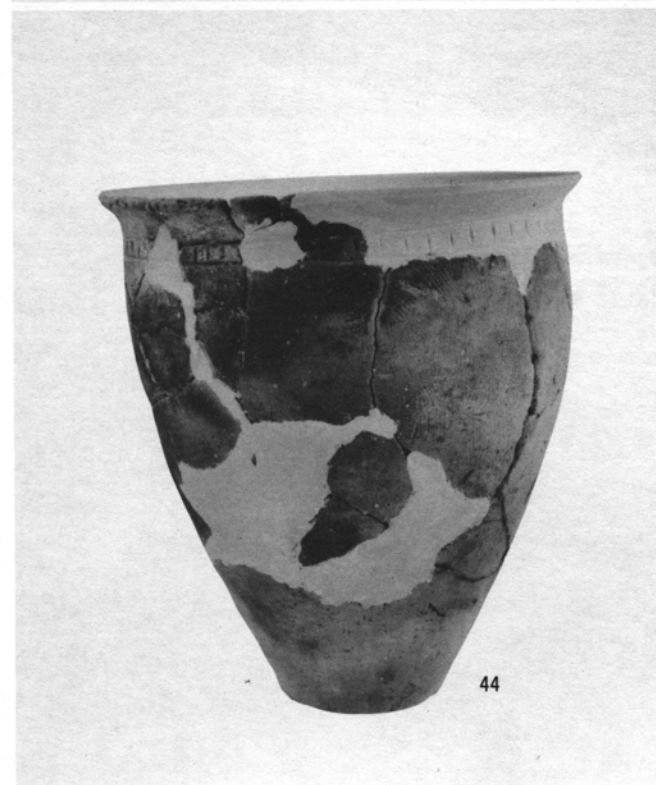
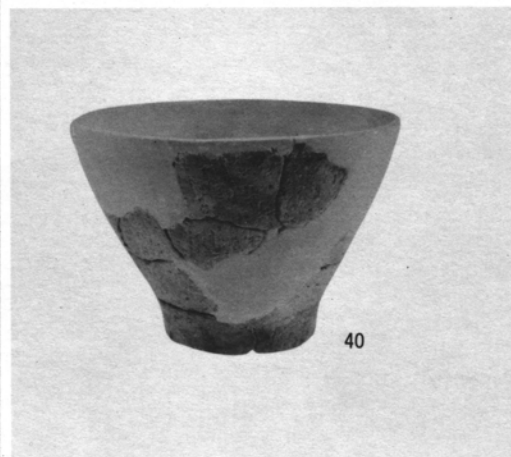
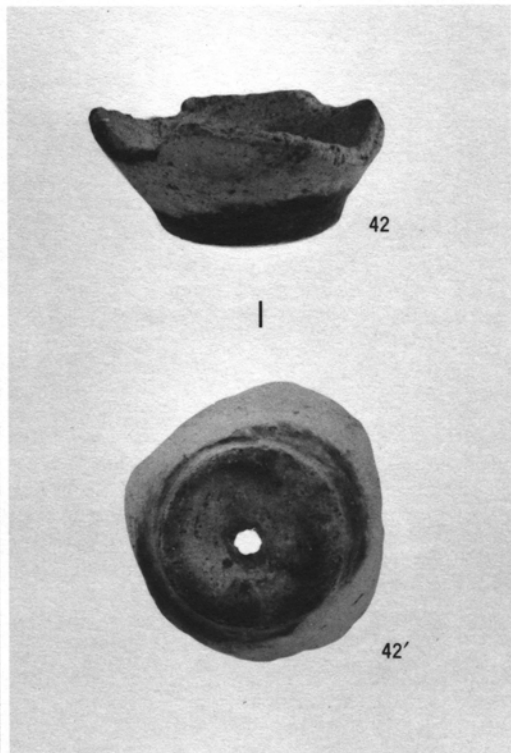
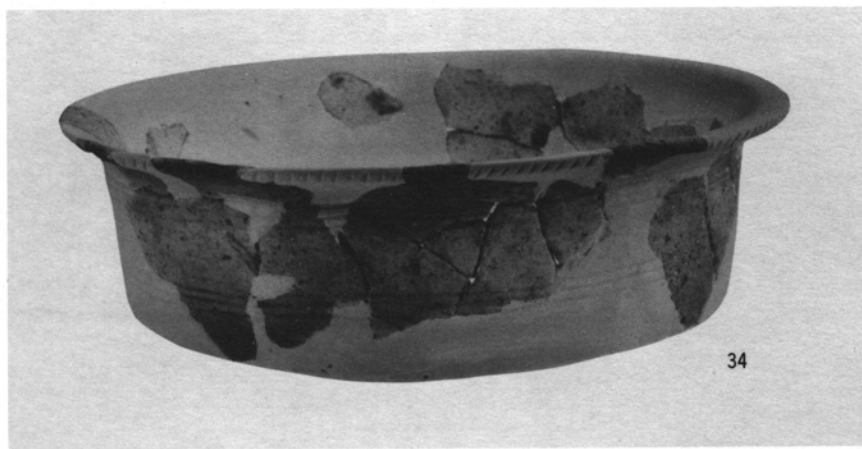
B区西側
調査風景
(西より)

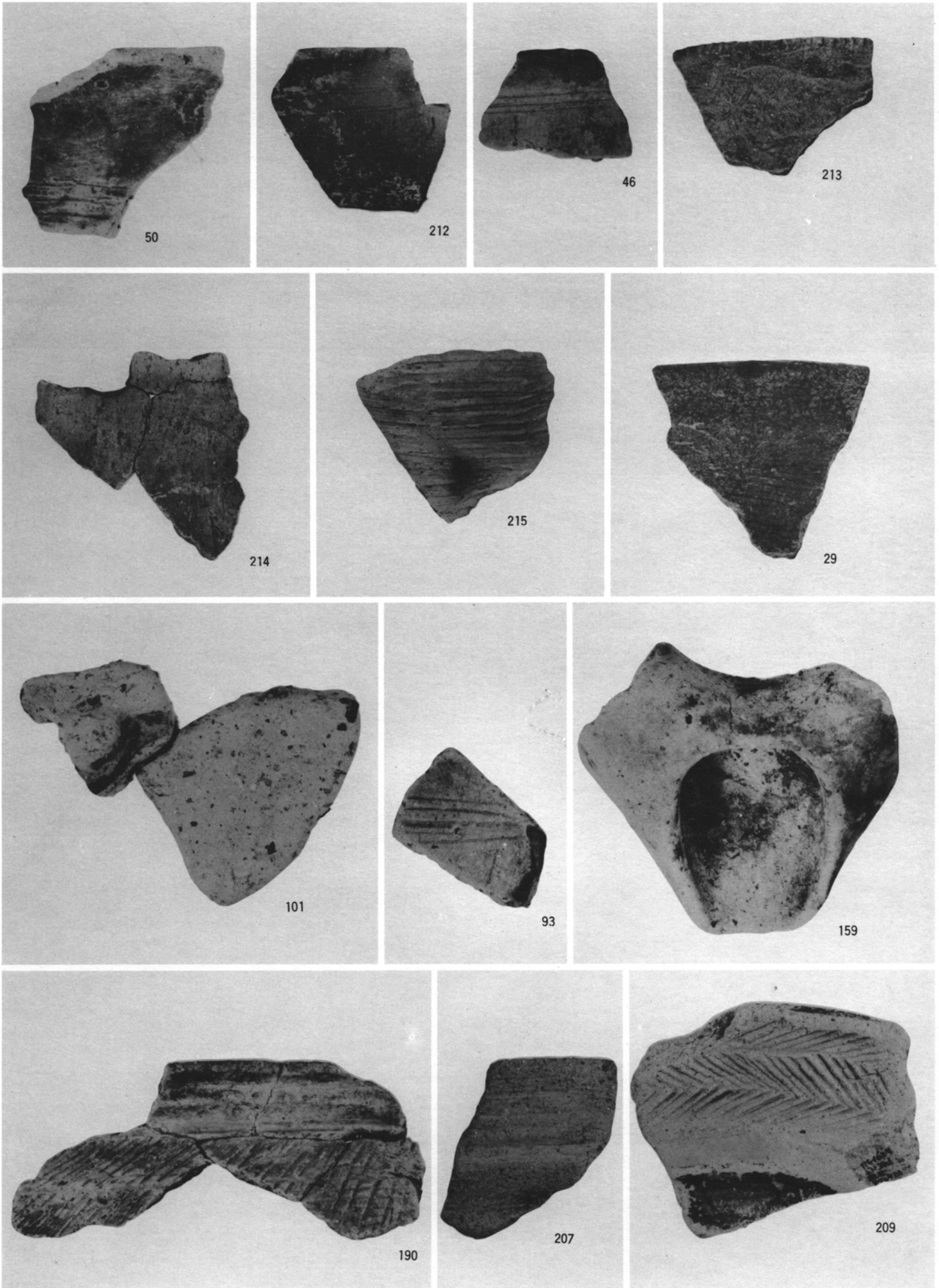












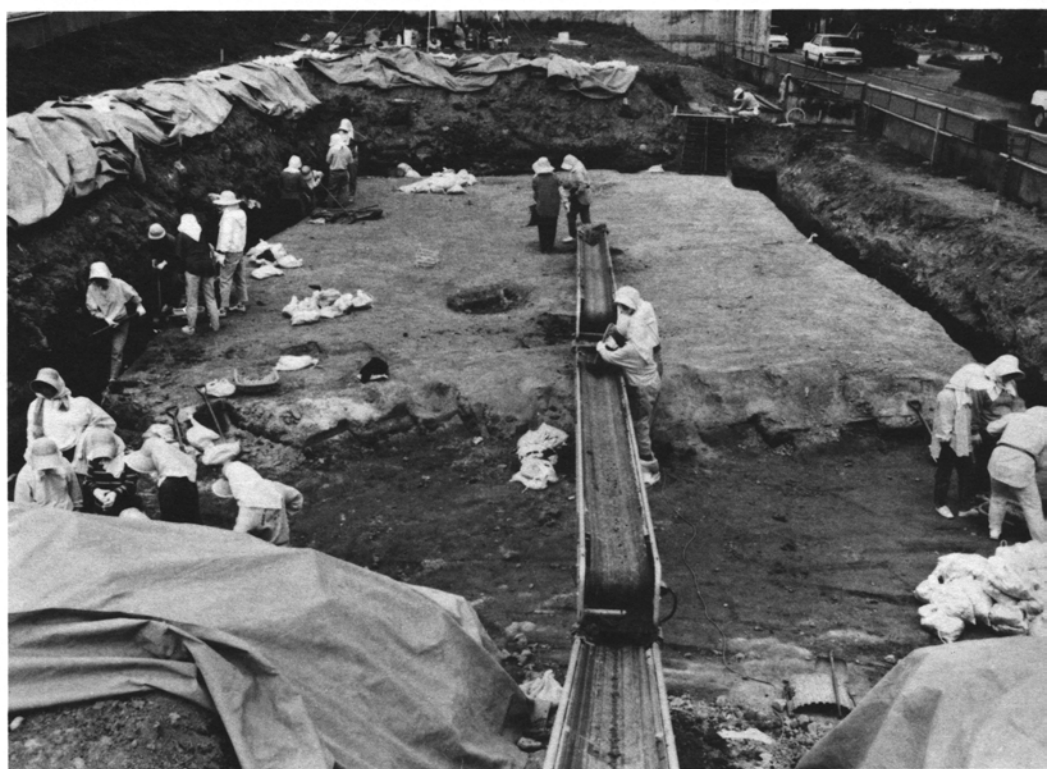
貴生町遺跡

図版13

調査前風景
(A区北西より)



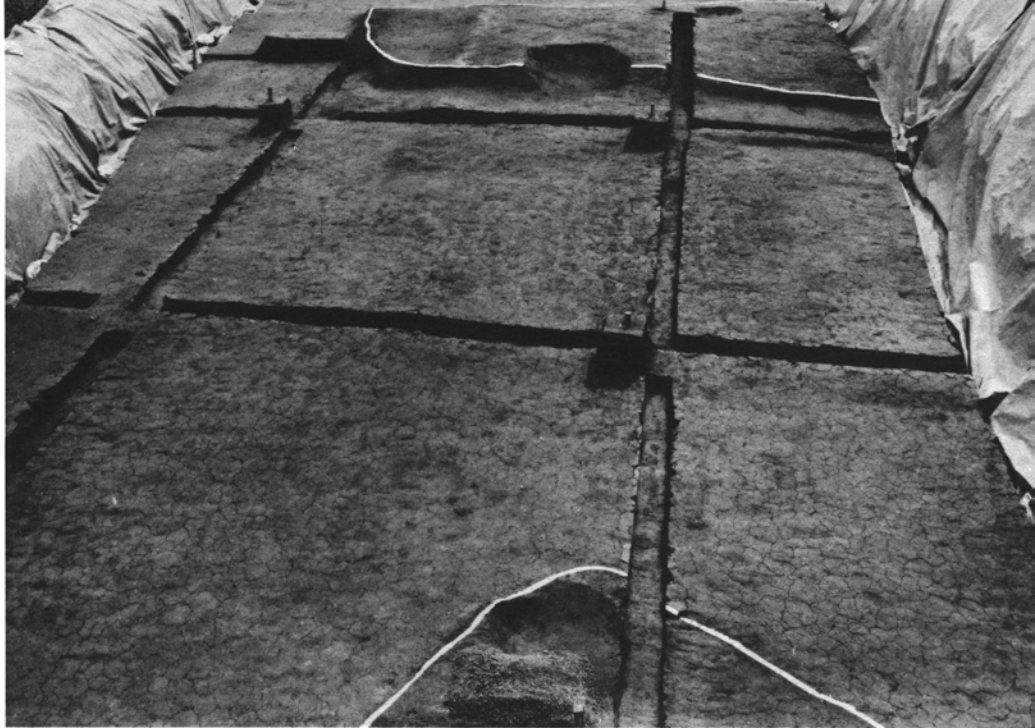
A区調査風景
(西より)



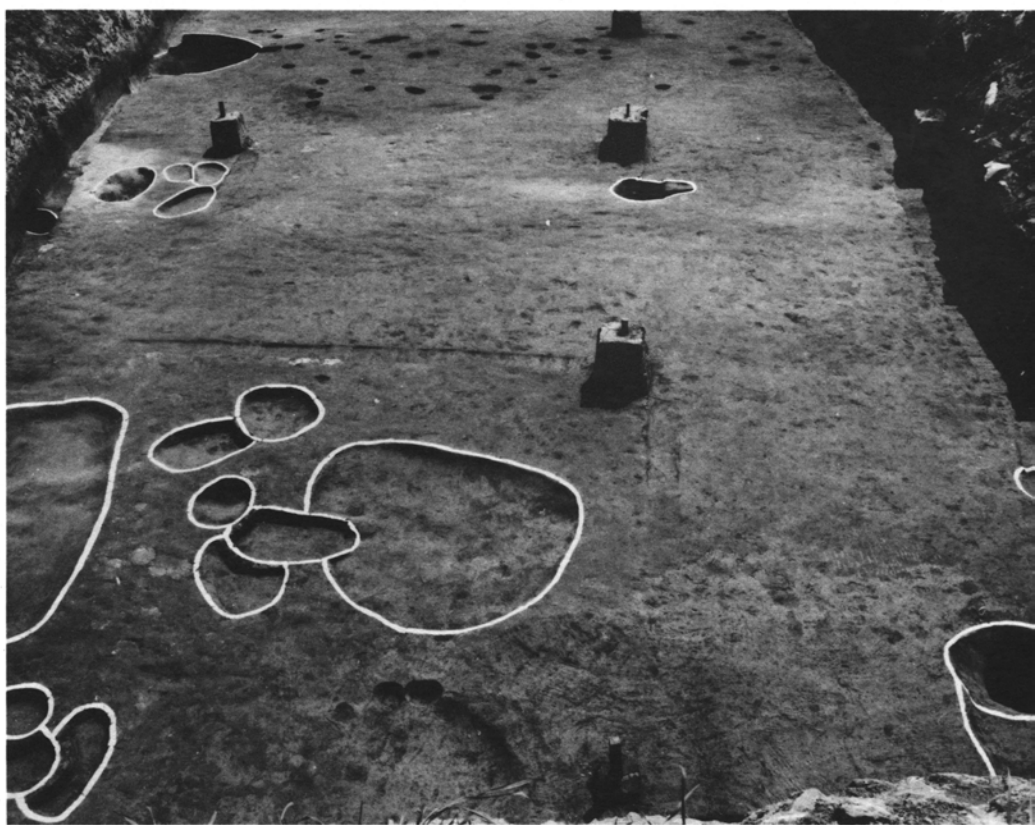
B区調査風景
(南西より)



A区上層検出状況
(西より)



A区下層検出状況
(西より)



SE01
(東より)



SX01
(東より)



SK02
(東より)



SK01
(北より)



B区全景
(北より)



B区全景
(南西より)



NR01上層
土器(64)出土状態
(東より)



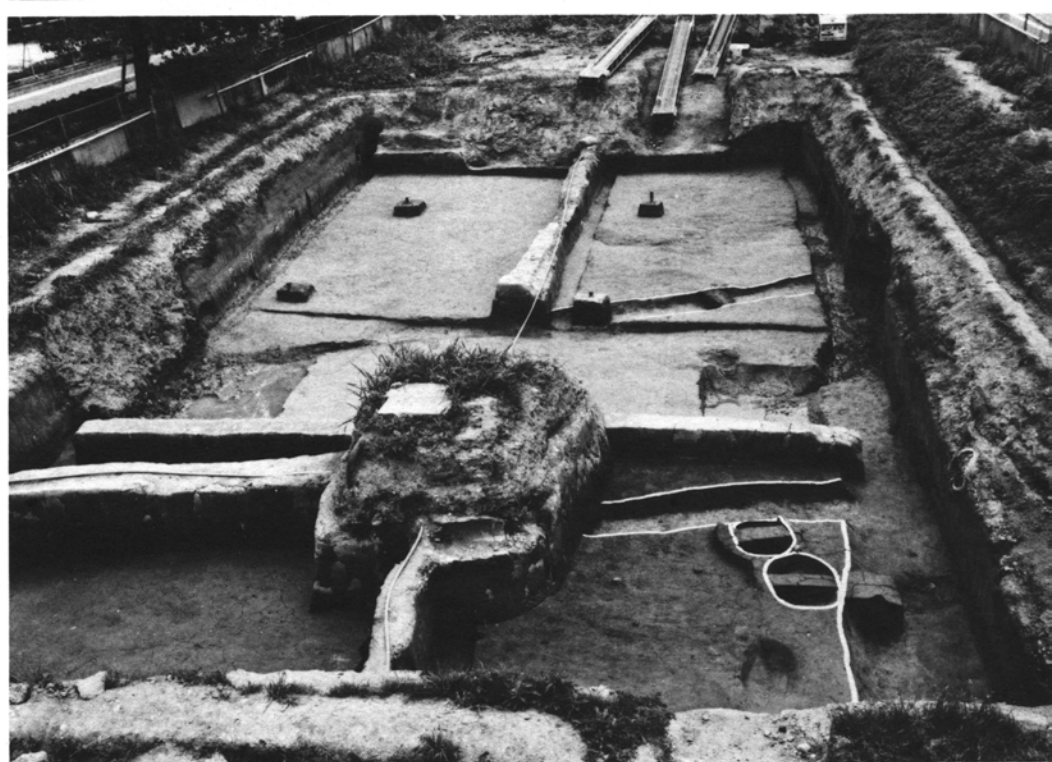
貴生町遺跡

図版17

C区全景
(北より)

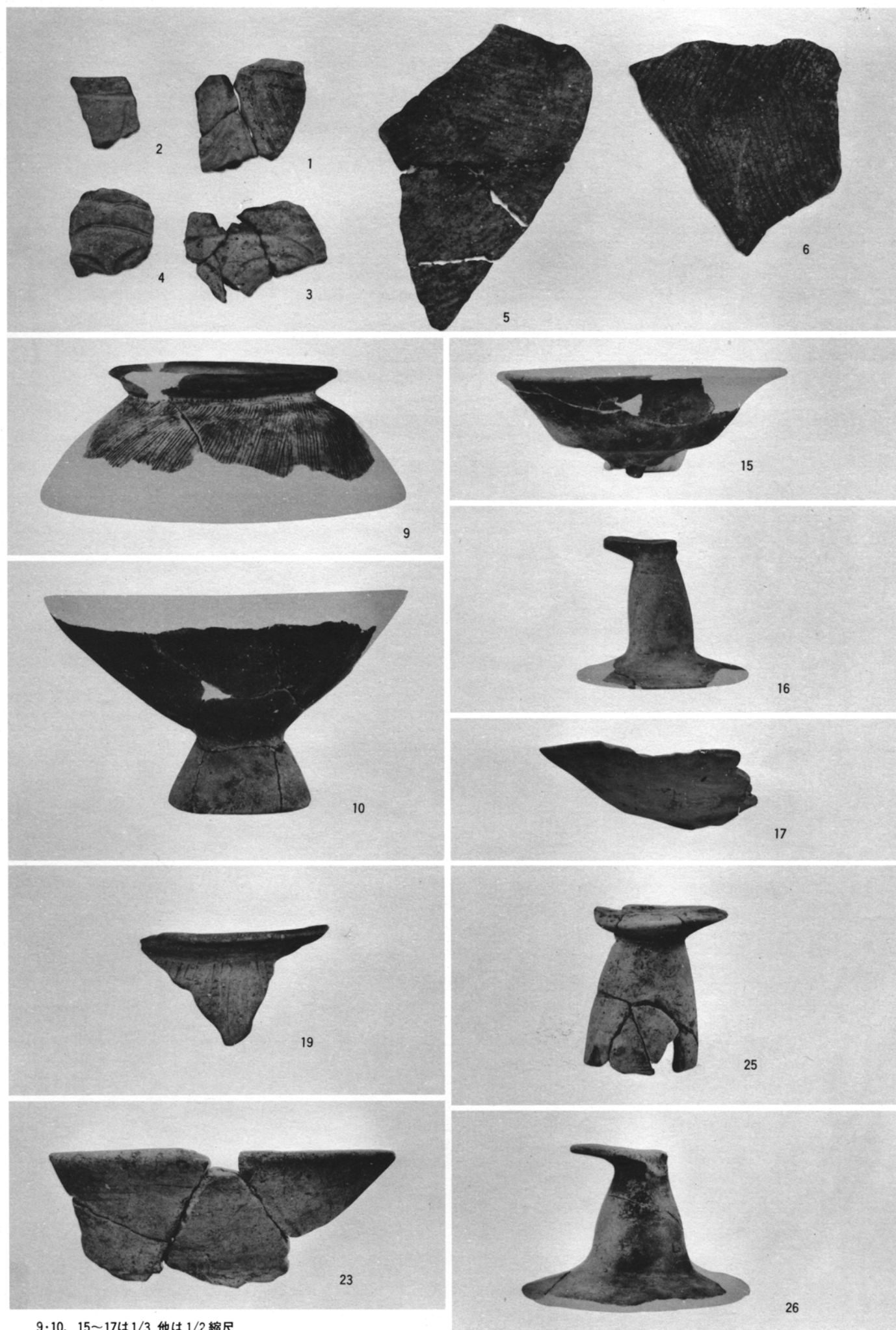


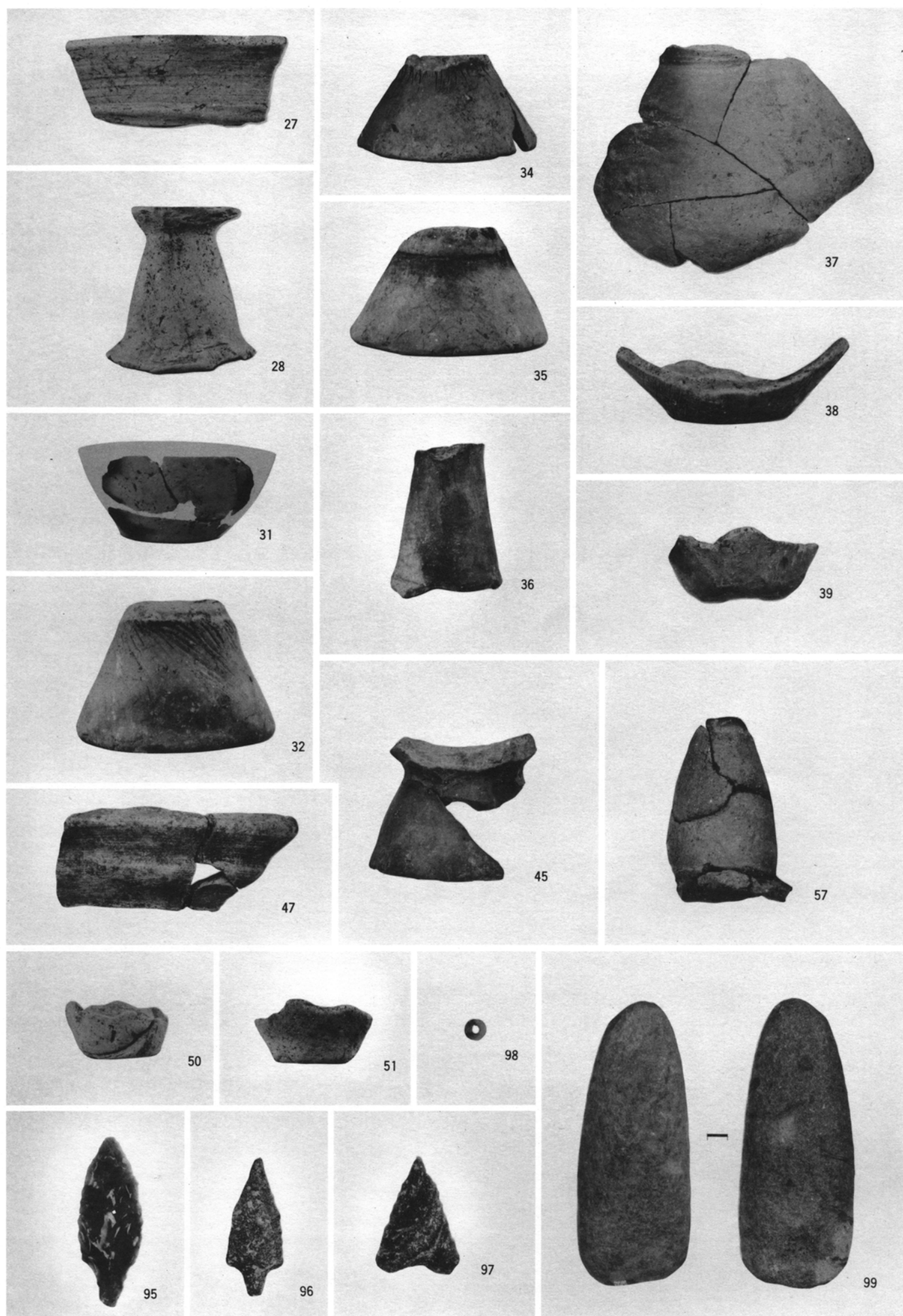
D区全景
(西より)

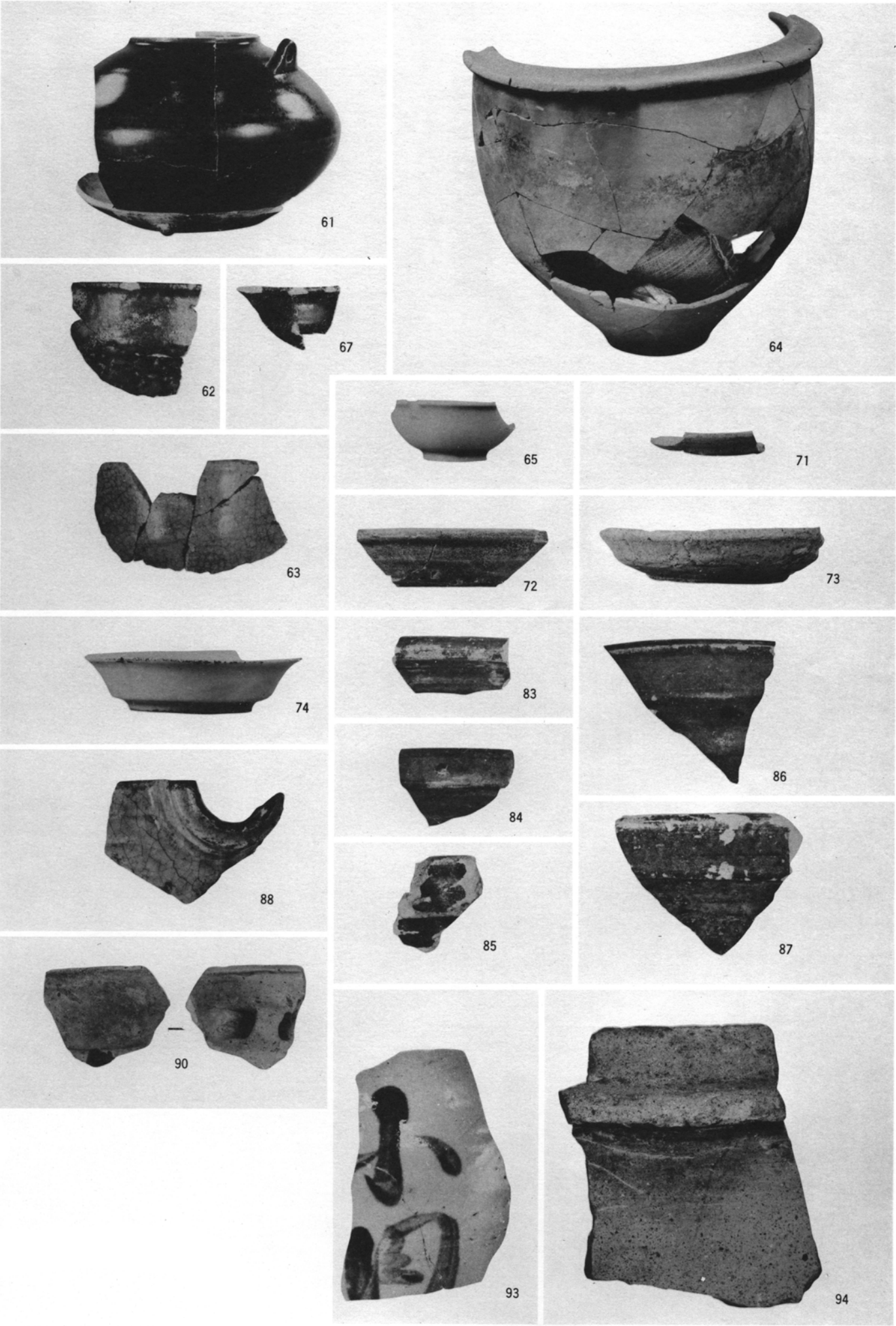


E区全景
(西より)









64は1/8 他は1/2縮尺

(財)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第12集

月縄手遺跡・貴生町遺跡

1990年3月31日

編集・発行 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

印刷 (株) ク イ ッ ク ス
